愛情と憎惡

精神分析

★第7巻・第7號★昭和14年・7月★

一九三八年度フロイド賞牌・表裏（高村光太郎氏原作）

東京精神分析學研究所出版部

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可・昭和十四年六月廿五日印刷納本・昭和十四年七月一日發行・毎月一回發行

月刊歴史雑誌

日本の風俗

定價五十錢

發行所　東京市瀧野川區上中里町六十二番地
日本風俗研究所
振替東京一六三四〇七

愛情と憎惡の關係・內容目次

『精神分析』第七巻・第七號

月刊誌
正誌・冊子・隔月刊
正誌五十錢(送共)

直接購讀者に限り
半年六冊一圓五十錢
一年十二冊三圓(送料共)

昭和十四年五月　オナニーの研究　第七卷第五號

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

『精神分析』第七巻第七號巻頭言

☆愛憎の彌次郎兵衛

愛憎は左右にふり分けて均衡を保つてゐるのがどうやら一番健康な心理的態度であるらしいが、これはとかく一方に傾き易く、愛の方にばかり傾いてゐると、その反動として急に憎悪の方が重くなる時が來、バランスが破れて一切が駄目になつてしまふ。女心にはとかく、さう云ふ甘い病理性がある。

近頃、永年貢いで學位を得させた愛人に裏切られて相手方一家鏖殺を企て、菓子にチフス菌を注射して送り、多數の第三者に迷惑を掛けた失戀女醫の犯罪事件が世間の注目を惹いたが、東朝家庭欄で諸名士の意見を徴したところに依ると、何れも全然女に同情を表してゐなかつた。併し私の見るところでは、男の名士たちはやはり男としての立場からのみ見てゐて、女の立場には全然心盲であるし、女の名士たちは同じ女性として犯罪であるから自分も同類に見られては困ると云ふやうな淺はかな虚榮心が先に立つてゐて、とんと事件を正解してゐないやうに思はれた。犯人は男から七千圓の金を返して貰つてゐる。そこで帳消しだと思ふならば、あまりに金とリビドーとを同一視するものである。月謝を支拂つてあるから師の恩はないと云ふ不良少年の口調と同じではないか。女にも無論種々の缺陷はあつたらうが、抑々そんな女から貢いで貰つてまで學位をとりたがる男の根性と、人の世話になれば金では決濟にならぬリビドーのあとくされが殘ると云ふことと位の分らぬ心理的盲目とに對して、何故に人々の批判は差向けられなかつたのであらうか。

愛憎心理の構成に就いて

高水力太郎

一、愛憎心理の種々な説明法

愛憎心理の構成と云へば、從來分析學的文献に親しんで來た人々は直ちにアムビヴレンツ（愛憎並存）と云ふ語を想起するであらう。それは極めて自然であつて且つ正しいのである。併しこの心理構成はこれをアムビヴレンツとして研究するのみでなく、もつと別方面から研究する餘地あらば研究して見ることもまた必要でなければならない。

アムビヴレンツと云ふ語は、讀者讀賢も承知せられる如く、元來ブロイラーの造語であるが、フロイドに於いては主としてエディポス・コムプレクスに由來するものとせられて來たやうである。エディポス・コムプレクスに基く愛憎並存とは、子供がその兩親の何れに對しても同時に抱く相互に矛盾した二種の感情（愛憎）が無意識面に於いて互に矛盾することなく並存すると云ふのである。故にこのやうな場合には、愛憎並存と云ふ判然たる譯語を與へておく方がよいと思ふが、これを狹義に於ける概念内容とすれば、廣義に於ける概念内容の場合には、相反並存と譯して單に愛憎二種の感情の並存のみならず、快苦、能働受働、露出窃視など部分本能的な性質をも包含するものとしての意義を排斥せしめないやうに努めるのがよいと思ふ。

エディポス・コムプレクスに基く愛憎並存成立の契機は、男兒に於いてその父親に對する場合には母親の愛情をめぐる競爭者として敵意を持ち、他方强力なる同性としてこれに同一化（愛）を寄せるやうになるところに存すると云へるであらう。母親に對しては、最初のリビドー的交渉の對象として愛情を寄せると共に、父親への裏切者として反感（憎）を持つに至ると説明せられるであらう。女兒が父親に對する愛情は最初の異性としての本能的なものであり、その反感（憎）はその愛情を母親に卽して裏切るものとしてこれに寄せられるに至るのであらう。女兒が母親への愛情は口唇期のもの以外に比較的遲く、母親

の立場に同一化し得る頃までは恐らくは不可能であるらしく、その憎惡はペニスナイドの發生と殆ど同時であると云へるであらう。ペニス缺如の責任が無意識的に母親に歸せられるためであらう。エディポス前期の定着は男女兒何れに於いても殆ど專ら母親を中心として構成せられるものゝ如くに考へられる。母親は一身以て男女兩性の具現者と見られ、觀世音菩薩の中性的姿體はこの期の空想の具象化であると見做すことも出來よう。後に紹介するジョン・リヴィヤ女史の愛憎の說はやゝこのエディポス前期的見解に近いものがあると云ふことが出來よう。

愛憎並存の部分本能的說明としては、まづ口唇本能的定着からの試みがある。卽ち、母の乳房を吸ふことの取込みと嚙みつきと相反並存である。乳を吸ひ込むことは最初の同一化であると共に、乳房に嚙付くことは最初の口唇サディズムの現れである。次に、肛門段階の定着からの試みがある。卽ち、肛門の亢奮は一方保留の快感(愛)であると共に、他方排斥の喜び(憎)あるが故に、この部分の本能もまた愛憎並存の心理機構の說明には等閑に附すべからざるものであらう。

次に紹介するジョン・リヴィヤ(John Riviere)の愛憎心理說は、右の何れの說にも屬せざる獨特のものである。而も依然、純粹に精神分析的見解ではある。從來の諸說の內、何れにやゝ近いかと云へば、右に旣に言及した如く、エディポス前期的定着說に近いと云へるであらう。併しエディポス前期說のやうにリビドー的な說ではなく、もつとナルチスムス的な考へ方に依るものであると云へよう。換言すれば、愛憎の起源をもつと主觀的に認めてゐるのである。端的に云へば、憎惡は主觀的苦痛傾向の投出であり、愛情はその苦痛を自己に寬和するための努力であるとするのである。この說に最も近いのはフェレンチーの『現實感の發展段階』と云ふ劃期的な論文に說かれてある幼兒心理說であらう。この論文は旣に本誌第五卷第六號の卷頭に譯出紹介してある故、讀者よろしく參照せられたい。なほリヴィヤー說自體に就いては、詳しくは、次の紹介文に就いて研究して頂きたい。この紹介は女史とクラインとの共著“Love, Hate and Reparation”(London, 1937)の前半、女史執筆の部分「憎惡と貪慾と攻擊慾」に基き多少の敷衍を試みたものである。

因みに、ジョン・リヴィヤ女史は幼兒心理の分析者として有名なメラニエ・クライン(Melanie Klein)女史の恐らくは娘であつて、クラインと共に目下英京ロンドンにあつて兒童分析の實際に當つてゐる。クラインは元來ハンガリーの出身者であつて、フェレンチー門下の逸材である。ジョン・リヴィヤにフェレンチー學說の傳統が流れてゐるとしても、決して偶然ではないであらう。

二、愛憎の力と環境の力

我々の日常生活に表はれる本能感情の二つの源泉は食慾と性慾——即ち自己保存本能と種族保存本能——とである。而もそれ等には本質的には快樂が附隨してゐるので、人間の生活は二重の目的に向つてゐるわけである。從つてこれ等兩種の本能を滿足させる努力の中に、人間の種々な幸福と不幸とが胚胎し來るのである。さう云ふ次第であるから、自己保存、種族保存、快不快、愛憎などの各個人相互間の關係を仔細に記述し研究して見ると云ふことは、とりもなほさず人間生活のあらゆる樣相を描寫し説明することに外ならないのである。それほどの大きな仕事が僅の文字を以てなし遂げ得べきことではないから、本論の企圖は當然完全を主張することは出來ず、多くの説くべくして説かずに放置してある隈の存すべきは蓋し已むを得ない次第であらう。たゞ個人また或る型の人々の行爲に如何なる姿で本能感情が現れるかを明かにして見たいと思ふのみである。

大まかに云ふならば、憎惡は破壞的、分解的な力であつて、攻略、死などの方面に向つてをり、愛は調和的、統一的な力で、これは生と快樂との方に向つてゐる。併しかう云つてしまふと直ちに都合の惡い點が氣付かれて來る。例へば、憎惡に密接に關係してゐる攻撃慾はその目的に於いても、必ずしも全然破壞的、苦痛的であるとのみは云ふことは出來ない。また愛は生活力から發源し種々の慾望と密接に結びついてゐるものではあるが、攻撃的又は破壞的となつて作用することも固よりあり得る。生活の基本的な目的は愉快に生きることとである。この目的を果すために人々はみな自分の内なる破壞的な力を處理し案配し、人生に於いて彼が獲得し得る最大限の安定と快樂とを獲得し得るやうな風にその破壞力を發現し、轉換し、混和するのである。そのやり方には無限の複雜さがあり、微妙にして錯雜な方法で適用せられる。各人に於いてこの力の現はれ方がそれぞに違つてゐるのは、主として相異る二要素のさせる仕業である。その二つとは愛憎の傾向の力(我等の内なる本能感情力)と我等の上に生涯に亙つて影響を及ぼす環境の力とである。而もこれ等二要素が、我等の生れて以來死ぬまで、不斷の相互作用を及ぼしてゐるのである。我等はこれから、我等の内にある憎惡と攻撃慾と云ふ危險な力に對して安定を得るために我等が如何なる方法をとつて來たか、その方法の二三を記述しようと思ふ。もしこの二つの力があまりに强過ぎると、相手を苦しめ攻略し、或は遂に絶滅をさへせしめるやうになるであらう。

三、攻撃慾と二種の本能

攻撃本能は、少くとも防衛のための攻撃本能は、人間並びに大抵の動物に於いて内具するものであることは、一般に認識せられてゐる。また攻撃的衝動が人間心理に於いて基本的な要素であることも、明かなやうに思はれる。これを大にしては國際關係を見ても、またこれを小にしては育兒室に於ける子供等の行動を見ても、直ぐに首肯出來ることである。併しそのやうな外的な證明でなくて、内的な證明でも我々は自ら省みて認めることが出來るであらう。現に普通の人々ならば、不機嫌、利己心、卑劣、貪慾、嫉妬、並びに敵意などが身邊内外に渦卷いてゐることを自ら經驗してゐないわけに行かないからである。そのやうな人々は日常生活の不幸の大部分は以上の如き諸感情から生ずるものであることをよく知つてゐる。我々の大部分は我々の時間と精神力の幾分を割いて、そのやうな諸感情が他人に依つて示された場合の悪効果を克服しようと、また緩和しようと試みざるを得ないのである。

我々はまた攻撃慾、殘酷慾、利己慾が快感や滿足と密接に結びつき、從つてその滿足には魅惑や亢奮が伴ふものであることをよく承知してゐる。闘牛、拳闘、賭博などにはその滿足を與へるものがあるのである。小さな例では、目上の人の言葉に口答へする時の目下の者の嬉しさうな様子、所謂北曾笑みは、その眼の中に何としても匿すわけに行かない。かう云ふ快感が攻撃感情に密接に結び付いてゐるので、攻撃慾を抑制することの困難なのは或る程度まではこの快樂のためであると云へるのである。血を湧かせるやうな殘酷な話、繪畫、映畫、スポーツ、出來事、などは、この傾向を昇華させるとか、轉向させるとかする道を心得てゐないあらゆる人々にとつては多少とも亢奮を與へずにはおかない。大抵の人々は何かの障碍を乘越えたり、自分の進むべき道を濶歩する時に、意氣揚々たる歡びを覺える。また攻撃慾は生存競爭に於いても、何らかの形で或る役割を果すことは明かである。あらゆる仕事に於いて、また快樂に於いても、十分な攻撃慾を持たない者、障碍乘切の慾望を持たないものは、そこに大切な德を缺いてゐるのだと云ふことを我々は明かに認める。そこで我々はかう云ふことが出來る、自己保存本能と愛慾の本能とは兩者ともそこに多少の攻撃慾が混入してゐなくてはならない。さうでなければ兩者ともその滿足を得るに至らない。つまり、攻撃慾は兩種本能が實際に機能を果す上に缺くべからざる本質的な部分である。

ところがさて、そのやうに攻撃慾が自他の内にそのやうに存在してゐることを知つてをるし、また知つてをるべきではある

が、全體として攻擊慾そのものを我等は好まないのだ。そこで攻擊慾の重要性を我等は無意識的に引下げ、又は安く見積るやうになるのである。我々はそこから目をそらし、故意に人生の全的觀照の圈外にそれを置かうと努力するのである。漠然と網膜に映じてゐるので身近く生々とした實感が迫つて來ない。從つてそれが判然と目に見えるやうなことがあるとハッと驚くのである。このやうな事實確認への無意識的拒否はその事實に對する我々の恐怖を處理するための極めて原始的な方法であつた。それは單に人間にとつて慰安的であると云ふに過ぎなくて、現實的に何ら人々を益するものではない。それのみならず、科學的研究の一つの條件は或る事實（例へば人間性）の或る部分をとり出して仔細に研究し、他の部分はこれを放置すると云ふ譯に行かない點にある。そこで科學としての精神分析學は、この萬人周知の而も不快なる事實こそ普通に人々の考へてゐるより以上に一層重要であり普遍的であり、且つ動的であると云ふことを知るに至つたのである。

四、缺損感の投出としての敵愾心

敵愾感情が如何にして生ずるかを明瞭に説明する一つの道は、少くとも多くの場合に於いて、この感情を抱く人々が自分の境遇や生活條件に就いて不平不滿を持つてゐると云ふ事情に依る道である。それが生活に必要なものであるか、或は何かの快樂を持ち得ないか、何れにせよ、彼等は一種の缺損感を持つてゐるのである。人間にせよ動物にせよ、彼が他から攻擊を受けたり、何かを盜まれようとしたり、傷けられようとしたり、つまり缺損感を與へられようとすると、卽ち彼は猛然として攻擊慾を振ひ起すやうになるのは自明である。併しそのやうに外部からの壓迫に依る缺損感以外に、また別途に依つて缺損感を持つやうになることがある。我等の內に滿たされざる慾望があつて、而もそれが十分に激しいものがある場合には、外部から攻擊を受けた場合と同樣に、攻擊慾を振ひ起させるのである。このやうな人間的反應が經濟問題の上に大きな影響を及ぼしてゐるのである。或る民衆又は或る階級に生活支持のための資料が缺けてゐる場合には、而も彼等が無氣力でもなく絕望的にもなつてゐない場合には、彼等は猛然として攻勢をとつて來ることは周知の事實である。そのやうな事情の場合には攻擊慾の或る形は生命あることとの標徵である。それが必ずしも實際的な反應であり、成功する反應であるとは云はないが、少くとも心理的顯現であつて、缺損感補償への一つの努力である。

經濟學者たちが普通人よりも一層よく知つてゐる今一つの點は、人間の組織がその周圍に依屬してゐる程度である。政治組

織や經濟組織が確乎としてゐる時には、我々は自分等の必要を滿すべき自由と機會とを大いに有するやうに思はれ、我々は自分等の屬してゐる組織に依存してゐることを、概して云へば感じないのである。但し地震や罷業の場合はこの限りでない。さう云ふ非常の場合には、我々は如何に自分等が自然力に依存し、また他の人々に恐るべき程度にまで依存してゐるかをまざまざと感知し、不性無精ながら承認しないわけに行かないのである。他人や自然への依屬、依存は危險であると感ぜられる。何となれば、相手の如何に依つて自分の立場がぐらついて來るからである。そこで各人が自主獨立しようとの到底實現不可能な慾望が起きて來る。さうして我こそは獨立自尊者だと云ふ愉快な幻覺が生じて來る。

五、他人への依屬と攻擊慾

併しこゝに一つの大きな例外がある。その例外の場合に於いては、我々の境遇の如何を問はず、我々は他人に依屬することを感ぜざるを得ないのである。それは戀愛關係にある場合である。その時、我々は明かに他人に結び付けられてゐるのである。我々が他人に依屬してゐるのは、我々の生活のあらゆる樣相に於いて必然の條件である。例へば自己保存にしても、性愛の滿足にしても、快樂の追及にしても……。と云ふことはつまり、我々が生活して行くには、何らかの程度の共有、頒前、何らかの程度の待望、奉仕、何物かを提供し寄與するのが必要だと云ふことを意味する。併しこのやうに與へることは集合的確實性を增進するものではあるが、その代り個人的確實性はそのために損傷せられることは申すまでもない。そこでこのやうな依屬的關係それ自身が抵抗や攻擊的本能感情を誘發するやうにならずにおかぬのである。

ところで精神分析の研究結果に依ると、この依屬の不安は我々萬人が極幼兒時代に、母の乳房にすがつてゐた時代に胚胎してゐることが分つてゐるのである。母の胸にすがつてゐる嬰兒は自分以外の或るものに完全に依屬してゐるのであるが、少くとも始めの內はそれを不安に思つてはゐない。何となれば、彼等は自分が依屬してゐるものだと云ふことを知つてゐないからである。實際、嬰兒等は自分自身以外の存在を知らないのである。母の乳房は彼らにとつては自分自身の一部分——否、むしろ始めは一つの感覺に過ぎないのである。彼らはたゞ自分の慾望の充足せられることを期待してゐるのみである。彼らが乳房を求めるのはこれが好きだからである。云はゞそれに吸付いて乳を吞み、飢を醫したいからである。ところがもしこの期待が外れ、慾望が充足せられなかつたならば、どうなることであらうか。或る時期に達すると、嬰兒は自分の依屬を知るやうにな

る。彼らは自分だけで自分のあらゆる慾望を滿足させることの出來ないことを知るやうになる。そこで彼らは泣き叫び喚く。彼は攻擊的となる。彼らは憎惡と攻擊的慾求とを以て自動的に勃發して來るやうになる。もし彼が不足と孤獨とを感ずるならば、自働的な反應が生じて、それがやがて猛烈な勢となり、攻擊的な激怒は苦痛な、勃發的な、熱い、息苦しいやうな、締めつけられるやうな感覺を齎すやうになる。さうしてそれ等の感覺のために愈々缺乏と苦痛と不安とが增大して行くのである。嬰兒は自分と自分以外とを區別することが出來ない。彼自身の感覺が彼の世界であり、彼にとつての世界でもある。で、彼が寒いとか、空腹だとか、淋しいとか感じたならば、その時彼にとつては世の中に乳もなく、安泰もなく、快樂もなく、即ち世の中に一切の價値あるものが消失したと云ふことなのである。また彼が慾望や憤怒に依つて虐まれ、猛烈な叫び聲を擧げ、苦しい排泄があつたりすると、世の中の總てが苦痛そのものとなる。所謂三界は火宅であると云ふことになる。かう云ふ經驗は幼兒として我々總てが味つて來たことで、これは我々の全生涯に亙り大きな心理的結果を及ぼすことになるのである。人類が所謂進化的發展を遂げて來たことに就いて、右のやうな心理的經驗は與つて大きな力を有するもの丶如くである。何となれば、文明の進步は快樂追及よりも不快逃避によつてより多く促進せられるものだからである。人間は他の動物に比して肉體的にも精神的にも一層長く依屬的であると云ふことが、愈々右の如き不安心理を促進せしめるのである。

嬰兒時代の右のやうな苦痛は、人間が最初に味ふ一種の死の如き經驗である。それは自他の一切が存在しなくなつたと云ふことの認識である。さうしてこの經驗に依つて、人々は「慾望」と云ふ形で「愛」を知るやうになり、「入用」と云ふ形で「依屬」を知るやうになるのである。それと同時に苦痛と破壞の脅威とを內に外に感ずるのである。嬰兒の世界はこれを統御するに由ない。罷業と地震とは彼の世界に起るのである。而もそれは彼が愛し慾望するが故である。而もそのやうな愛は苦痛と裏切とを以て報いられるのである。が、彼は自分の慾望又は憎惡を統御したり根絶したりすることは出來ない。このやうにして彼の安泰は脅かされるのである。

六、苦痛の回避と攻擊慾

この苦痛な狀態への直接の反應は、彼がこのやうな苦痛を經驗した以前の幸福な狀態を何らかの程度で再現し復活させようとの試みである。このやうにして我々は「確立」と「安全」とを求めるやうになる。このやうにして我等は我等の自己保存と

快樂とを確保するために一生の努力を開始するのである。但しその場合、我々の内なる破壞的な力を出來るだけ刺戟しない方法を選ぶのである。自己の內の破壞的な力を刺戟すれば、それはやがて自分以外の者に及んで行くからである。

とは云へ勿論、右に述べたやうに早期の本能感情上の經驗並びにそれに續いて起つて來た適應の努力が記憶に、意識に殘存してゐるわけはないのである。我々の心理の無意識的な部分は、そのやうな感情や經驗の貯藏庫である。そこを支配してゐる愛憎、恐怖などの極一小部分のみが、我々の生涯の間に、我々無意識の閾上に浮び上つて來るのである。これ故に、以上私が述べて來たものゝ大部分は、常に無意識の內に沈潜してゐるのである。精神分析は人間の行動の動機を研究するものであると云ふことが出來るであらうが、それ等の行爲の大部分はこれまで何とも說明のつきかねたものであつた。何となればそれ等の大部分は無意識の內にあつて、我々に知られなかつたからである。

成人が感じたり表現したりする憎惡、攻擊、羨望、嫉妬、並びに貪慾の類は、大抵は、幼兒として彼等が持つた早期の經驗、並びにその經驗を何とか處理しようとした（處理しなければ不快であるから）努力、これ等二つのものゝ何らかの變形であり派生であると云ふことが出來る。つまり、成人に於けるこれ等の本能感情がよしんば全然攻擊的、憎惡的であるやうに見えるにもせよ、それ等は實は幼兒期に經驗した單純な不安、不快感情の無意識的變形であり妥協であるのだ。生活を確立しようとの我々のあらゆる方策の中には、何らかの方途で愛慾衝動（エロス、生の本能力）が利用せられて結びついてゐる。生命力の利用と云ふことも、時には非常に歪曲せられた、それと見定め難い形をとつて現れることもあるにはあるが……。

七、嫉妬と屈辱感

愛憎心理の最も端的な現れとして、次に我々は嫉妬と云ふ現象に就いて研究して見たい。嫉妬は普通に人々の考へてゐるやうな單純な心理過程ではない。嫉妬は實際、前後の事情を考慮に入れて尤と思はれるやうな場合にのみ起きるとは限らない。嫉妬が起きる最も典型的な場合は、戀愛に於いて競爭相手のある時である。讀者諸君は筆者がこゝでエディポス・コムプレクスを持出し、一切の嫉妬は幼兒期に於ける最初の性的競爭心に胚胎すると論ずるであらうと期待せられるであらう。それも勿論であるが、それのみで說明しきれない。我々は勿論、幼兒期の經驗を多少とも反復するものではあるが、併しそれとて個人により必ずしも同樣ではない。且つ幼兒期の經驗とて單に面白半分に反復するのではない。それの反復はそれを最初に行つた

當時の理由と同じ理由あるが故に行ふのであつて、人々が既に成人してゐても同じやうな方法しか見出し得ない場合にその途を選ぶのである。

愛するものを失つたこと、又は失はむとすることに對して憎惡及び攻撃慾を以て反應することが嫉妬である限りは、それは極めて單純平明なことであつて、不可避なことでもある。併し嫉妬に於ける一つの特徴は屈辱感がそこに必然的に隨伴することである。この屈辱感は本人が自己信頼感と確立感とを損傷せられるからである。自己信頼感の喪失は嫉妬する者が常に必ずしも意識してゐるとは限らぬものである。嫉妬するものが自省して見て、自分の憤怒や攻撃慾が激しければ激しいほど、その人の屈辱感は少いのである。その反對に、攻撃慾や憤怒が大きければ大きいほど、彼の心境は悲慘であり低迷してゐるのである。嫉妬する者は卑小感と劣等感とを持つてゐるのが當然であつて、その上になほ（それほど意識的にではないが）自巳を無價値で、罪ある者と感じてゐるのである。これは如何に說明せられるかと云ふと、もし彼が愛せられてゐないならば、或は愛せられてゐないと思つてゐるならば、その事は彼の無意識にとつては、彼が憎まれてゐると云ふことを意味するのである。彼が自分の愛するものに捨てられたとか無視せられたとか云ふことは、彼が彼女にとつてあまりよくなかつたと云ふことだと感ぜられる（無意識的にせよ、意識的にせよ）のである。自分が愛せられるに價しないと云ふことの考へが彼の內に惹起す沈鬱感と無力感と寂寞感とは堪へ難いものである。この事からして嫉妬の苦惱の如何に痛ましいかゞ說明せられる。さうしてこの痛恨から遁れようとして彼は他人を、この場合戀敵を、憎み批難するのである。自分の存立が他人に依屬してゐることとの不安不快に對する無意識的自覺が早期幼兒時代の仄暗い記憶の中から蘇生し來り、その危險感への防禦の努力が再び試みられる。そこでその內的機制の外界への投出が直ちに始められる。惡と破壞力とが戀敵に於いて幻視せられ、戀敵は批難と憎惡とを浴せかけられて、本人は何ら良心の苛責を覺える事はない。

八、外界要求の二つの目的

我々が嬰兒時代に怒りと云ふ危險な苦痛な狀態を我々自身の內にあるべきでなく他人の內にある如く投出し、他人と危險狀態とを同一視する必要のあつたことは、抑々他人の存在を認識しなければならなかつたことの主要な刺戟の一つであつた。換言すれば、我々が外界と他人の存在を認めなければならなかつた興味の全體は、要するに、我々が彼等を必要としたと云ふこ

との上に築かれてあるのである。で、我々は二つの目的のために外界と他人とを必要とするのである。その一つは我々が・自己保存のためにも快樂のためにも彼等に依つて滿足を得なければならないと云ふこと。今一つは、彼等を憎むことに依つて我等の内なる惡（いろ〳〵の危險が伴つてゐる惡）を我等自身の内から放逐してこれを彼等の上に押付けなければならないからである。嫉妬と云ふ心理過程が何故に屢々何らわけのないところに指向けられるかの理由はこゝに存すると思はれる。何人かゞ自分自身を愛や善に價しないものだと無意識的に考へるやうになり、さうしてこの缺陷が戀愛の相手に依つて發見せられるやうになる、そのために自分に被害があるかも知れぬとの心配のある時には、彼は嫉妬的となり、愛の缺乏をその相手に求めるやうになり、かくてそれを自分自身の内に發見しないやうになる。さうして邪惡は自分自身の内に存するのではない、戀敵の内に存すると思ふやうになる。

「あなたは私を愛してゐない」と云ふ批難はあらゆる愛人たちの繰返す言葉であり、若い夫婦が相互の氣持のしつくりして來るまでには屢々通過せねばならぬ不幸な繰言である。悲慘な感じ、罪障感、後悔したり涙を流したりしての罪障消滅、さうして遂に許すことに依つて一切が解消する、そのことは明かに、自分自身が愛せられる價値のないと思つてゐること、自分が無價値だと思つてゐることのために、夫婦間の爭が生ずると云ふことを示してゐるのである。

例へばこゝに或る男がその愛する女を失つたとする、或は失ふだらうと思つてゐるとする。その時彼は彼女を失ふことに對して反應してゐるのみならず、自分自身の價値を自分に傷つけられてゐるものとして、或は自分自身の心的確立を動搖せしめられてゐるものとして、反應してゐるのである。彼の自己評價は彼の體力、知力、性的能力、道德力、富力などに依つて定められてゐる。これ等諸々の力は自分の愛せらるべき資格（善）の象徵であつて、その程度は各人に依つて相違してゐるが、何れにせよ萬人に於いて各人が自己の内なる邪惡な危險力に拮抗すべき自己を守り防禦する資材なのである。性的對象は（殊に相互の間に多少の義務と責任とのある落着いた關係の夫婦に於いては）我々の内なる惡を克服する「善」が勝利を得てゐることとの大きな證據であり確認であつて、このやうな證據や確認こそは我々萬人がこれを求めてゐるものであり、またそれに依つて我々の心の平和が保たれるものなのである。

九、結婚心理の一要素

たゞこの見地からのみ見ても、文明社會に於ける結婚生活は興味ある問題である。自分の價値に就いての確證を得たいと云ふこの動機が、男女結婚の決意の中に一つの役割を果してゐることは明かであつて、それに比すると戀愛感情や性的動機は比較的小さな動機をしかなさないかも知れない。彼等の結婚心理を精神分析して見ることとなしには、比較的正常な人々に於いてこれ等二種の動機が如何なる割合で働いてゐるかを知ることは不可能であらう。何となれば、我々が眞の愛と呼ぶところのものはこれ等二種の動機が混淆し不可分離になつてゐるものであつて、それ等の場合に於いて心の平安と幸福とは何處から得られるかと云ふに、それは男又は女が有する愛情が自分自身を滿足させるのみならず、相手をも滿足させることからである。相互の愛情が相互に二重の確證を供するのである。自分の愛情に相手の愛情が加はつて自分の愛と幸福との貯藏が倍加し、かくて內的の苦痛と破壞慾と缺乏とに對する保證も倍加せられるのである。また相互の性的要求を充足し合ふことにより相互の性的慾望を變形し、自分の內なる苦痛感受性と破壞慾的源泉とを却つて絕對的快樂たらしめるのである。このやうに愛情に於いて相手を持つことに依つて自己保存と性慾の兩本能を調和させ統一させることとの滿足を得るのである。かくして破壞衝動と喪失、孤獨、無力化などの諸々の危險とに對する保證が增進するのである。そこに最小限度の惡意と攻擊慾とが働いて、なごやかな享樂の團欒が成立し、依屬の利得が極度にまで味はゝれる。それにしても、安全で建設的な形式での攻擊慾の快味は何らかの方途で十二分に獲得せられねばならない。自分自身の苦痛傾向をあまりに甚だしく投出するところから生ずる、他人への不安と不信とがある場合には、結婚に於ける依屬感情は恐怖と憎惡とを生ぜしめ、そのためになごやかな愛情的團欒は不可能となり、貪慾と拒否と分裂とに滿ちた不德な關係が再び出來上ることになるのである。

十、結　語

本能感情の中から愛憎と云ふものを特にこのやうに不自然に取出して論ずると云ふことは全然人工的なことで、そこにいろ〳〵な無理な點が生じ、人生そのものを全的に彷彿する所以ではないと云ふことは心得てゐて貰はねばならない。右のやうに論じて來たことに依つて愛憎の問題に就いて讀者諸氏が氣落ちせられるやうなことがあつては、論者の心外とするところであると、ジョン・リヴィヤ女史は云つてゐる。愛憎の心理はもつと徹底して研究せねばならない分野である。我々の心理に於いて愛憎の過程が如何に必然的な威力を具へてをり、またそれ等が種々な過程として變展し得ると云ふことを容認し得るやうにな

つたならば、我々は原始人以來持ちつゞけて來た愛憎に對する恐怖心とそのために示した種々な反應とを放擲し、支配し得るやうになるであらう。さうしてそれ等の自然的な力をして何らかのはけ口を見出さしめ、これを十分に用ひて建設的な道に向はしめることも出來るであらう。そのやうになるには偏に理解と云ふことに俟たねばならない。理解は寛容から來る、卽ち想像力と同情と愛とである。分析者の仕事は結局、宗教家のエロスと藝術家の創造力とを併せ有するものでなければなし遂げ得られないところであらう。（完）

愛憎心理の教育的操作法

大槻憲二

一、叱責の教育的効用

幼兒の取扱はたゞ愛の一語にあると說く教育家がある。無論、その通りには相違ないが、愛と云ふやうな常識的な言葉、極めて複雜な、時に相矛盾する諸々の概念內容を並有する言葉を以て教育的取扱法を論ずることは、常識論としては差支へないかも知れないが、學問的な說としては容認し難いのである。愛を以て取扱ふと云ふことは、更に突込んで質して見ると、叱らないで育てることであると云ふ答辯を得る場合がある。兒童の善性を信じて叱らないで教育すべきであると主張せられる場合がある。こゝでまた善性と云ふ常識的な言葉の概念的內容が、學問的な立場では、問題にすることなしに通過させるわけに行かなくなる。

兒童の善性を信じ、愛を以て育てよ。誠に申分のない說であつて、我等分析學徒もまた或る意味では確にさう云ふ精神の下に教育に當らうと思つてゐるのである。但しこの場合、我等の理解してゐる善とは純粹に道德的な意味での善ではなく、現實生活への順應能力と云ふ意味である。純粹に道德的な意味に於ける善性ならば、我等は心理學徒としてさように樂天的には、一般の兒童に對して期待し難いのである。我等は性善說者でもなければ性惡說者でもない。善惡はあまりに屢々、主觀的、利己的判斷の結果であるがためのみではなく、人間の所謂善性は、心理學的に硏究して見るならば、實にその所謂惡性の變形であつたり、裏面であつたりすることをあまりにも我々は明白に認識し得てゐるからである。心理學的術語を以て云ふならば、例へばサディズムや攻擊慾は、昇華せられて正義的勇氣や積極的努力主義となるであらうが、病的となつては變態的な加虐慾となることがあるが如きである。

殊に幼兒教育に於いて困難で、デリケートな注意を要するのは、彼等の攻擊慾を如何に處置し、指導すべきかと云ふことであると私は信ずる。子供はたゞ愛を以て叱らないで育てればよいと云ふが、實際に於いて、絕對に叱らないで育てられた子供等の如何に多くが神經症者となつてゐるかを發見するに及んで、私はさう云ふ常識的な敎育方針に大きな疑問を持つものである。さう云ふ敎育方針の主張者は、彼自身が幼兒に於いてあまりに慘虐に叱られ過ぎたゝめに、その反動として、現在の幼兒に（その幼兒一般に彼自身を同一化して）極端に被虐的態度を以て臨まうとするやうになつてゐるのではなからうかと思ふ。併しそれがもしその通りならば、その態度には反動としての不自然な、極端性が存してゐなければならない。そのやうな自己の過去の經驗に依る無意識的定着から由來する反動性を分析解消するまでは彼自身の敎育方針も所詮健全性を持ち得ないことは、また如何ともすべからざるところであらう。

なほ私は叱ると云ふ事の意味に就いて、こゝにも少し詳しく論じておいて見たい。叱り過ぎることとの弊害に就いては敢て論ずるまでもないであらう。併し世人は極端に叱り過ぎることとの弊害を一度見せつけられると、その無意識的盲動性によつて今度は逆に極端に叱らなさ過ぎる事の弊害の方に反動的に走つて行くものである。それが心理の無意識的な動きに對して分析的自覺なき人々の缺陷である。叱り過ぎることとの弊害は兒童の攻擊慾を外に引出し過ぎて內に向ふの餘地なからしめることに存する。攻擊慾はこれを時に半ば外に向け、また時に半ば內に向け、その內外への轉向が自由であり微妙であるところに健全性があるのであつて、外に向つて出たつきりになつてゐたり、內に向つて引込きりになつてゐることは不健全である。子供はあまり叱り過ぎると、彼等の良心（超自我）は彼等の自我に加擔して、これだけ叱られたのだから、我等はまた惡い（と叱責者の云ふ）事をする資格（權利）が出來たと考へるやうになる。これは當然惡い事を制するやうに自我に命ずべき筈の超自我が、外からの叱責のあまりに甚だしく不合理な場合には、自我と共同の戰線を張つて、外敵（叱責者）に當るやうになることを意味してゐるのである。自我と超自我とはそれ〴〵に別の機能を果すことが出來、而も兩者の機能がそれ〴〵に容易に妥協點を見出し得ると云ふのが、健全な心理狀態である。然るに兩者が不斷に妥協し馴合ひ、各々獨立した機能を失ふことは心理の病理性である。

また子供をあまりに叱らな過ぎる時は、子供の攻擊慾は外に向ふ機會を失ひ、不斷に內に向つてをつて、彼等自身をして自滅的衝動に不斷に身を曝すやうになるか、或は窮鼠却つて猫を嚙む程の反噬的態度の陰性的攻擊慾を外に向けるやうになる。

これ等二種の病理的攻撃慾の形態に就いては、私が後に實例を擧げて詳論するであらう。

その前に、私はこゝでなほ進んで叱ることとの意味に就いても少し論じておきたい。叱ることとは、目色を以てすること、聲を荒らげてすること、手を下してすることなど、その形式には種々あるが、その最も原始的で、最も顯在的な方法は手を下して毆ることとである。手を下して毆るなどゝ云ふことは、絕對に避くべきことのやうに普通の教育家たちは考へるかも知れないが、自分の子供に對してならば手を下すことを辭さない人々も、他人の子供に對しては殆ど手を下さないのが常であつて見れば、凡そ子供に對して手を下して叱ることとの出來ない人は子供に對してさへ遠慮してゐて、本當に眞情を表現するべき相手を全然一人も持たない非常に不幸な人であるとも云ひ得ると思ふ。眞に愛し合つてゐる親子の間ならば、たまに毆られた位の事はすぐに相互に忘れて了ひ、一二分の後には兩方ともケロリとして何のわだかまりなく語り合ふことが出來ると云ふ如き狀態であるべきだと思ふ。さう云ふ家庭が實際に存在してゐることは私の保證し得るところである。私の知つてゐる或る別の家庭では、その夫君が非常におとなしい人で嘗てその妻君を打擲したことはなかつたが、妻君は快潑な人で且つ夫を非常に愛してはゐたが、夫があまりに優しすぎて、彼女がどんな我儘を云つても荒い聲一つ出すでないことを却つて物足りなく思ひ、それは夫が自分に遠慮してゐて眞情がないためだと理解し、何とか一度夫に毆つて貰ひたいと思ひ百方手をつくし、何とか夫の腹を立てさせ、やうやく横面をはり飛ばして貰つてせい〳〵し、「やつぱりあなたは私に眞情があるのですね」と云つて非常に滿足してゐるのを見たことがある。この心理は大體そのまゝ子供の親に對する心理の中にも期待して差支へないものであらう。なほもう一言附へておくならば、叱らないことの教育方針は子供を甘やかしたがつてゐる人々の病的心理に是認を與へる危險があるし、また子供に自己を同一化して、叱られ過ぎた自分の過去の不幸を現在の子供に依つて補償しようとする（さうして實は子供を犧牲にする）無意識的罪過を犯す危險が存すると云ふ、以上二つである。

二、或る外出不能症患者の場合

子供の時分にあまりに叱られなさ過ぎたゝめに攻撃慾が外に向ふ機會を失ひ、不健全に內攻してゐる自滅的傾向の場合を實例を擧げて論ずると私は前に約束したが、その約束をこゝで果すべき段取となつた。

患者は青山重吉（假名、以下同）と云ふ本年三十九歲になる家屋監理業者であるが、彼は外出恐怖症に惱んでゐる。その容

貌は相當に獰猛であつて、その攻擊慾の本來相當に强烈であるべきことを想像せしめたが、それが人を恐れ外出を畏怖すると云ふのであるから一見如何にも滑稽であるが、その心理の病的轉變は分析者には直ちに理解出來るのである。その外出不能の心理は、例へば次の如き場合に顯著である。彼の長男（九歳）が學校から歸りに近處の廣場を橫切る際に、そこに野球を遊んでゐた中學生があつて、その球が長男の靴に偶然に當り、そのために靴の外皮が少し破れたと云ふことであつた。たゞ靴の外皮が多少破れたと云ふのみで、肉體には何の怪我もなかつたに拘らず、それを見て父親たる患者は非常に憤激し、直ちに中學生のところに談判に出かける。その中學生は幸にして素直な青年であつたから直ちに平あやまりに謝罪する。激昂せる患者は中學生の居宅を尋問する。中學生はこの近處のW町何丁目何番地であると答へる。患者はそれをきゝ、意氣揚々として引揚げるのであるが、歸つて見ると、自分があまりに些細なことに憤激したことが恥づかしくなつて中學生には氣の毒になり、その家族の者等が却つて自分に憤激してゐるだらうと思ふと、今度は自分の方が恐ろしくなつてそのW町何丁目何番地の方へは足を向けることが出來ないと云ふ類である。このやうな事件が數々重なつてゐるので、彼が家を離れると危難があちこちに伏在してゐるやうな氣がして外出不能となつてゐるのである。併しこのやうな症候は時々甚だしくなり、暫くするとずつと緩和して來るのである。その甚だしくなるのは、何か非常に大きな天災とか近親の死などに會つた場合である。

患者の父親は吉郎兵衛と云つて、今から二十一年前（患者十九歳當時）に死んでゐる。三十年間質業を營みつゞけ晩年は家屋監理業に轉じてゐたが、歿後に二、三十萬の富を殘してゐたと云ふから、三十年間の質業の經營は相當にサド・マゾヒスティツクなものであつたことが想像せられる。質屋の客は何れみな細民どもにきまつてゐるのだし、その上吉郎兵衛は貧農の子として育つたのであるから、三十年間の營々たる努力の內には相當に冷酷なものもあつたと假定する方が自然であらう。而も彼は子女に對しては極めて溫厚であつて、嘗て荒々しい聲を出したことはなく、殊に次男たる患者を偏愛し、そのために長男藤吉の僻みとなり自暴自棄となり、その遊蕩と無賴とは父と弟とに對する反感と嫉妬の表現であつたことは疑ふ餘地がない。彼は父の遺產を湯水の如く浪費し、弟（患者）の分まで手をつけ、患者はその憤りのために兄の死を祈つたことが一再でなかつた。然るにその兄は四十五歳（患者二十二歳當時）にて死亡した。然るに死すると共に同情と罪障感とが生じて、例の外出不能の症狀が發して來たのであつた。

そのやうに相當冷嚴であつた筈の父親が何故に子女に對してのみそのやうに溫和であつたかと云ふ點に分析者の興味は集注

し、その父親の出生事情に就いて尋ねて見たところ、父吉郎兵衞の生家は元々富裕であつたに拘らず、吉郎兵衞がその母の胎内にある内にその父が死亡したので、吉郎兵衞は貧農の家に養子として遣られてしまつた。それ故に同じ胞からの兄弟でありながら他の者等はみな安穩に幸福に過してゐるのに拘らず、ひとり吉郎兵衞のみが貧窮の内に日々を過ごしてゐると云ふことは、彼にとつて無限の屈辱でありその憤懣は何としても押へるに由なかつた。その憤りが恐らくは、彼を驅つて一切の他人への憎惡となり、職業（質業）と云ふ合理的形式によつてその復讐を遂げ、富を積むことに依つて母と兄弟とを見返してやることになつたのであらう。と同時に、人間はそのやうに極端な憎惡の發散のみに依つて生きて行くことは出來ないから、半面に於いては極端に甘い愛情の發現となつてその子女（殊に次男たる患者）を溺愛するやうになつたらしいのである。その心理の中には子女に於いてかくあるべかりし自分を同一化してゐる點も見逭してはなるまい。

吉郎兵衞の妻（患者の母）も極めて優しい人であつたと患者は告げてゐた。夫婦仲は極めて圓滿であつたと云ふ。彼女は夫に先立つ二年、四十九歳（患者十七歳當時）にして長逝した。

このやうに患者は極幼兒期からその兩親の何れからも叱られたと云ふ記憶は殆ど持つことなしに育つて來たのであるが、私は分析者としてそれが却つて彼の幸福なる不幸の原因となつたと解釋しないわけには行かないのである。何となれば、絶對に叱られないと云ふことは、その子供が本能として持つてゐる攻擊慾（破壞衝動、死の本能）を外に向ける機會を與へず内攻化せしめる結果となるからである。攻擊慾は外向的であるばかりがいゝと云ふわけではないが、男兒に於いては假りに七分外向三分内攻が適當とすれば、女兒に於いては七分内向三分外向と云ふ程度が大體に於いて穩當なのではないかと思ふ。子供を適度に叱ると云ふことは彼等の攻擊慾をして適度に内外に轉變せしめる契機となるのである。叱るべき時に適切に叱つてやると云ふことは、子供等の無用の自責のエネルギーを節約してやることによつてその精神を健康化するのみならず、その超自我を確立してやる所以となる。我々は屢々患者の分析に際し、彼等が實際惡意を以て行つたことに對して叱責せられたことは少しも記憶してはゐないが、惡意のないのに子供の心理に理解なく只親の都合や利己的立場からのみ叱られた場合には忘れられないものが殘つてゐると云ふ告白を聽く。このやうな叱り方は子供の超自我の構成を助長しないどころか、却つてこれを障害するものである。

論は岐路に入つたが、先の外出不能の患者の宅に私が行つて分析談を試み、それが一先づ終つた時、そこへ彼の次女（四歳）

がチョコ〳〵と現れ、食事してゐる私と患者とその妻との近くを連りに右往左往し、緣側へ出ては危ながりやの父親をハラハラさせてゐる。父親は平素ならばやれ危いそれ怪我をすると云つてうるさく注意するのであらうが、私の手前たゞ目で娘の步みを追つてハラ〳〵してゐるのみで、口に出しては世話はやかなかつたが、女兒は連りに同じ言葉を父に向つて反抗的に繰返し叫んでゐるので、私もそれに注意するやうになつた。それは「お父さんバカ！」と「ほつといて！」と、この二つである。この二つを何度も何度も反抗的に父の面上に叩きつける。父はたゞニヤ〳〵笑つて何も云はない。

私はそれを見て患者に云つた。「あれ御覽なさい。あの孃さんは子供ながらも貴方の教育方針の間違つてゐることを批難してゐられるのではありませんか。お父さんバカと云ふのは、どんなに惡いことをしても、當然叱らねばならぬやうなことをしてもお父さんは叱つてくれない、これでも叱らないか、これでもまだかと云ふ切實な叱責要求の聲です。ほつといてと云ふのは、貴方が無用の事に心配し、折角自分が自由に自分の能力を發揮し、多少の冒險心の滿足を計らうと思つてゐるのに、いつもそれを愛の名に於いて干渉し束縛し、リビドーの眞綿でがんぢがらめにしばりつけるからとてもやりきれないと云ふ悲鳴ではありませんか」と。

私はこのやうに愛の名に於いて誤つた教育を施してゐる親や教育家が如何に世間に多いことであらうかと、今更のやうに浩歎した次第であつた。併しこの女兒がこのやうな神經症的性格の端緒を示しつゝあることに就いてはその親の神經症が原因でなければならず、その親の神經症は祖父の不幸なる運命にあることを思ひ、「親の因果が子に報い、そのまた因果が孫に報いる」と云ふ昔から聞傳へて來た佛教的な俗諺が科學的にも眞理であることを痛感した次第であつた。

三、三十三名殺傷犯人の場合

私はもう一つこゝに極めて適切な實例を報告しなければならない。それは私が直接分析處置した場合ではなく、昭和十三年五月廿一日、岡山縣北部山間の一小部落に於いて起つた三十三名殺傷事件の犯人ＭＭ（當二十二歲）の場合である。私は京都帝大教授醫學博士小南又一郎氏が本年一月十四日號『東京醫事新誌』上に發表してゐた記事に基いて、分析觀察の結果、犯人の破壞衝動の處置が幼時に於いて正當でなかつたことが後年このやうな大袈裟な破壞的事件勃發の遠因であつたと云ふ點に注意を拂ふべきだと信ずるに至つたのである。

ＭＭは彼が二歳の時から養育してくれた祖母をまづ手始めに斧を以て斷首して殺害し、續いて三十二名を午前一時半頃から三時頃までの間に殺害し歩いたのであるが、祖母以外の被害者たちはみな彼の情交關係のあつた女、その女の近親、身邊者、又はその女たちと關係のあつたゝめに彼の僻みを買つた男たち等であつた。我等はまづ彼の精神發達史から調べて見なければならない。

まづ彼の祖先、兩親等には精神病の遺傳はないらしい。祖母は當時七十五歳にて健在であつた。兩親は共に圓滿なる人格者であつたと云ふが、本人二歳の時に父は肺結核にて死去、續いてその翌年、母も同病で倒れ、以來祖母の手一つで育てられた。故に、兩親のない者として祖母が如何に彼を甘やかし、決して叱ることなく、育てたかは想像するに餘りがあり、本人もまた祖母の大恩をよく銘記してゐるのである。兇行の手始めに祖母を殺したのは、あとに殘つた祖母の悲嘆するのを思ふに忍びないからだと云つて居るのは、尤な考へであると云はねばならない。俗に「婆さん子は三文安」と云はれる通り、祖母に甘やかして育てられると（殊に兩親がなくて不愍の掛る場合には猶更であるが）彼の攻擊慾が如何に正常な發育を遂げず、たゞ不健全に内攻するのみであつたであらうと云ふことは、何人も容易に想像し得るところであらう。このやうに不健全に内攻した攻擊慾（破壞衝動）は土俵際まで追ひつめられると、急に反擊して來て意表外のうつちやりに出て來ることもまた我々には容易に想定し得る心理作用である。

彼の身體は幼時から虛弱であつたが、頭腦は頗る明晰で、席順は級中二番であり、高等二年時の成績表を見ると滿點の科目四、九點のもの四、八點のもの三で、八點以下のものは一つもなく、操行も上である。性質も小學生時代には純良であつたと云はれてゐるが、村中で中流の生活を送り祖母に溺愛せられた彼として、蓋しそれは當然であらうと思はれる。

「小學校卒業後もＭＭの健康は一向恢復せず、病弱のためが彼は居常怠惰にして家事に奬勵せず、一時自ら肺結核に罹れりと認定し、自宅療養を務めたるに、外見上全快せる如く見えたるが、其頃よりＭＭは部落の青年團並に隣へなどの交際に無關心となり、殊に姉が他に嫁ぎし後は一層放縱に陷り、從つてＭＭには殆ど友人なく、孤獨の生活をなし居る內、昭和七年秋、彼は又復肺病に罹れりと思惟し、近在の醫師ＴＫ及ＦＩの診察を受けたるに、兩醫師共肺尖カタルと診斷せしを以て、彼は甚だしく苦惱し始め、種々療養の方法を研究し、爾來自然療法等を實行したるに、約一ケ年にして甚しく快方に向ひたりと。斯る間にＭＭはその兩親が肺結核にて死亡せることを聞知し、且自己も種々研究の結果とその自覺症狀とを綜合する時は、彼自

身も亦同病に罹れりと自認し、部落民も彼を結核患者として忌避する傾向なきにしもあらざりし所、昭和十二年五月二十二日MMが徴兵檢査を受けし際、軍醫より十分なる靜養をなすべき旨を注意され、且つその通知書に肺結核と記入しあるを見て、彼は愈々不治の疾病に罹れること確實なりと悲觀し、爾來自暴自棄に陥りしが如く、社會を猜疑し、偏見を生じ、事物に對する正當の認識乃至推理不十分となり、節度を失し、その行動も亦常軌を逸し、無暗に近隣の婦女に手を出し、爲に甚だしく部落民より嫌惡せらるゝに至れり。殊に昭和十二年より翌十三年に亙り、MMは部落の婦女に挑みかけ情交を迫り、應ぜざれば之を恨み、應ずるもその關係を續けざれば憤怒し、彼の行動漸次露骨となりしかば、部落民の彼に對する嫌惡嘲笑日を追ひて加はりしかば、その頃より更にMMに於いて自制心愈々薄弱となり、我非行を正當なる行動の如く思惟し、彼の意に反するものを仇敵視し、窃にそが報復手段を講ずるに至れりと。」

右のやうに小南博士は本人の症狀の發展史を記述してゐる。我等は分析眼を以て右の記述を精讀する時、本人の精神の退行史を歴々と迹づけ理解することが出來るであらう。祖母に甘やかされて育つたゝめに、彼の攻擊慾は内攻すると共に、彼のナルチスムスと全能感とは幼兒期のまゝを保全し、またそのリビドーは過多なる甘さの滿喫のために食傷的障碍を來してその自然なる發展を阻まれ、とかく乳兒期へ胎兒期へ退行せんとの傾向を強く保有してゐたことは想定せられる。先に述べたやうに彼は先來頭腦も明晰なのであるから、もし兩親が健全でせめて少年期まで彼を育て、相當の攻擊を彼に加へてゐたならば、彼は本來もつと正常な人間となつたであらうと想像せられる。併し彼が右のまゝの條件の下で育つて來たとしても、その身體がもつと強健であつたならば、彼の精神はこれほどまでその退行の速度を促進せしめられなかつたであらうと思はれる。

彼は青少年期に入ると共に、リビドーの大部分を祖母から引上げて姉に移してゐたことであらう。「姉が他に嫁ぎし後は一層放縱に陥り」と云ふのは、彼にとつて唯一のリビドー纒綿對象を失つたゝめに何とか他に適當の對象を發見しようと焦慮したことを意味してゐるのであらう。かくして「無暗に近隣の婦女に手を出し」たが、それは一つには自分の全能を信じナルチスムスに恃むところが大であつたからであらう。併しそれが拒けられたり永續きがしなかつた場合には、自分のナルチスムスや全能感に抵觸するが故にこれを憤慨したのであつて、彼ほど頭腦の明晰であつたものが不條理に人を怨んだり、「社會を猜疑し偏見を生じ、事物に對する正當の認識乃至推理不十分となり、節度を失し、その行動も亦常軌を逸」するやうになつたのは、彼の自我（理性）が發展を中止し、彼の無意識（エス）の横暴なる發露の前に敗退するに至つた經路を物語るものであら

う。

とは云へ、彼は決して未だ精神病者と呼ばるべきものではなく、その情操や理性は常人のそれに比して甚だしく相違してゐるとは考へられない。次に彼は自殺直前に書いた手記の中に「祖母のことを思ひ、祖先から家の事を思ふ度に強く〳〵そして正しく生きて行かねばならぬと思ひながら居たけれど」と云ひ、また「少い人間の感情から一人でも殺人をすると言ふことは非常時下の日本國家に對してはすまぬわけだ。又僕の二歳の時に死別した父母様に對しても先祖代々の家をつぶすとは甚だすまぬわけである」とも述懐してゐる。これ等を見ると、彼の超自我とてなほ相當に健在であると認めないわけには行かない。況んや、先に論及したやうに、祖母を殺したのは「後に殘るふびんを考へてあゝした事を行つた」と云つてゐるのは、尤千萬なことではないか。また姉にも遙に謝罪し、自分の墓は作つてくれるな「野にくされば本望である」とも云つてゐる。小南博士は「道義的感情が鈍磨」してゐると云はれるが、私は必ずしもさうは考へない。たゞ殺人に出かける時の服装のやゝ奇異であるのは、小南博士の云ふ通り、やゝ「衒奇症」的症候を示すものと云ひ得るであらうか。「黒セル詰襟の洋服を着し、茶褐色の巻ゲートルをなし、地下足袋を穿ち、左右側頭部に捩て準備せる圓筒形懐中電燈を前面に向つて裝置せる布製鉢巻をなし、更に自轉車ナショナル電燈を細紐にて首より胸部に吊り下げ、薬莢入雜嚢を左肩より右脇にかけ、刃渡一尺九寸の日本刀、同六寸五分及び五寸二分の匕首各一本、合計三本を左腰に差し、是等の上を革紐にて締め、その動搖を制し、十二番口徑九連發ブローニング銃及彈薬包約百ケを携帶し、更に前來研ぎ置ける斧一挺を持ち」と云ふ出で立ちであるから、七ツ道具のモダン辨慶が懐中電燈の角を前額に生やしたと云ふ恰好である。併し本人に云はせれば、別に殊更に奇を好んだわけではなく、全部必要上さうしたと云ふであらう。何となれば、出動直前にその部落内の配電線四ケ所を切斷し、配電を不能ならしめ、部落を暗黒にしておいて仕事に取掛つたのであるから、成程かう云ふ恰好をしなければ自分の手許が暗くて何も出來ないわけである。衒奇症とも云ひ兼ねるかも知れない。

自殺現場に殘してあつた遺書に依ると、「實際弱いのにはこりた、今度は強い人に生れてこよう」とある。これほどの大それた殺人を敢てした後に自分を弱いと評してゐるのであるから、常識的な人々はその矛盾に呆れることであらうが、分析を學んだ者は誰しも彼の自己批判を間違つてゐるとは考へないであらう。彼の性格は幼児的で弱いのだ。換言すれば、攻撃慾が内向してゐて不斷に己を苦めてゐる。それ故に、他人の批難や嘲笑を非常に大袈裟に感受する。一寸無愛想な顔色を見せてもそ

れを敵意と解釋する。そのやうな不斷の內面的苦痛は彼の肉體的病氣を契機とし、理由として、一層强化せられ、絕望的なものとなし、遂に窮鼠反噬的な一大殺戮事件を惹起することになつたのであらう。故に、彼をしてこのやうな大それた悲劇を惹起させた近因は種々あるにもせよ、その遠因は彼が祖母によつてあまりに甘やかされ過ぎて育ち、その攻擊本能を正常に發展昇華せしめる機會を持たなかつたところに存すると主張することが出來ると信ずるのである。

四、結　語

右の實例ＭＭの場合に就いて、私は彼の超自我（良心）がなほ健在であることを力說しておいた。ではそ何故のやうに超自我の健在せるものがあれほどの非社會的行動を敢てするに至つたかと云つて反問し來る人々もあらうかと思ふが、それは常識的疑問であつて、超自我は所謂良心ではない。良心は常識的な、道德的な概念であるが、超自我は純粹に心理科學的な概念である。超自我は、精神分析學の研究に依れば、攻擊本能を素材とし、兩親の精神的俤に型どつて鑄造せられてゐる。健全なる精神を有する父親は、適時適處に子供を叱責することに依つて子供の攻擊慾を外向せしめると共に昇華せしめて、後年に於ける社會生活に順應し得る素地を築いて行く。子供は親の氣まぐれや、主觀的な御都合や、利己的立場から叱つてはならないが、子供自身が自分でもよくないと考へることに就いて、或は叱られたあとでその理由を聞かされて成程と納得の行くやうな場合に叱ることは、彼の精神を健全にする。と云ふことは、彼の攻擊慾を適度に外向化すると共に、また適度に昇華せしめるのである。

叱るべき時に常に叱るばかりでも、實はいけないのである。十度に一度は見て見ぬふりをすることが必要である。その時、子供はその自己批難が父親の叱責によつて帳消しとならず、自己の良心の自辯に依つて帳消しにしなければならないので、彼は何らかの罪亡ぼし（善行）をしなければならないやうになる。かくして彼はその罪亡しと云ふ善行に依つて他からの賞讃を博するならば、惡種を蒔いて善果を擧ぐるの結果になり、彼の幸福感の增大となると共に、善行への刺戟ともなる。併しあまりにも孫を

ＭＭは恐らくその極幼兒期から數々の、自ら惡と認めざるを得ないやうな事をして來たことであらう。併しあまりにも孫を不憫に思つてゐたであらう祖母は彼を決して叱責しなかつたことであらう。況んや早く息子夫妻を失つた彼女としては、老後の感傷を孫の一身に豪雨の如く注ぎかけて、彼の精神の發達を知らず識らずの内に妨げて來たことであらう。その事は彼の意

識にとつては最大の感謝の理由となつたであらうが、彼の無意識にとつては無限の不滿と憤激の原因であつたかも知れない。先に擧げた青山家の女兒が父親の絶對無攻撃態度に對して「お父さんバカ」と云ふ憤激を以て應酬してゐる如く、MMが祖母を斧を以てまづ手始めに殺した動機の中には、彼自身が意識的に告白してゐるやうな尤もらしい理由——「あとに殘るふびんを考へて」——以外に、祖母に對する根深い怨み、自分を精神的に一人前の男子として育て得なかつた怨みが潜んでゐなかつたとは何人が斷言し得よう。あれほどの極端な殺害事情を單に愛情からとのみ理解し得るであらうか。愛憎並存を豫想することは分析者としてあまりにも當然である。

讀者讀氏はこゝでシェイクスピアの喜劇『じやじや馬馴らし』の女主人公カサリンのじやじや馬心理と、それに對する男主人公ペトルシオの適切な攻撃的處置法とを想起して御覽になることをお勧めする。カサリンはペトルシオの適切な處置により後にあれほど大人しい女になつたのに徵して分るやうに、元來マゾヒストであつたのに、そのマゾヒズムの要求を近親の者等が滿してやらなかつたがために、逆轉してあのやうに攻撃的な態度を示したのである。文豪としての心理分析眼を以てしてシェークスピアはよく這般の過程を描破してゐる。MMも亦、元來弱い男であるが故に、あのやうに大それた殺戮を行ふやうになつた。幼兒期に於いて近親の者から適切なる攻撃的態度を攝取し、それを滋養としてその良心を健康化し、その積極的心理能力を確立することの如何に必要であるかは、私と共に恐らく讀者諸君の十分に認め主張せられるところであらうと信ずる。

なほ私が分析處置した患者の大部分に就いて見ても、幼時をあまりに幸福（殆ど叱られることなしに）育つたものが、神經症又は性格薄弱に惱んでゐると云ふ統計的事實が結論せられると云ふことをこゝに書き添へておくも、あながち徒爾ではあるまい。（完）

芭蕉と性愛（續）

――その罪障感と自然思慕の分析――

宮田戊子

芭蕉と同性愛

以上は芭蕉の陽面であるが、なほ陰面について考へなければならぬものがある。こゝに陰面といふのは芭蕉の同性愛關係であつて、女性との關係は對象愛が正常に發達したものとして不思議のないことで、芭蕉といへども正常の人間だつたことがわかるだけであるが、同性愛關係における芭蕉にはやや變態的なものが窺へるのである。

私は最初芭蕉とその主蟬吟とに男色關係があるのではないかと考へてゐた。當時は戰國を距ることあまり遠くなく、武家は女色を卑しめた時代であつて、それが衆道の流行の一因となつたことは、西鶴などの作品にしば〳〵好個の題材を供してゐるので十分に分る。まだ芭蕉に關する資料と口碑が豐富だつた頃書かれた川口竹人の『芭蕉翁全傳』には、蟬吟の芭蕉に對する態度を「愛寵頗他に異なり」と記されてゐる。竹人は伊賀の城代の藤堂白舌翁（蟬吟の甥）家の臣で、芭蕉門下の辻荻子の弟であつて、その資料は荻子や土芳などから出てゐるのでそのいふところに確實性があるわけであるが、然し一方さういふ立場であるからして藤堂家に不利なことは回避する傾きのあるのは當然である。その竹人が頗る婉曲に「愛寵頗他に異り」と書いてゐるのは、無意味とは考へられないのである。芭蕉は亡命後寛文十二年郷里の天滿宮に奉納した『貝おほひ』の判詞に「我も昔は衆道ずきのひが耳にや」と書いてゐて、これは芭蕉の性慾方面を研究するものによく引證されるのであるが、この寛文十二年は芭蕉が主家亡命の寛文六年から六年目に當り、この六年を「昔」と云つたとは考へられないから、こゝで芭蕉が「昔は」と云つてゐることは明らかに亡命以前、卽ち藤堂出仕中のことゝ考へられて來

る。

そのほかになほこれは芭蕉の作品を分析してその無意識象徴を考へて得た結論であるが、芭蕉の性愛は主動的と受動的との兩面があるやうであつて、そこに正常の人間と何か變つたものを私は認めなければならなくなつたのである。尤も蟬吟との同性愛と云つてもそれに關する資料などあり得やう筈はないが、彼が美男であつたこと、後年身體を惡くしてゐたことゝによつて想像出來るし、又芭蕉が「我も昔は衆道ずき」と告白してゐるその「昔」とは、前にもいふ通り、亡命の時の寛文六年から、後より前と解するのが當を得てゐるやうであるから、それが藤堂家に仕官中のことなのは疑ひないところであり、元來マゾヒスティッシュな彼であり、マゾヒストが强い他からの愛に應ずることは普通のやうであるから、主君との同性愛は成立する可能性はあると思ふ。そしてもしこの假定が成立するならば、芭蕉が主動的、受動的に性愛を轉變させたことがもつとはつきりするであらう。

芭蕉の同性愛については、蟬吟より杜國が從來問題にされて來た。杜國は名古屋の人で米穀商を營んでゐたが、罪あつて尾張領を追放され、三河の保美に隱棲した。芭蕉が杜國に初めて會つたのは貞享元年の『尾張五歌仙』以來であるが、同四年の『笈の小文』の紀行には、萬菊丸と名を改めて吉野まで芭蕉に隨つた。またのちに『嵯峨日記』の中で芭蕉は

廿八日。夢に杜國が事をいひ出して、涕泣して覺る。――我に志深く、伊陽舊里までしたひ來りて、夜々床を同じく起きふし、行脚の勞を助けて百日がほど影の如く伴ふ。片時もはなれず、或時はたはむれ、或時は悲み、其志わが心裏に染みてわするゝ事なければなるべし。覺めて又袂をしぼる――

とあるのによつて、その同性愛が云爲され、萬菊丸などゝ號したこと、並びに「夜々床を同じく起きふし」など云つてゐるところから想像したものであらう。杜國を伊良胡に訪ふ時芭蕉は鷹の句を多く作つてをり、それは杜國を鷹に譬へたものと見ると（註）フロイドが分析したレオナルド・タヴィンチの兀鷹の空想も思ひ出され、杜國との同性愛も相當に確實性をもつて來るやうである。

註　鷹ひとつ見つけてうれし伊良胡崎。芭蕉の鷹が、杜國の象徴であるといふ考へ方は、芭蕉の時代からあつたやうである。其角の『華摘集』（元祿三年）には、「いらこの杜國例ならで、うせけるよしを越人より申きこへける。翁にもむつましくして、鷹ひとつみつけてうれしと迄にたづね逢ける云々」といふ前置の句がある。

この「鷹一つ」の鷹は、この時眼前を飛んでゐたものらしく、それはこの句の前の文に「骨山といふは鷹を打つ處なり。南のはてにて、鷹のはじめてわたる所と云へり。いらこ鷹な

ど歌にも詠めりとおもへば、なほあはれなる折ふし」とあつてこの句が記されてゐるところからして、無意識的には眼前の鷹を詠じたものらしい。＊しかしこの句の外に芭蕉には

杜國が不幸を伊良古崎にたづねて鷹のこゑを折ふし聞て

夢よりも現の鷹ぞたのもしき

なる句があつて、これによると杜國を俊鋭鷹の如き人物となしての譬吟的に詠んだか、或はレオナルド・ダヴィンチのやうに、鷹と杜國を同一化し、それを男性の象徴としてゐたかといふ考へが成立する。芭蕉が或る時は男性的に、或る時は女性的に性愛を變轉させてゐたことを考へれば、『笈の小文』に、杜國が萬菊丸と稱して女性らしく振舞ふたのに拘はらずなほ更のことでなければならない。杜國に初めて會つた貞享元年には芭蕉は四十一歳であつたし、『笈の小文』の時には四十四歳なのであるが、彼の藝術の昇華の過程から推測してなほ考ふべき餘地が十分にあるやうである。しかし芭蕉が落柿舎で見た夢がどのやうなものであつたかは文が簡單で『嵯峨日記』の本文だけでは知り難いにしても、私達の夢の豫備知識を以てすれば他の人の轉位ではなかつたらうかと思はれるが、杜國と芭蕉との同性愛にはなほ考へなければならないものがあるやうである。

＊ この句の誘因となつたものが『山家集』雜の部

二つありける鷹の、伊良胡渡りすると申けるが、一つの鷹は留まりて木の末に掛りて侍りと申けるを

巣鷹渡る伊良胡が崎を疑ひて
なほ木にかゝる山歸とかな

であることは、芭蕉の他の俳句の手段からしていふまでもないであらう。

人は多く男性女性にかゝはらず同性愛的傾向を有し、且つ主動的受動的に性愛を變じてゆくものであるといふことは、既に精神分析では明らかになつてゐる。フロイドは同性愛に墜る原因を、強い父が幼時に死亡した場合と、又は短い期間ではあるが、極めて激しく母に定着を起し、それを克服したのちに母に同一化し、彼ら自身に似た若者を愛するに至る場合とを擧けてゐる。前者の場合はなほ徴證の確かでないものがあるが、芭蕉の變愛が母への定着によつて初まつてゐることは殆んど確實と云つてよい。而して芭蕉の父がどのやうな人であつたかは今日明らかにされないにしても、彼が後年畏怖してやまなかつた自然は父の面影であるとすれば、分析の公式たる「強い父が幼時に死亡した」條件に適つてゐる譯であるが、又彼がその主君蟬吟を第二の父と侍いてゐたであらうことは疑ひなく是認されるであらうから、この場合彼が自らを母に同一化＊してゐたであらうことも解釋が可能である。彼が自ら「我も昔は衆道ずき」と云つてゐるに徴して、その

同性愛は確證されるのであり、壽貞との關係によつて異性愛も亦確證されるのであるから、たとひ蟬吟との同性愛が確證されないにしても、彼が主動的受動的に性愛を變更してゐたことは確認されてよいと思ふ。（こゝに主動的と云つてもそれは加虐（サディスティッシュ）的なものを含むのではなく、男性的と女性的兩樣に振舞ふものであることはいふまでもない。）

＊母と同一化の心理は後の作品であるが「我が顏の母に似たるもゆかしくて」といふところに窺はれる。

この兩性的作用は又彼の女性觀によつても立證せられるやうである。彼が女性としては優にやさしき人を思慕したことは『嵯峨日記』に小督の跡をとぶらひ、「長くも綾羅錦繡の上に起き臥して、終に藪中の塵芥となれり。昭君村の柳、巫女廟の花の昔も思ひやらる」といひ、或は園女を

白菊の目に立てゝみる塵もなし
暖簾の奥ものゆかし北の梅

と詠んでその純潔やゆかしさをたゝへたりしてゐる一方、女性にして男のやうなものをも稱へてゐる。『奥の細道』飯塚（坂）に佐藤庄司が館を訪ふところで

――中にも二人の嫁が碑先づ哀れなり。女なれども甲斐々々しき名の世に聞えつるものかなと袂を濡らしぬ

と悼んだり、又

伊勢の國、又玄が宅にとゞめられ侍るころ、其妻の男にひとしく物毎まめやかに見えければ、旅の心を安くし侍りぬ。かの日向守の妻、髮を切て席をもうけられし顏ばせ、今更申出て

月さびよ明智が妻の噺せん

などゝ詠んだりしてゐる。然し彼の本領は前者にあるのではなく後者にあるものであることは、マゾヒストとして當然であらう。この事實よりして壽貞が彼より年上であつたか、もしくは彼を引きまはす程の強い性格であつたかも推測出來るし、又或は身分が上だつたかといふ推察も可能になり、遡つてさらに芭蕉が母に定着を強くもつてゐたことの證左ともなると考へられる。そしてこの兩性具有的な心理には、やゝ常態ならざるものが見られるが、それは彼の無意識象徵にも十分窺はれるのである。

芭蕉の見た女性

芭蕉の諸作品を通觀して歸納しうることは、彼が他の人の容貌の美醜といふことに無關心でなかつたことである。このことは彼が女性崇拜者であつたことを立證する。彼に

月見する座に美しき顏もなし

といふ句があり、又『奥の細道』の松島のところで

――松の綠濃かに、枝葉汐風に吹き撓めて屈曲おのづから矯めたるが如し、其氣色窅然として美人の顏を裝ふ――

といひ、象潟のところでも

　きさがたや雨に西施が合歡の花

と云つてゐる。自然を斯く擬人的に取扱ふばかりではなく、直接美人を詠んだものも、發句には少いが連句には相當多く存するのである。卽ち發句に

　梅柳さぞ若衆かな女かな

　粽結ふ片手にはさむ額髮

など、或は連句に

　まぶたに星のこぼれかゝれる
　引たてゝ無理に舞はするたをやかさ　芭蕉

　此雪に先づあたれとや釜揚げて
　寢巻ながらにけはひ美し　芭蕉

　見ぬふりの主人に戀を知られけり
　すがた半分かくすからかさ　芭蕉

　辛螺賣の油ながるゝうす氷
　角ある眉に化粧する霜　芭蕉

　目の張りにまづ千石はしてやりて
　消ゆるばかりに鐙おさゆる　芭蕉

　これらが芭蕉門下のいはゆる「あだ」なる作品で、門人達は當時これらが師翁の體驗によるところなるを知つてゐたのである。

　以上を要約すると、芭蕉のエディポス的願望は父に就て彼が少しも語つてゐないので明白にならぬにしても、その片鱗たる母への愛着と叛逆、及びその死によつての罪障感は明瞭であり、これによつて父に對する彼の心理も凡そは推察することが出來る。彼が

　父母のしきりに戀し雉の聲

と詠んでも、むしろ父は古歌によつての附たりで母戀しの方が主であらうことは、前記母の俤を自分の鏡にうつる顏に見出してゆかしと感じたり、又「母の愛にあまえて月を背けをり」と詠んでゐるのが無意識の告白となつてゐるであらう。彼が母の死によつて衝撃をうけ、のち次第に月日が經つに從つてそれが罪惡視されて行つたことは、『野ざらし紀行』と『笈の小文』の母に關する句の相違によつても見られるのではなからうか。卽ち『野ざらし紀行』の「兄の守袋を解きて、母の白髮拜めよ云々」と前置して

　手にとらば消えん涙ぞ暑き秋の霜

から『笈の小文』の

　古さとや臍の緒に泣く年の暮*

への感情の推移、卽ち髮から、自分と母とを曾て繫いだ臍の

緒に彼の母への追慕が切なるものになつたといふことのうちにも窺へるのである。

＊『笈の小文』にはこの句は前置も何もなしに出てゐるが、『千鳥掛集』には、この句は左のやうな詞書を添へて出てゐる。

世々のかしこき人々も、古里は忘れがたきものにおぼえ侍るよし。我今ははじめの老も四とせ過ぎて、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまた齢かたぶきて侍るも見捨てがたく、初冬の空のうちしぐるゝ頃より、雪をかさね霜を經て、師走の末伊陽の山中に居る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく思ふことのみあまたありて

古さとや臍の緒に泣く年のくれ

この文が僞作であるか否かを辨別することは出來ないが、こゝで彼が父母と古里を同じものに追慕してゐることは、この文が假令僞作にしても、當時の芭蕉の心理を表現し得てゐる。故郷が母とコムプレクスされることは往々あり得るからであり分析學では定說となつてゐるからである。

かくて貞享元年に初まる彼の漂泊生活が、母への思慕へのために、自然の風光にそれを求めたものであることもやゝ判明し、彼が松島を見ても象潟を眺めてもそれに美しき面影を思ひ浮べねばならなかつた心理もわかるやうである。一方彼のリビドーは幾多の秀句となり、又多くの門下への感傷愛となつて昇華されたのである。この事を今日の史家は概ね見まいとしてゐるらしいが、當時は芭蕉と壽貞との關係も未だ生々しく、且つ今日ほど芭蕉を聖人視してゐなかつたので、彼の門下は皆正しく觀察し得てゐた。前揭『去來抄』中の丈草の言葉、「伊賀のあだなるは先師のあだならずや」の中にそれへの銳い觀察と皮肉が見られるのである。そこでかの「閉關の說」の文をこゝに引用することは、當を得ないものではないと思はれる。

色は君子の憎む所にして、佛も五戒の初めに置くと云へども、さすがに捨て難き情の生憎に、哀れなる方々も多かるべし。人知れぬ暗部の山の梅の下伏しに、思ひの外の匂ひにしみて、忍の岡の人目の關も守る人なくば如何なる過ちをか爲出でん。海士の子の波の枕に袖萎れて、家を賣り身を失ふ例も多かれど、老の身の行末を貪ぶり、米錢の中に魂を苦しめて、物の情を辨へざるには遙かに增して罪許しぬべく、人世七十を稀れなりとして、身の盛りなるは纔に二十餘年なり——

この文を志田氏は前揭書で、これが元祿五年に書かれたものであり、この時すでに深川の芭蕉庵に壽貞が來てゐた（壽貞のことが芭蕉の書いたものに見えるのは前に述べたやうに元祿六年からである）と見、且つ門下の背反によつて、閉居孤高の生活への思慕を表現したものだと云はれる。博士の見解は此の文の末端の性質を正しく指摘し得たものとして敬意を表せざるを得ないが、しかしその前半、卽ちこゝに引用した

部分についていへば、色慾に對する寛容さを表現したものであり、芭蕉の過去の遊蕩生活を思ひ浮べる時、これが全くの自己辯護にほかならず、閑居孤高の辯はむしろ添へ物の如く感じられるのである。更にも少しこの思想の發生を既往に遡つて檢討するならば、彼の貞享四年の『笈の小文』の卷頭で、

――然かも風雅に於ける、造化に從ひて四時を友とす。見る處花に有らずと云ふことなし、思ふ處月に有らずと云ふことなし。思ひ花に有らざる時は夷狄に齊し、心花に有らざる時は鳥獸に類ひす。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化に從ひ造化にかへれとなり――

と云つてゐることを思ひ起さゞるを得ない。彼がこゝで夷狄鳥獸と觀じたものが分析學のエスであり、月花が女性（母）の象徴であることはいふまでもないが、彼が貞享の頃既に自らの心を分析してそこに自らの自由にならぬものを認め、それを風雅なる名によつて呼ばるゝ理念（自我と理想我）によつて克服すべく、そこに造化に從ふ人間の道を發見したことは佛敎の內觀に負ふところであるとしても、これはたゞ彼が漫然と考へついたものではなく、彼が遊蕩生活を回顧して得たものであつたに相違ないが、貞享四年の夷狄鳥獸より人間への自己鞭撻が、それから年を經た元祿五年には遊蕩生活に對して全くの寛容的態度を示してゐることは、彼のこの言が自己辯護たる本質を示してあまりあると考へざるを得ない。

卽ち若い時は誰でも一遍はあるものだといふ自己辯護、もしくは普ねく知れ渡つた前半生の遊蕩を、その門下の非難を考慮してそれから防禦しようとしたものと考へられ、さうして彼が貞享四年の『笈の小文』の夷狄、禽獸の擯斥から、元祿五年の『閉關の說』における自己辯護の間に、壽貞が芭蕉へ來たゝめに過去の遊蕩が明るみに出され、門下に對して自己辯護を試みねばならなかつたのではないかといふ假定も成立するのである。

さま〴〵に品かはりたる戀をして
浮世の果は皆小町なり　芭蕉

といふ彼の付合は、初め「浮世の果は皆小町なり」といふ句が自然に出來て、その前におくに足る句の出るのを待つてゐた時、たま〳〵この前句が出たのに付けたといふことであるが、「浮世の果は皆小町なり」といふ句は、その主人公として壽貞を選んで出來たものではないかと考へられるが、芭蕉にとつては悟入にちがひない。しかもなほ

さま〴〵の香薫りけり月の前
人一代の戀を問ふ秋　芭蕉

といふ先蹤もあり、彼が老境に入るにしたがつて、戀愛をも客觀視するやうになつたことを示してゐる。志田博士は、芭蕉はその遊蕩問題や壽貞との關係を告白しなかつたところに、最後まで悟道に達しなかつたと云はれてゐるが、私も同

感である。しかし弟子たちがさうした師翁の前半生を知悉してゐたとしたら、あらためて告白するがものはなく、たゞなり行にまかせておけといふ態度であつたかも知れないし、又「浮世の果は皆小町」とか、「人一代の戀を問」はうとしたことが偶然な機會に出來たものであつても、芭蕉の心理を何ほどかあらはしてゐるものと見られるので、これらが無言の告白となつてゐるであらうことは確かのやうである。さうして見ればわざとらしく告白しなかつたところに、さうして「人來れば無用の辯あり、出でゝは他の家業を妨ぐるも憂し」(『閉關の說』)と云つて孤高を欲したところに、却つて芭蕉らしさが認められるのではなからうか。

む す び

芭蕉の行動の特徴たる罪障感と自然への思慕とは、以上でほゞ說明出來たやうに思はれる。即ちその罪障感は

一、主君藤堂蟬吟家にかゝること

二、父母に關すること

三、壽貞に關係あること

の三つにその基因があることは確かであり、そのいづれが主因であるかは明らかでないけれども、恐らくそれらがコムプレクスされてゐるものなることは凡そ想像が可能である。從來はその罪障感も自然思慕も、先天的に芭蕉に備はつたものと見て來たのであるが、斯ういふ傾向が生れながらにしてあるものでないことは、人間そのものを正しく認識したなら誰にでもわかることである。自然への思慕を先天的なものと見ることは一層の無理があり、そのために人々は貞享初頭に於ける轉機を認めなければならなくなつたのであるが、その轉機が何によるかを考へなかつたので、その解明は吾人の手に委ねられなければならなくなつた。そこで吾人はこの自然への思慕を母及び女性一般の象徵と斷じ、彼の特徵たる水邊湖沼海灣等の讃美が象徵行爲たることを些か究明したのであり、そして罪障感と自然讃美は結局一つの原因に基づくことを觀察し得たのである。このことは廣く芭蕉の行動を通觀して斷言しうることなのであつて、もとより記述はごくあらましにしか出來てゐないけれども、以上の見地に立つて觀る時、初めて芭蕉の正しい認識は可能であると考へられる。

吾人は更に筆を進めて本稿と密接な關係ある芭蕉の無意識を研究せねばならない。

畫聖セガンチーニの分析研究（カール・アブラハム）

岩倉具榮譯

六、死の衝動との鬪爭

セガンチイニがマロヤで過した數年は一番緊張して制作した頃であつた。彼を仕事に驅り立てる力は、今迄云はれたことによつて吾々の了解するところであるが、その力は、益々強くなつた。「私の魂は、年寄の守錢奴の様に貪慾で、未來の作品が生れる天才の地平線にまで翼を高めようとして、熱心に、ふるへつゝ活目してあこがれてゐる。」と、このやうに彼はマロヤに移るすぐ前に、ヴィットール・グルービシーへの手紙に書いてゐる。（書簡集一九二頁）次の數年間に、之等の言葉が無根のものでないことを彼は證明した。制作に對する熱心さは無制限で、極度の力を盡した。夏に、彼は朝の中極く早い時間に製作を始め、度々遠く歩いて仕事する場所まで行つたが、自分の要求に從つてその場所を變へた。彼はそれから夕方まで疲れを知らずして制作した。冬にも、彼が刺す様な寒い天氣に戸外で制作してゐるのが見られた。彼が一つの作品を仕上げて了ふ前にもう、新しい考案と未來のプランとが彼の心を滿した。熱烈な創造衝動がある上に、自然に對する獻身的な愛と美への敬虔な崇拜とがあつたゝめに、彼は時々元氣のない氣分に吸込まれることはあつてもそれに陷ることはなかつた。

併し彼の魂の中のこの移り行く爭ひは、早くも終らんとしてゐた。

三幅對の一つであるところの自然は殆ど完成されてゐた。一八九九年の九月にセガンチイニは大變熱心に他の二幅を制作した。生涯は、大部分、終つて、彼がマロヤで過した最後の日々の間に彼は死に向つて歩みを始めてゐた。この油繪は未完成な狀態のまゝ殘されたが、丁度その時九月の十八日に、ババと一番若い息子のマリオに伴はれて、彼はシャフベルグに上つた。彼が描かうとしてゐた中央の畫幅は、翌日そこに

、届けられて來た。季節がおそかつたにも拘らず、彼の烈しい創造慾のために彼をこの高地（二千七百米）にまで追ひ立てられ、そこでつましい小さな石の家の中に彼は宿借りしてゐた。晴れた夕方、彼はこの石の家へ到着したが、こゝが最後の舞臺となつたのである。ベルミナの山嶺は夕陽の光輝の中に照り映えて立ち、彼は靈感を覺えて次のやうに云つた。「私はこゝの山々を描かう、エンガーディンの人々よ！全世界の人々にその美を讃えさせてやらう。」と。

一日中彼は「生命」の繪を描いてゐたが、その時、急に天氣が變つたのと暗合するものゝ樣に、彼は熱病におそはれた。その襲撃は非常に烈しかつた。この小さな家の屋根裏部屋が病室となつたが、その構造が不完全で嵐と寒さを防禦するに足りなかつた。

病氣の進行狀態について吾々が聞いてゐることの中には甚だ奇妙なことがある。夜の間セガンチイニは起上つて、熱があるのに、うす着のまゝで、何度も吹雪の中に出て行つた。その次の日、彼は小屋から程遠からぬところに据えてあつた繪に向つて、描かうとした。彼は弱つて眠りにおちた。彼は眼を醒まされて、やつと家まで護送された。彼は今や、全く疲れ果てゝ病臥した。併し彼は醫者を連れて來ることを拒絕した。一番手近なところにゐるサマーデンのベルンハルド博士とは個人的に友人關係ではあつたが……。他の理由でサマーデンに下つて行つたマリオは、父が一寸具合が惡いとだけくらゐならば云つてもよいと許された。すると間もなく醫師はすぐシャフベルグに行く用意をしてゐるといふ言葉を使者にことづけて寄越したが、セガンチイニは斷つた。彼の狀態が逆に益々惡くなつた時にマリオはポントレシナに下つて行つて醫者に電話をかけた。そして醫者は夜嵐の中にシャフベルグに到着した――その時はもうすでに施すすべもなかつた。

臨終に家族が周りに集つてゐたが、彼はおびやかす危險をも氣付かないものゝ樣であつた。彼は時々笑談を云はうとした。それから彼の模樣はもう一度よくなつた。彼は病床を小さい窓の所に移す樣に賴んだ、“Voglio vedere le mie montagne.” 之が彼の希望の最後の言葉であつた。「彼が繪の中に描かうと思つたのと同じ向ふの山並を見つめて、彼は今そこに橫たはつてゐた。併し彼の凝視の中には何等悲しい暇乞はなかつた。そこには畫家として愛する者としての全く情熱的な慾求があるのみであつた。彼は色、形、光、線をこれらの內に吸込んだ。何故なら、最も崇高な藝術となるべき何ものかをそれ等から形作らうと彼は思つてゐたからである。」（セルヴェス）

生涯の之等最後の日に於けるセガンチイニの行動は、彼の魂の中に於ける心理的な諸勢力の間に如何なる不調和があつたかを生々しく照し出して見せる。自分の力を十分に意識し

て彼はシャフベルグに登る。そこの高い所でこれが精進の目的を熱烈な言葉で宣言する。熱意を以て彼はすぐ様描き始める。そしてすぐその後で、ひどい病氣にかゝり、夜中吹雪の中を出て行つて自分を危くし、病氣に對する戰で一番必要な時に力を使ひ盡し、而も自分に提供された助力を頑固に拒む。

吾々は自ら問ふ、彼をしてあのやうな高所に登らしめたのは只仕事に對する刺戟と創造の喜びだけであつたらうか。生き且つ描くためにのみ彼はそこに登つたのであらうか。それ共之等の意識的な動機以外に、死への無意識の切望があつてそれに驅り立てられたのでなからうか。セガンチィニの魂の中で死の思ひが如何なる意味を持つてゐたかを吾々が出來るだけ完全に洞察することが出來れば、吾々は初めてこの點を明かにすることが出來るであらう。

彼は生涯の早期に死の力を知つたのであつた。彼はまづ兄弟を失ひ、次いで母を失つた。母の死は自分の誕生に關係があることを彼は知つてゐた。彼自身も生れた時は大變弱かつたので、生き續けるのは殆ど六づかしいと思はれたさうである。まるで奇蹟の様に二度死を逃れたことを彼は思ひ出した。それ故、死はいつも人間に近づいてゐるといふことを彼は人生の初期に考へるに至つた。從つて彼の人生に對する考へは眞劍なものであつた。

之等の悲しい幼兒期の經驗だけでは、死の思想がセガンチィニの上にこれほどの大きな支配力を及ぼしたことの說明にはならない。吾々はむしろ既に論じた內部の原因に歸らねばならない。彼のサディズム、彼の死の願望は、それらが主として向けられてゐたものから引出して來られねばならなかつた。その死の願望は一部分自分の死についての思想としての主題に逆轉し、又一部分は昇華されて反動作用により死とは正反對のものに變形した。セガンチィニに於ける死の願望の昇華は、彼の素描の最初の試みと最後の未完成の油繪とが死の繪であつたといふ事實によつて最もよく示されてゐる。彼はブレーラ學校を去つてから後間もなく、解剖學校へ入ることを得て、そこで最初の屍體實物研究を描いた。子供の屍體の側で疲れを知らず仕事をした幼い時と同じく、今や死の光景が彼を引付けた。このやうにして、彼の最初期の繪の一つは生れたのであるが、それは、"Il Prode"（死せる英雄）と名付けられた。この畫を描いてゐる間に、彼に深い印象を與へた一事件が起つた。彼はモデルとして使つてゐた屍體を、壁に向つて眞直に立てかけた。彼が仕事に夢中になつてゐる間に、太陽の光線にさらされてゐた屍體は、硬直さを失ひ、ぐらつとして、顏を下にして倒れた。若いセガンチィニはこの事件を凶兆と見做し、そしてその後長い間死の恐怖から逃れることは出來なかつた。

迷信への傾向は、この美術家に於いて極めて顯著なるもの

があつたが、これに依つても彼に强迫神經症の心理的特異性のあつたことが察せられる。强迫症の病人たちは自分の壽命の長さと死後の運命についての疑ひを特に氣にかけるものである。彼等は常に緣起を信じ易い。セガンチイニの心の動き方も全く同樣であつた。之について吾々はやがてもつと詳しく話すであらう。「死せる英雄」に次ぐ他の死の繪、例へば初期の「死者のために」、「空虛なゆりかご」、「「孤兒」などはこの早期に出來たのである。それに續いてブリアンツァ期の悲觀的な、憂鬱な風景が描かれた。サヴォーニンでは彼の死の思想は涅槃の繪の中に表現せられた。最後にマロヤでは、「鄕土に歸る」、「信仰の慰め」と大きな三幅對の一幅としての「死」が描かれた。併し乍ら、之等は彼が死を扱つた多くの繪の內のほんの數例に過ぎない。

死の豫感はかつて彼を離れることがなかつた。彼はその豫感を抑へて來たのは事實であるが、それは再び歸つて來た——彼の無意識の底から再び歸つて來た。セガンチイニの手記の中には次の主題のものが見出される。卽ち「不愉快な夢」といふので、一生懸命に反對の慾望と戰ふ所を描く夢の物語である。夢の最初の部分を讀むと次の如くである。「部屋であると共に敎會でもあつた神祕な場所に私は悲しさうに坐つてゐた。奇妙な姿の、嫌な形の恐ろしい者が無感覺な樣子で私に向つて立つてゐた。それは白いガラスの樣な眼を持ち、肉の色は黃色く、半ばクレンチ病（甲狀腺肥大して腦力衰退する病氣）で半ば死んでゐる樣でもあつた。私は立上つた、そして毅然たる眼差で其奴を睨みつけたが、其奴は私を橫眼で見て引下つた。それが暗い場所へ隱れて行くのを私は眼で追つたが、『この屍體の幽靈は私にとつて凶兆に違ひない。』と、私は思つた。私が腰を下さうと振返つた時に、ふるへが手足にまで傳つた。何故なら、そのいやな幽靈がまたもや私に向つて立つてゐたからである。私は怒り、のろひ、おびやかす如く立上つた。おとなしくそれは又消えた。そこで私は自分に云つた。多分こんな風にそれを追拂ふのは、惡かつたのだらう。自分に復讐するだらう。こゝに吾々は死の恐怖の正確な表現、企てられた防禦、殆ど呪はれた思想の再現、胸にたたんだ感情の爆發、死の思想を又しても克服せること、それから最後に、それは復讐に來るだらう。そして私は征服されるだらう！とのあきらめた忍從を吾々は見出す。

セガンチイニはある他の出來事に就いてと同樣、この樣な夢に就いても、そこに悲慘な意味があると考へた。彼は屢々死の前兆におびやかされゝばされる程、益々、安心を必要とした。それ故彼が凡ゆる種類の豫言に喜んで耳を貸したことが諒解される樣になる。彼は特に自分がチチアン程の歲まで生きるといふ豫言を堅く信じた。不吉な考へが度外れて强く彼の心に起る時は、何時でも彼はこの豫言を堅く信じたと云

はれてゐる。

彼はそれに止まらなかつた。強迫神經病者の分析によつて吾々によく知られてゐる或る方法に彼は賴つた。死の考へに對する一番有效な防禦は、それが自分自身又は他人に向けられるにしても、死の否定にある。死の存在を否定することは凡ゆる時代に於る人類空想の努力であつたのだ。死後の生命を一番堅く信ずる人々は、その生命が死の幻想によつて常に不安にされる人々、卽ち、强迫神經症者である。吾々は彼等に特種の宗敎性を見出す、宗敎では不死の信仰が大なる役割を演じてゐる。若しも死後の生命があるなら、之等の人々の自己苛責はしても始まらぬことである。その死を自分等が引起したと思つてゐるその人々は死なゝいで他の世界に生きてゐるのだから。

かつて以前に吾々は、セガンチイニが特別な考へ方で死を否定してゐるのを見たことがあつた。彼は肺病で死ぬ乙女の繪を描いて、それを花咲き出づる生命の繪として描いた。後年この切望は更に昂じて來た。彼は超自然主義への傾向を發展させ、精神主義への特別の獻身者となつた。暗合するものゝ如く、彼の或る繪は吾々が旣に語つた神祕的傾向を示し始めた。不愉快な夢の場合に於ける如く、現實に於ても、死の思想が益々優勢となつた。勿論彼はそれを克服して行つたが、大變な精力を使つてやつと克服したのだ。意識的な心では創造に向ひ、熱心に仕事への計畫を語つてゐるのだが、それと同時に、無意識の心では死の聲が益々明らかに聞えた。セガンチイニは死の前一年頃に起つた何事かを吾々に語つてゐて、それを死人との間に何かの交通の存してゐる證據として示してゐる。彼はあちこち步いてゐて路に迷ひ、雪の中に疲れて橫たはり、そして眠りにおちた。母の聲と思ばしき聲が彼を呼んでくれなかつたら、彼は確かに凍え死んだであらう。彼はこの事件によつて、他の世界への信仰を說明してゐる。

人生の多くの偶然的出來事の中には人が認めるよりもつと遙かに意味があることを、無意識の硏究から吾々は知つたのである。* 未來を豫告すると云ふやうな意味があると云ふのではないが、それ等の出來事は抑壓されたコムプレクスから生ずる無意識の影響によつて決定され、又例へば極めて屢々起る間違ひ、品物などを置き忘れるへマとして吾々が記述するやり損じの如きは無意識のせいだとして證明される。凡そこの樣な出來事は、偶然的で意味がない樣に見えるが、實際は無意識にそれ自身の論理的根據があり、又個人の全く知らない機能を果すのである。

註*『日常生活の精神分析』(大槻憲二譯)參照。

特に興味があるのは、未遂にもせよ旣遂にもせよ、決して稀ではない所の、無意識に發現せる自殺の場合である。憂鬱症に惱んでゐる人々は、憂鬱でない時には彼等の從つてゐる

最も單純な安全律を無視することがある。彼等は不注意に自動車の前にかけ出したり、間違つて藥の代りに毒を服んだり、又は他の場合にはしない様な方法で無樣に自らを傷つけたりするのである。凡そ之等の行動は意識的な意圖なくして起り得る。つまり無意識衝動の命令によつて行はれる。例へば、登山の場合に屢々起る出來事は、この無意識の自殺の範疇に入る。

セガンチイニが、一年中あらゆる時期に畫家として旅行家として獵人としてこの地方を徘徊してそのあたりの山々には慣れてゐた筈だのに、路を失つて冬の寒さの中で雪の中に眠りに陷る程不用心であつたのは極めて驚くべきことである。こゝに無意識的自殺への試みがあつたかも知れないといふ疑ひが吾々に起る。特にその頃は、憂鬱な思想が屢々セガンチイニの無意識に生じて彼の心には死への憧れがあつたことは大變明らかであるといふ事實によつて、この推定を吾々は支持するのである。併し、それは試み以上には進まなかつた。生きんとの反對意志は間もなくこの眠りを妨げると云ふ形でそれ自身を確立するに、倚成功したのであつた。女の聲は、内部意識から生じたのだが、外部に投出せられて、眠れる人を生命に呼戻したのであつた。母の聲は彼にとつて深い意味を持ち、母性は全生命の原則であつた。

この事件とその後間もなく起つたセガンチイニの死との關係から何等かの結論を吾々は引出すことを許されるであらうか。シャフベルグへの登攀のすぐ前に起つたことを見て見よう。この美術家の妻は次の如く語つてゐる(セルヴェス、二六四頁)「マロヤで過した最後の日曜に、彼は畫室の椅子の上で休まうとして身體を伸しました。私は外にゐて子供等と話してゐました。私が入つて行くと、彼は眠つてゐるやうでしたので、云ひました、「あら、お眼を覺まさせて惡うございましたね。折角お寢みになつてゐられたのに。」そこで彼はすぐ樣答へました、「いゝや、ねえ、お前よく入つて來たね。私は丁度夢を見てゐた樣な氣がする、――そして本當に、眼を開けて夢を見てゐたんだよ、確か――あの人達があの小屋から棺臺に運んでゐたのは私だつた(彼は死の繪を指さしました)。近くにゐた女の一人はお前だつた。そしてお前は隨分泣いてゐたよ。」勿論、私はあなたは眠つてゐて、それは夢だつたんですと云ひました。けれども、彼は自分の言葉を主張して、眼がさめてゐて全く眼を開けて見たのだと堅く信じてゐました。後間もなく、彼は私に云つたのと同じことをババに話しました。本當に、彼がその時見た凡ては、十二日の後に來ようとしてゐました。彼の死の繪は自分の死を現してゐました。あの人達は彼の棺をあの小屋から運んだのでした。その場面は彼が繪に描いたのと同じでした。繪の中で泣いてゐる女は、私でした。こゝに注意すべきは、その幻を見た時

に彼は全く氣分がよくて、午後には畫を描き續けたほどだと云ふことです。翌日、彼は朝の四時から九時迄仕事をして、それからその繪を箱に入れて、描いた場所から家へ運びました。同じ日の夕方、彼はポントレシナからシャフベルグの頂上まで疲れる程の三時間の散歩をすることが出來たのです。彼は精神主義を大變堅く信じてゐましたから、全く氣分がいゝと思はなかつたら確かにマロヤを出發しなかつたでせう。

この眼覺めてゐる夢の中に私は、普通の意味での豫感を認めないが、意識へと驅り立てる所の、死の願望の表現を認める。既に引用した不愉快な夢との比較は、注意すべき差違を示す。前の夢では死に對する力強い、さうだ、情熱的な防禦があつたが、今の夢では只その近接に對するおびえた恐怖がある。

セガンチイニがこの眼覺めて見た夢の翌日、彼が殆ど超人間的な仕事を遂行した有様を、彼の妻はまざ／＼と述べてゐる。山頂に達してから、彼は無制限な力強い感情から逆つたと思はれる誇らしげな言葉を發した。併し彼の生存への慾望はその力の一切を極度に昇華することによつてわづかに、死の思想の攻勢に對しその牙城をやうやく守備し得るに過ぎなかつたのだと吾等は理解する。

臨終の時でさへ、セガンチイニが憂鬱な氣分と戰ふやうなことは、彼の身邊の者等が滅多に見なかつたことだと云はれてゐる。それ故に彼の內部闘爭をかくも重大視することは私の誇張であるかも知れない。併し抑壓された衝動との戰ひは、セガンチイニの様な深い感情の人間が表面では殆ど氣付かれない様にする沈默の戰ひである。死のすぐ前まで生の肯定は常に勝利を得てゐたのであつた。死の願望が勝利を得た時に甫めて戰ひの記號が見らるべきだつた。

セガンチイニがシャフベルグに上つた時はこの様であつた。それから彼は病氣になつたが、それは彼につきまとふことになつた。若しも病氣が邪魔しなかつたら、多分彼は高山の凡ゆる壯大さを見て新しく勇氣を起し、エンガーディンの人に約束した凡てを實行する新しい力を得たかも知れなかつたのである。併し前には病氣とはどんなものであるかを知らなかつた彼を、この病氣が驚かした時に、無意識はその機會を利用した。吾々が前に述べた様に、勿論彼の行動は、健康に頼つて肉體的の惱みには注意しなかつたといふ印象を最初は與へるかも知れない。併し壁を打壞さうとしてゐる敵のために都城の門を開けてやることが果して防禦になるのであらうか。屢々起る様に、意識は無意識の動機から結果する行動を自分のものにしようとして自分の方に利用する。然るに實際は、意識には分らず、他の全く反對の動機が作用してゐたのであつた。セガンチイニは苦しい病氣で死んだが、病氣のためばかりで死んだのではなかつた。無意識の不吉な力が病氣

を助けに來て破壞作用を及ぼし、死そのものを招くにさへ至らなかつたら、彼は多分病氣を征服したかも知れなかつた。

然るに一方、彼は意識では情熱的な愛を以て人生が彼に意味した凡ゆるものに執着した。死の歩みが近づいてゐた時にさへ、彼は自分の藝術により尙もその美を賞でようと努めた山々を憧れ眺めた。吾々は生涯の終りに山に上つて、そこから約束した國を見下すことの出來たモーゼを思ひ出す。登山も亦彼の最後の旅であつた。

"Spenti son gli occhi umile......"セガンチイニの死に就いての之等の驚くべき句を以て、ガブリエル・ダヌンチオは、アシジのフランシスを思はせるこの作家の凡てを抱擁する愛への記念碑を建てたのである。

併し凡ゆる自然を限りない愛で抱かうと思つた同じ人は又その心に自分の命を破壞しようとする望みを持つてゐたことを吾々は知る。意識と無意識の力の間の爭ひを洞察する精神分析的研究に依つて吾々は彼と共にこの內部的分裂を諒解し感ずることが出來る。それはかくも早く閉ぢた生命の悲劇を吾々の眼に判る樣にする。死の影は、彼の歩み行くまゝに、疲れを知らぬこの作家につき纒つたのであつた。

七、或る患者との比較研究

以上、吾々はセガンチイニの生涯の多くの時期に彼を襲つたところの憂鬱狀態に就いて語つて來たのである。近年の益々增大した科學的經驗により我々はこのやうな憂鬱狀態の發芽とその理由に一層大きな洞察を持ち得るやうになつたのであるが、各々の場合は、もしも各々が滿足すべき說明に到達せんと欲するならば、個人の無意識の完全な精神分析を要求してゐる。このやうな狀態の精神分析の一般的結果は、彼の生涯の間にこのやうな試驗を吾々がして見ることの出來なかつた人間の惱みを考察するに當つて、非常な注意と用心とを以て適用せらるべきである。心理的調査に依つて、醫學上メランコリーと名付けられてゐるこのやうな憂鬱狀態は判然なる原因から起ることを、我々は知る。この事に依つてセガンチイニの惱みが何が判然とした臨床的病氣に歸せられるものと云ふわけではない。我々はたゞ如何なる程度まで精神分析的研究の最近の結論がこの美術家の心的狀態に一層の光りを投ずることが出來るかを暗示しようと試みんとするに過ぎないのである。

原則的に云へば、これ等のメランコリーの狀態は問題の人物の心的素質に對してあまりに力强かつた何かの出來事に續いて起ると云ふことが見出される。卽ち、その出來事には彼の心的生活を底の底まで衝動させる何分かの損失又彼にとつて絕對的に堪え難く打克ち難く思はれ、そのためには（彼の意見では）彼の生涯に於いて償ひや補ひやを見付けることの

出來ないところの何らかの損失である。あらゆる場合に於いてそれは彼の感情の中央の位置を占め、またその人に對して全的な愛を集中した人間の喪失であると云ふことを、我々は見出す。併しながらこの喪失は死に依つて起されるとは限らない。本質的な點は愛する對象との心的關聯が完全に打壞されたと云ふ感じである。そのやうな喪失の一番普通の例は、特に親しい何人かに依つて惹起された、償ひ難い絶望である。これから續いて起る心的憂鬱は、徹底的に棄てられたと云ふ感情である。

　併しながら、それ自身に於けるこのやうな實際上の一出來事は我々がメランコリー、又はそれに似た狀態に於いて我々が見出す如く、心的事物のこのやうな苛酷な障害を起すに足りない。絶望より生ずるところの本能感情の力、似たやうな種類の、以前の出來事に依つて、一部分に說明され得る。それはそれ自身としても、心に似たやうな傷害を起してゐたのである。そのやうな場合を精神分析するに當り、我々は段々に記憶を想起させて遂にその人のなほ十分な心理的抵抗力がまだ十分に發達してゐない時分にそれを極度に重くるしくのしかゝつた早期幼年時代の出來事にまで到達する。現在に至るまでの我々のあらゆる經驗は、一人の人間の場合に於いて極初期の幼年時代に彼を失望させたものは普通彼の母であつたと云ふことを我々に示してゐる。

　セガンチイニの場合に於いて、彼の後期の生活を了解するために非常に重要なこの過程のあらゆる細部を試驗すると云ふわけに行かないのは勿論である。併し既に右に略述したやうに、この藝術家は幼年時代から後年の生活に葛藤を持續けたに相違ない。その葛藤は心的原因に依つて時々擡頭して來たものであつた。一つの更に深い洞察を我々は精神分析學の最近の一層の發達に依つて持つに至つた。我々は、成人の種々の心的狀態が幼年時代の經驗をモデルとしてその內容と形式により造型せられると云ふことばかりでなく、人は幼年時代に一度經驗したことを成人になつて繰返すと云ふ强迫に實際從ふものであると云ふことをも、我々は知るに至つたのである。

　セガンチイニの場合に於いては、幸福な幼年時代に續いて見捨てられた時代が續き、その時代が今度はそれへの補償を熱望するに至つた、との意見を我々は立てたのであつた。我々は彼の後年の生活にも同じやうな心的狀態の繼續を見出す。サヴォーニンに於いて彼は幸福で多忙であつたが、それに續き引退と憂鬱の時期が來たことを想起して御覽なさい。この美術家自身に依つて選ばれた孤獨は見捨てられた狀態の繰返しである。それは實際、陰鬱な悲しい氣分に彼自身を全く包まうとする、强い衝動として我々には思はれるに違ひない。セガンチイニ自身の證明に從へば、惡い母を罰すると云

ふ數々の畫がそれに續いて描かれた。それは恰も彼の無意識が藝術家をして何度も〳〵幼年時代の型に從つて幸福と絶望と敵意と、それの窮極の克服を反復させたかのやうである。

もしも我々が憂鬱に屈する人々の心的生活を注意深く研究するならば、セガンチイニに於いて述べられたのと同じやうな、本能感情の狀態を見出すであらう。ついこの間、或る患者が私に一つの夢を報告した。それは驚くべき程にセガンチイニの惡い母たちの畫を想起させるものであつた。この夢を見た人はこれ等の繪をよく知つてゐたわけでもなく、またインド神話の源泉がセガンチイニに知られてゐたのでもなかつた。その夢の中で彼は一人の女の姿を見た。その姿は空中にたゞよつて次第に彼の母のやうになつた。その母は彼に近付いて如何にも彼を魅惑するものゝやうであつた。が、たゞそのまゝ辷つて行つてしまつた。この事は夢の中で數回繰返された。この患者が自分で分析者に向つて告白した心的障害は彼の母に對する感情と密接に關聯してゐた。その母は彼の幼年時代に連續して痛ましき失望を彼に味はせたのであつた。元々、愛情を求める心强かつた彼の母は、或る日この子供にあらゆる抱擁を禁じたのであつた。何故なら彼は明かにエロティックな態度でその抱擁に反應したからである。併しこの母親が何故このやうに態度を變へたかを云つて聞かせたので、この少年の內なる最も激烈な感情をなだめたのであつた。母親は抱擁が嫌ひだと說明したのであつた。これより先にも後にもこの少年は彼の兩親の親愛を見る機會を持つた。そして彼の母親がその親愛に於いて能働的態度をとり、父親を誘導しさへしたと云ふことを確信した。夢の中の母は夢の本人に近付き、直ぐに再び引退るのは今や容易に了解せられる。彼女の浮動せる態度は性的快樂を示してゐる。象徵性は多くの夢に依り、また人間空想の他の源から、我々には親熟したものとなつてゐる。この夢の或る細部は、母親に對して復讐せんとする傾向を示してゐることを云ひ添へておかねばならない。この夢がセガンチイニの惡母の繪に似てゐることは否定すべくもない。

メランコリーの臨床的場合に於いて、我々は言葉の最も原始的な意味に於ける母への憧憬を見出す。その憧憬は最も深い心理層に於ける復讐の空想に依つてばやかされてはゐるが……。屢々この憧憬は母の乳房に於ける最初の滿足に對して表はされる。例へば、右の夢を報告したこの患者は嘗て憂鬱狀態にあつた。そして彼の感情に依れば、そこから逃れ出る道がなかつたのである。丁度その時、彼は、よい意味でも惡い意味でも彼にとつてその母を代表した或る女に會つた。性的結合に對する何らの反對を持たずに、彼女は明らさまにその慾望を示した。彼の要求は違つてゐた。彼は頭を女の胸に載せて眠つたが、後に眼がさめて見たら憂鬱狀態から脫して

ゐた。以前には人生に失望して疲れてゐたが、彼は暫し人生との或る接觸を再び得たのであつた。

この出來事はセガンチイニの死の直前の行動に如何に似てゐることであらうか。或る冬の日に彼は疲れきつて雪の中に腰を下した。少し經つて、ずつと前に死んだ母の聲がきこえて彼は眼をさました。彼は人生に歸る途を見出して、少くとも一瞬間に彼の悲しい氣分をふり捨てることが出來た。

人間が別の一人の人間との最初の、また最も永續的の心的結合は、精神分析學のあらゆる經驗に從へば、最初期の樂しき印象、母の乳房に吸付いたことから生じてゐるのである。哺乳する母との結合のこの力は、人間の心理の中に種々な形で現はれる。セガンチイニの生活に於いては、大地、自然、アルプスの風景など、總てはその母を代表してゐることが判るのである。自然の風姿相貌を吸ひ込んだその吸込み方の熱烈さは彼の生活の最も強い動力であつた。實に彼がその山々に對する憧憬を表はした最後の言葉に至るまでその動力に依つて突き出されたものであつた。

そこで我々にとつて愈々明かになつて來ることは、セガンチイニの氣分の時々の變化はその母親に對する憧憬から生ずるものであると云ふことである。極最初には滿足を與へられてをり、その後失望させられたこと、それが彼の生活の主要な支へであり、またその早世の原因でもあつた。(完)

家庭に於ける愛憎の心

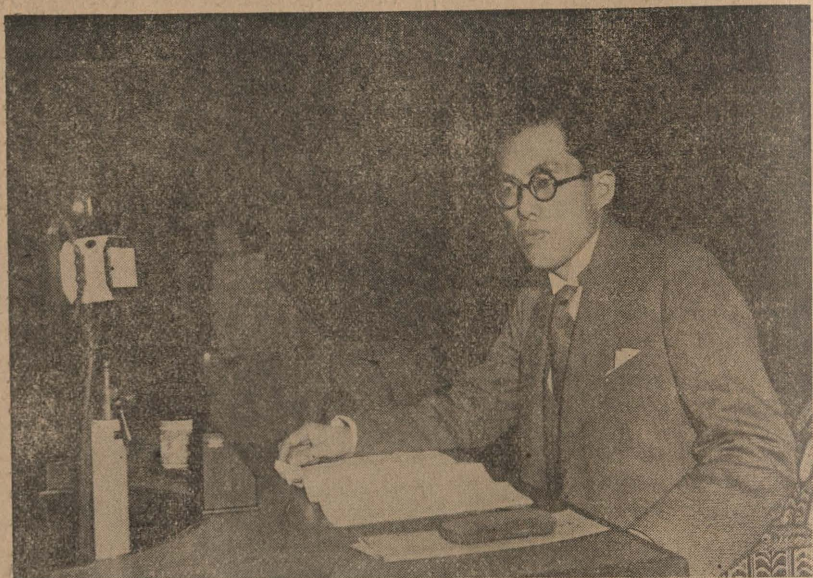
大槻憲二

左記は五月九日午前十時二十分、大阪中央放送局から家庭時間の話として放送したもの〻草稿である。題は「家庭を形作る心」と云ふのであつたが、本號特輯題目に呼應してかく改題して見た。內容は分析を全然知らない一般家庭婦人のための通俗講話であつて本誌讀者には物足りないものであらうが、かう云ふ種類のものも時々要求せられるので、今までの例を破つて始めて掲げて見た。

×

家庭の內を圓滿にするにはこれまではたゞ御互の間の愛情をつよくすればよいのだと云ふ風に考へられてゐましたが、私共心理學を研究して見た者の立場から申しますと、却つてその反對に、相互の間の憎みや嫉妬心や競爭心をうまく處理することの方がむしろ大切なことのやうに思はれます。さう云ふ憎惡や嫉妬心などの方がうまく處理せられさへするならば、愛情の方は別段努力しなくても自然に增進せられて來るのであります。何となれば、誰でも人々は身近の人々を愛したがつてゐるのだからであります。

それは丁度、子供に勉強せよ〳〵と口の酸くなるやうに攻め立て〻もあまり効果がないが、勉強したくない心を何とか處置し、又は勉强以外の事で興味を持つてゐる事への滿足を與へてやつたりすると、勉强は自然にするやうになるのと同じでありませう。子供としては勉强しなくてはならない位の事は、親に云はれるまでもなく、百も承知しきつてゐるのであります。

親子、夫婦、兄弟姉妹の間にも憎みや競爭心や嫉妬心が强く働いてゐます。さう聞いて驚いたりいやな氣持のする方も多からうと思ひますが、正直に御自分の本心を反省して御覽になるならば、認めないわけに行かないのであります。實は愛情の裏には必然的に憎みが潜んでゐるのでありまして、憎みがなければ本當に愛情は愛情らしい强さを持たないのであ

（大阪中央放送局にて放送中の大槻氏）

ります。丁度、お砂糖の甘さを徹底させるには少量の鹽を加へなければならないのと同じであります。また香水の匂ひのよさを高めるにはアンモニアと云ふ悪い臭ひのものを加へなければならないのと同じであります。

憎みや嫉妬心や競争心は抑へようとして抑へられるものではありません。それ等は當然心の中に存在するものとして正直に認め、適當な訓練を加へて逆に善用することが大切であります。例へて見ますと、子供はお客のある時には誠に邪魔なものでありますが、子供はお客のある時に押入れに押込んでおくと云ふやうな方法をとつたならば、子供は押入れの中から泣き叫んでお客に失禮に當り、母親の平素の心掛けの悪いことをさらけ出す結果になります。然るにその逆に、子供を平素からよく訓練して客の前で適當に振舞ふやうに躾けておけば、お客に對する愛嬌ともなり、接待にもなるのと同じであります。

愛と憎とは同じ根から出た二種の變り花であり、同じ心の表と裏とのやうなものであります。澁柿の口の歪むやうな澁さがやがて變じて口のとろけるやうな甘さになるのと同じで、憎みはやがて愛となり、愛はまた時に逆轉して「可愛さ餘つて憎さが百倍」するものであります。

併し嫉妬や憎みや競争心のやうな暗い方面の心は本人自身も意識するのがいやでありますから、どうしても心の押入れ

の中に押込んでおくやうになり勝ちであります。併し押込まれたこの心は押入れの中で決しておとなしくしてゐません。泣き叫んで愛情の心の働きをかき亂し、自然家庭のいざこざが、仲のいゝものゝ間に於いてほど、却つて頻發する結果になります。

親子間、夫婦間の愛情のいきさつはあまりに微妙であり、複雑でありまして、かう云ふ席からは一寸あけすけに申上げにくう御座いますが、最も目立つてよく川柳などにも詠はれてゐますのは、嫁姑間の爭ひと、兄弟姉妹間の競爭とでありませう。姑にとつて嫁は可愛い息子の妻でありますから可愛い筈でありますが、「憎い嫁可愛い孫をやたら生み」と云ふ川柳によく表はされてをりますやうに憎いものなのでありります。何故憎いかと云ふと、それは自分の長年の手中の玉(息子)を奪つて行つた女だからであります。母一人子一人のところへ嫁が來た場合ほど、嫁姑の間の葛藤が甚だしいと云はれてゐるのは、玉を二つも三つも持つてゐるものより、たつた一つしか持たない者の方がその玉をとられて悲しむ量が多いのと同じわけであります。かう云ふ場合は、多くは姑の方が憎まれものになりますが、考へて見れば姑は可哀さうなものではありませんか。長年命をかけて育てゝ來たものを持つて行かれたら、生きて行く道が塞がれたやうに思ふ方が當然であると思ひます。男には家庭に於ける愛情生活の外に社會的な仕事と云ふものがありまして、その方で氣がまぎれますので、年とつてからの愛情生活の方は比較的あつさりしてをることが出來ますが、女の方は全生命を家庭生活にかけてをりますので、一度この方が破産しますと、もう精神上の生活の糧がなくなるのであります。云はゞ、男は仕事と愛情と二つの銀行に預金し投資してをりますので、一方が破産しても他方の利息で喰べて行けますが、女の方は愛情銀行一點張りなので、これが破産したら自然執拗に取りつけにつめかけるやうになるのであります。嫁はその點をよく理解して姑の憎惡を上手にあしらつて行くやうにするならば、いつかは遂に姑の心を柔げることが出來るやうになるであらうと思ひます。

息子を嫁に讓り渡した姑は、今度は孫を嫁から復讐的に奪つてそれによつて破産した精神上の糧をとり戻さうとすることがまた屢々であります。孫をめぐつて嫁姑の闘爭が相當深刻に繰展げられます。その時、可愛がるのか憎むのか分らないやうなことが時に見られるのであります。そこで「憎い嫁可愛い孫をやたら生み」と云ふことになりますが、例へば、嫁は子供に向つてもうお菓子はやめなさい、お腹をこわしますよと云ふと、姑はなアにいくらでもおあがり、お婆ちゃんの喰べさせるものに毒は這入つてゐないよと云ふやうなことを申します。さう出られては嫁も何とも返事が出來ません。

見す〳〵毒になるとは知りながら孫の喰べるまゝに見てゐる内に、子供は胃腸を段々弱めて遂に疫痢などにかゝつて死ぬと云ふやうなことが實に屢々私の身邊でも見られるのであります。子供に死なれて姑は始めて自分の憎惡を意識して良心に咎め、その償ひのために菩薩心を起してお寺通ひなどを始めます。さう云ふ心境を寫したのが越後西念寺の所謂嫁威し肉附面の傳説であらうと思ひます。して見ますと「可愛い孫をやたら生み」とは云ひますが、實は心の表側では可愛がつてゐて心の裏側では憎んでゐるのだと云はねばならぬ場合も多いかと思ひます。

兄弟姉妹の間の競爭心や憎惡はこれまた嫁姑間ほどではないまでも、相當にはつきりしたものであります。俗にも兄弟は他人の始めと申します通り、同胞間、殊に同性同胞間、即ち男同志、女同志の間には、どうしても非常に熾烈な競爭心のあるものでありまして、その最も元の形は異性親の愛情をめぐつてなされます。卽ち、男同志の兄弟の間では母親の愛情量が少しでも自分の方に多くなければならないと云ふことになります。それ故に、親たるものは異性の子供達兄弟の間に愛情を公平に分配してゐると云ふことを確信せしめねばならないのであります。時にはもしそのやうな技倆があるならば、兄弟の双方に我こそ親の愛をより多く受けてゐると云ふ信念を與へることが出來なければならないのであります。子供はよくお菓子が多いとか少いとか云つて爭ひますが、さうして親はそれを見てケチ臭いとか卑しいとか云つて叱りますが、それは實はお菓子そのものが問題なのではなく、お菓子の與へ方に表はれてゐる親の愛情の量が問題なのであります。お菓子は丁度、愛情の寒暖計のやうなものだと子供等はきめてゐるのであります。そこのところをよく理解してやらなければなりません。現にそれほど大騷ぎをして奪ひ合つたお菓子でも碌に食はずにほうり出しておいて、しまひには忘れて了つてゐると云ふやうなことが隨分あるので、それを見てもお菓子そのものが必ずしも問題でないことがよく分るのであります。親の愛情の方を漸次に卒業すると、今度は異性同胞の愛情が問題になつて來ます。姉さんは僕と弟とどちらをより多く愛してゐるか。兄さんは姉さんと私とどちらをより多く愛してゐるか、などといふことがなか〳〵の大問題となるのであります。さうしてそのために人生に生き甲斐を感じたり絶望したりします。同胞の愛情を卒業出來ると、今度は仕事の上での競爭であります。俺は兄よりも弟よりもいゝ學校へ行き、いゝ成績をとらなければならない、出世しなければならない、金持ちにならなければならない、と云ふ風であります。何故さうならなければならないのか、本人たちにもよく分らないのでありますが、根深い憎惡が愛情の裏に強くこびりついてゐる以上は、さう云ふ風な地獄の責苦に一生

を惱まねばならないのであります。

このやうに人間の愛憎の心は誠に扱ひにくいものでありますが、その扱ひにくいわけは、愛憎が心の表側にはなく、裏側の深いところに根を生やしてゐるからであります。ですから殊に裏側へとかく匿れたがる憎みの方の心を表側の方へ引張り出して見ますと、存外扱ひやすくなつて來るのでありま す。丁度、暗闇に居る猛獸は恐ろしいが、これを明るみへ引出せば何とかあしらひが出來るのと同じであります。左様、人間の奥底の心、愛憎の心は猛獸のやうなもので、古來、佛敎の經典にも人間の心を猛獸になぞらへたのが隨分澤山にあります。たゞ我々はその猛獸を、昔の聖者たちのやうにたゞ憎むべきもの恐ろしいもの、抑へつけるべきものとしては考へずに、牛肉のやうに榮養になるものだと考へてゐる點が昔の人と違つてゐるのであります。

殊にむつかしいのは愛情を家庭内の誰彼に與へるその量であります。愛情は藥や食物と同じで、適量を與へないと却つて毒となり害となります。あまり少な過ぎると愛情上の榮養不良者となるが、多過ぎると、愛情上の食傷患者となります。食傷どころか時には中毒を起します。愛情よりも憎惡の方が我々にとつて却つてスガ／＼しい感じのすることとさへあります。それはモルヒネやコカインのやうな毒が却つて藥として作用するのと同じであります。不良少年と云はれてゐるものは、これを心理學的に研究して見ますと、みな愛情上の榮養不良者でありまして、幼い頃に兩親、殊に異性親の愛情を十分に滿喫せずに育つた子供等であります。日當りの惡いところに生えた草がとかく莖ばかり青白くヒョロ／＼と延び易くなるのと同じで、幼年時代に兩親の愛情の日光に十分當つて育たない子供は大きくなつてからはどうもいぢけてゐて、折角持つて生れた才能をさへ十分に生かすことが出來ないやうであります。不良少年はその意味で、非常に可愛さうな人達であつて、決して憎むべき人達ではありません。

その代りまた親があまりに甘くて、その愛情に食傷してゐる子供たちはとかく精神上の胃弱者で、これまた社會に立つて一人前の活動が出來ないのであります。片親のない子供がとかく精神的に健康でなく、いつまでも子供つぽくて依賴心の強いのは、親の方が、その配偶者に注ぐべき愛情までもその子供に注ぎ出すので、子供は毎日二人前の御飯を喰べて育つて來たやうなものであります。これでは愛情上の胃擴張患者になるのは當然であります。

それ故に子供が段々一人前になつて來ると、さう云ふ風に愛情の食ひ過ぎをやらせて、それで子供を愛してゐるのだと考へてゐるやうな親は、漸次に子供から敬遠されて行きます。それは丁度、春になつて暖かくなつてゐるのに、いつまでも冬の綿入れを着せておきたがるお婆さんのやうな、相手の迷

惑には無頓着な一人よがりの愛情だからであります。子供はやりきれません。それでそのやうな愛情をうるさがり、迷惑がつて、逃げ出すやうになります。すると母親の方は、今更親を邪魔にするとか何とか云つて僻みますが、このやうな母親は、子供に對して支給すべき愛情の量は年齢と共に變化させなければならないと云ふことの分らない人たちであります。赤ちやん時代には假りに百だけの量の愛情を注いだとすれば、小學校へ行く時には七十位にし、中學へ上るやうになれば五十位、大學を出れば三十位、嫁を貰つてからは十位と云ふ風に漸次にへらして行つて、と云ふのがもし語弊がありますやうならば、その愛情の質に變化を起させなければならぬと申しませう。抱いたり擁へたりするやうな生々しい愛情ばかりをいつまでも持つてゐて、その愛情を漸次に純化して行き精神化して行くことを知らない母親は、自分を苦しめ子供を悩まし、家庭を形作る心を滅茶々々にして了ふのであります。そのために母親自身も神經病となり、子供も神經病となります。神經病の親は子供をも亦神經病にしてしまひます。それ故に子供の神經病を心理學上から治療するには、まづ親の神經病から治療してかゝらなければならないのであります。「親の因果が子に報ひ」と云ふ言葉は古いですが、そこには永久に新しい意味が發見せられるのであります。

家庭内の各員の相互間の心の成り立ちに就いてはなほ申上げるべきことは他にいくらでもありますが、時間もありませんので、今日はこれだけにしておきます。御静聴を感謝いたします。(完)

前號正誤表

頁	行	誤	正
目次	一二	戌子	戊子
七	一	心理的	精神的
〃	二	彼方へ	他方へ
一九	九	何分	何ら
八六下	一四	絕行	紀行
〃	〃	不考泉	不老泉

前號冊子正誤表

頁	行	誤	正
一	一八	何分	何ら
三下	一五	なる	ある
四上	一三	矛規	子規

佛教の愛慾苦と分析學の性説

奥本島田

釋迦が現世苦感から成道に至るまでの經過は、苦惱——出家——苦業——成道、といふことになつてゐる。私の苦惱感の自己分析の結果は、苦惱——ナルチスムス心理——寺院入り——再生、といふ一聯の經過を得た。其後更に分析を續行して、性慾の惱み——ナルチスムス——抑壓——再生、といふ順の一聯の結果を得たのである。以上の三聯の各々は同一である。さうして、性慾＝寺院入り＝抑壓、及び、ナルチスムス＝再生＝開放、である。苦惱——ナルチスムス——抑壓——再生、この一聯は、抑壓——開放——抑壓——開放、といふことに動いてゐるのである。これは丁度心臓の皷動の如く、アミーバーの運動の如く、その彈力性は地上に落下した物體がその反動性（惰力）を繼續して行く如くである。

苦惱——ナルチスムス——抑壓——再生、の一聯は生物の發生と吾人の性生活と同一である。これを表示すれば——

（無意識心理）	（性生活）	（生物發生）
1、性慾（抑壓）	男女結合の困難	精卵の運動
2、ナルチスムス	性交	胎内生活
3、抑壓	射精	出産道の抑壓
4、再生	分離（解放）	出産

人生苦惱感を精神分析法にかけて解放して行くと、性慾が心理的に充足されるやうになる。精神分析は抑壓せずして性慾を昇華せしむるのである。

現實苦惱よりユトーピア願望の生ずるのは抑壓されたる性慾の發散の願望に外ならないのである。このユトーピアとは佛教の語を以てすれば涅槃である。

×

人生をその苦惱から救はんとするものに宗教があるが、佛教はその特殊な一つである。佛教と精神分析とは共に東洋的

な道であり、類似してゐる點が頗る多い。わが國の分析學者の間に專ら云はれてゐることである。佛敎では人生の苦惱は愛慾にあるとしてゐる。この點は、人生の苦惱を分析法にかけた結果と一致するものがある。佛敎に於いては、愛慾の絕滅によつて人生をその苦惱から解脫せしめんとするのであるが、その修養法は他の宗敎に於けるとはいさゝか違ふとは云へ、やはり大體性慾の抑壓によつてこれを昇華せしめんとするものの如くである。これに反して、分析法は抑壓せずして性慾を昇華せしむる方法をとるものである。この事は佛敎(或は他の精神療法)と精神分析法との重大なる、劃然たる相違點でありまた斯學斯法の新たな存在理由でもある。從來、性慾の抑壓は人間を神經病にかりたてて來たものであるが、分析法はこの缺陷を避けてゐることがその特徵である。精神分析は人生をその神經病より開放し、戀愛性慾の病的抑壓より開放する技法である。

×

私は佛敎と精神分析とのコムプレクスに依り精神分析に入り、其後數年間自己分析を續けて來た。丁度本誌と同年齡である。自己分析をなすために最初に力となつたことは大槻氏が「分析者によらなければナルチスムスはとれない」と言つて來られたことに對し、私は「分析の創始者は完全なる分析者に分析を受けたのではなからう」といふ考へ(反撥)があつたことに負ふところが大きい。また自己分析を進展せしむるためのリビドー關係は本誌に負ふものである。特にその編輯者が逆轉嫁をなしてゐないといふことである。

斯學の創始者フロイドはユングやアドラー等の離反によつて分析學を確立せしむるに負ふところがあつた(又、この離反者もその離反によつて自己の學問を確立してゐる)如く、私の自己分析も分析者(大槻氏及びフロイド全集によるフロイド)とのコムプレクスを解消し、雜誌「精神分析」と社會とのコムプレクスを解消し、佛敎と精神分析とのコムプレクスを解消することによつて次第に精神分析の特質——分析法は抑壓をしないと云ふこと——を認識したのである。かやうなわけでコムプレクスとして解消されて來たものは私の分析の進展のために負ふところが大きかつたのである。今日は、昭和八年以來本年頭初まで大約二千枚餘の原稿紙を要して(自己分析のために)聯想をとつたことに徵して見るも如何に自己の無意識の客觀化が困難であつたかがわかるのである。分析者に直接分析を受ければ、これだけの時間(年月)と勞力が短縮されるのである。が、私にすれば、それだけの報は十分にあることを是認せないわけにはゆかない。

×

佛敎は現實皆苦說を唱導し、その現實苦は愛慾にありと云ふ。これ二千年以前に於いてすでに性慾說が唱導されてゐる

ものである。精神分析は何でもかでも戀愛性慾に歸着せしむると言つてゐる人があるが、好むと好まざるとを問はずそれが事實ならば仕方がないことである。事實の吟味の前に好惡を持出すものは共に學を語るに足りない。性慾說がいけない、又は好まないといふならば、佛敎の現實皆苦說に對する性慾說は如何?! 東洋民族は、否、佛敎信仰者は二千年來性慾―を支持して今日猶容易にそれを離脫し得ないのである。吾々は佛敎の性慾說には何等異議をはさむものではないが、佛敎がその修養法に性慾を抑壓して昇華(解脫)せしめんとすることは、人間を神經病に追込むこととなるものだといふことを認識せなかつた――今なほしてゐない――ことは人類文化の大きな缺陷となつて今日に至つてゐることは遺憾であると言はねばならない。

精神分析は佛敎と同じ東洋的な學問であるが如上の缺陷を補ふて人類文化のために新しい光を投げかけて來てゐるのは喜ばしいことである。

本論を分析するならばここにもまた「抑壓――開放」の皷動がある。吾人はこの無意識の運動を意識化し得てもそれを停止せしむることは出來ないことである。たゞ、その活發なる永續を願ふのはあながち私自身のみではあるまい。(完)

わが分身

岐美

私は好む、ソルベエグの歌を
人を待つて年老いて紡車(いと)をまわすソルベエグの歌を
心の中で靜かにこの歌をつぶやく時
私の胸に迫るかくも熱き思ひは何か?
ソルベエグは私の分身、死神
ペア・ギュントは玉葱の皮をむきながら
永遠の虛無なる死の家に歸つて來る。

やつぱりさうなのだ!
死神のふところに歸る男の爲に運命の紡車(いと)をまはす
女は誰だ?

(昭和十四年四月)

ソルベエグはイプセン作戲曲「ペア・ギュント」中の女性の名

憎惡及び嫉妬の科學的研究

藤田由美

一、イェール大學の人間關係研究所

米國イェール大學では近頃各方面の科學者を網羅して人間關係研究所を設立し、種々な形式で表はれる憎惡及び攻擊衝動の調査に着手した。この研究所は官學的なものではなく、先驅的な事業である。これに類似した研究機關は十年ほど以前に、やはりイェール大學出身者たちに依つて設立せられたこともあつたが、今度のはそれとは別であつて、彼等はこの研究結果に依つて人間關係の幸福と圓滿との途をはからうとしてゐるのである。

ロックフェラー中央敎育委員會は早速この研究所のために五層樓の建物と二百五十萬弗の基金とを提供した。各方面の學者がこの建物の中に種々の人間や動物を連れ込んで樣々な調査を試みた。かくして犯罪、病氣、失業、戰爭神經症、靑年期の吃音その他種々の問題が取上げられた。研究所長は心理學者マーク・アーサー・メイ博士（Dr. M. A. May）である。博士は敎育映畫に造詣の深い人である。博士がこの研究所に入つたのは一九三一年以來の事で、一九三五年以降、所長の位置に就いてゐるが、科學者は何れも獨尊的傾向の人々が多く、これを統一し、何かの研究を纒めることの如何に困難であるかを痛感し、まづ人間關係の研究が科學的に成立し得るためにはまづ暫定的に理論を立てゝ、その理論に基いて調査し、調査の結果に依つてその理論を吟味し、遂に一定の數學的結論を歸納し來らなければならないと考へた。そこで選定せられた理論と云ふのは、ジグムント・フロイドの抑壓・攻擊說である。詳言するならば、人間の自然な衝動が抑壓に依つてその充足の機會を失ふと、その抑壓者（それは他人か社會か自分自身か、何れにもせよ）に向つて攻擊慾が勃發して行くのだとの說である。攻擊のあるところ不滿があるのである。研究所員たちはこの理論に基いて社會的行動並びに個人的行動を、卽ち罷業、自殺、人種的偏見、改革的意見、私刑、諷刺、犯罪、探偵小說熱、夫婦喧嘩、戰爭などを調査して見た。

研究所は最近にその調査の結果を發表したが、それに依ると悉くこの理論を支持することになつてゐる。各方面の科學を代表する八名の科學者が執筆してゐるが、中でも目に立つ結論を示してゐるのは敎育界の方面であつた。卽ち敎育は自然的な衝動を矯めたり方向轉換させたりする操作であるか

ら、それ自身抑壓的であり無理强ひである。そこで學生は攻擊的となるが、その一例はボールで教室の窓ガラスを破つたり、ひき蛙を先生の机に入れたりする。

最も犯罪し易いのは一人前の扱ひを受けてゐない人々、貧民、離婚せられた人々、などである。

ドイツ及びイタリーに於いては敗戰又は衰微に依る國民的不滿は外國人、殊にユダヤ人にさし向けられてゐる。ロシアに於いては攻擊慾は政府の方針を案る者等に向けられてゐる。アメリカに於いては攻擊慾は指導者や外國人に向けられずして自分等自身に向けられ、個人の進步を無慈悲に强制したり、映畫や下らぬ文學に逃避したりすることに向けられてゐる。

研究所員の結論に依れば、デモクラシイもファシズムもコムミュニズムも現在のまゝでは多くの抑壓と無理とが含まれてゐるから、そこに改革が加へられない限りは、反動の革命を見る危險に瀕してゐると。

二、放火と嫉妬

放火する子供を精神病學的に研究して見ると、彼等の多くは種々の妄想を抱いてをり、その妄想の世界には赤魔、亡靈、骸骨などが出沒してゐることが分つたのである。然るに他方或る種の子供達——彼等の内には別に宗教上の訓練などはない者も含まれてゐるのであるが——は聖書の教へにそつくりの推理の仕方をしてゐるものがあるのである。彼等は放火に依り惡を滅ぼし不淨を淸めると信じてゐるのである。ニュヨークのベルヴィュー病院長ヤーネル(女史)博士(Dr. Yarnell)は最近米國の精神病學會に於いて左樣に報告してゐるのである。

女史が六十名の放火兒童に就いて、この病院に於いて、一九三七・八年間に調査して見たところに依ると、憤れる子供等にとつて放火は「攻擊のための最上の手段」であることが分つたと云ふ。

兩親の一方又は兩方の愛情に就いて自分の有力な競爭者の爲めに自家に放火したと云ふ子供に就いて女史は語つてゐる。彼等は自分の兄弟姉妹を、或は母親さへを殺さうとした。彼等は母親が旣に自分を愛してゐないと信じてゐるのである。學校又は敎師を憎むあまり敎室に放火した子供の場合も擧げられてゐる。自分を攻める惡魔や燃える怪物が出沒する惡魔のために虐まれて放火を敢てするやうになるのであると女史は報告してゐる。或る少年は嘗てラヂオで聞いた物語に暗示を得て、そこに出て來た種々な怪物を妄想の中に出沒させ、放火の動機にしてゐた。

これ等の子供は殆どみな宗敎的な訓練を受けてはゐないのだが、從つて聖書の中の物語などは何も知らないのだが、そ

れにも拘らず聖書中の推理法に極めて近似した理窟を云ふのである。悪人は火で焼かれ、一切は新しくなり清められると云ふ風である。彼等は悪魔を空想してをり、悪魔にそゝのかされて放火したのだと云ふ。多くの者は地獄の火を見、また焔の中に悪魔を見る。さうして悪魔や幽靈や骸骨の夢を見、彼等に襲はれる（死の象徴）と考へてゐる。彼等は死は過渡であると考へ、焼かれることによつて善くなり、新しい生命に復活すると考へてゐるのである。或る放火少年は、自分が焼かれて善良な少年として蘇生したものだと精神病學者たちに物語つたと云ふ。

バリカン艦隊の分析

澤田雅男

東京朝日新聞の四月廿八日の紙上に『長髪を刈れ』と題した投稿が掲載されてゐた。其内容は時下日支事變の眞只中國民一般の緊張を要するの秋、青年達の長髪をだらしなさの最たるものとなし、田舎の女子青年團のバリカン隊が、土地の長髪連を強襲して殲滅的打撃を與へた事への讃美である。それを今分析のプリズムを透してスペクトル檢査を試みたい。

女性のエスの奥底に潜んでゐる一般的男性憎悪は、常に蝎の様な眼を光らして跳梁の機をうかゞつてゐる。この場合未婚者がその組織の大部分をなしてゐるであらうところの女子青年團にあつては、處女破棄者としての男性憎悪に就いては考慮の外に置いてもよいかも知れない。

『事變下の祖國日本を憂ふるの餘り』彼の女達の意識は素晴らしい旗幟を大書した。誠に好適のラショナリゼーションである。抑壓のスプリングは直ちに吹き飛んでしまつた。バリカンの——一種の鋏である事に注意されたい——鐵の感觸に彼女達の手のひらは脂をにじませて、快よい昂奮の下に、ジョキ〳〵と彼氏等の黒髪は刈り切られた。即ち象徴的に去勢をなし遂げたのである。その時彼の女等のペニスナイドが勝利感を滿喫してエスの奥底に赤く笑つてゐた事言ふまでもないのである。

扨一方投稿者小山田氏は、察するに典型的なマゾヒストであらう。一節を引用して見ると、「ところがだん〳〵バリカンで刈られて行くうちに、何か熱いものが胸にこみあげてくる。悲憤ではない、よろこびだ。感謝だ。嚴肅な氣持ち、私は彼女等に心から有難うと禮をいはずにはゐられなくなつた。（中略）優しく強きこの彼女等の美しき心と美しき行動に私は今心から感謝する。本來の母を強く感じたのだ。街頭に立つて熱叫する女性よりも、農村にあるこれ等の女性の方が

どの位女性としての美しさがあるか分らない強さがあるか分らない。私はクリ／＼あたまに手をやつて日本の將來は大丈夫だと祝福せずにはをられない。」

坊主にされて――去勢されて――悦に入つてゐるところ、分析眼を持つものにとつては實にタアイもないマゾヒスムスの言はせる囈語であるに過ぎない。

ほんとうの處、ペニスナイドの強いサド孃達の聯合バリカン艦隊が、絶好の機を發見し、それに乘じて暴擧を敢てしたのでマゾ氏らが隨喜の甘涙にむせんだのであつた。

分析の照魔鏡の特殊光線の力に依つて、鋏を持つてペニス切除に眼を光らしてゐる九尾の狐の姿が、朦朧として、いやハツキリ觀取されたのである。（昭一四、五、七二稿）

時評

ユダヤ禍論と黄禍論

大槻憲二

ユダヤ禍論なるものが現今わが國の言論界の一部分に流行してゐるやうであるが、その心理機制には多少病的なものがないであらうか。吾人ともに反省して見なければならない。嘗てドイツのカイゼル、ヴィルヘルム二世は黄禍論なるものを唱へて、我等日本人はいさゝか不快な感情を味つたことを記憶してゐるが、その時のことを想起して見ることも反省の一助とならうと思ふ。

一體、ユダヤ禍だとか黄禍だとかを大聲に唱へる人々は、禍とせられる民族に對して恐怖と輕侮とを同時に持つてゐるのだと云へる。輕侮なしに本當にその民族を全的に恐怖してゐる場合には、その民族の禍は大聲叱呼せられない。禍を大聲叱呼せられる民族は、何か優秀な性質を具へてはゐるが、現在その現實的な力(武力や政治力が)殆ど恐るゝに足りない場合に限られるのである。現在のユダヤ人がそれで、彼等は學才と經濟力とに於いて優れてゐるが、政治力や武力は皆無である。日清戰爭後に於ける日本がやはりそれで、當時の日本は始めてその實力を世界に認められたとは云へ、三國干渉で容易にペシャンコになる程度の實力であつた。丁度それ位のものがその禍を大聲叱呼せられるに適してゐるのだ。あんまり實力の無いものを禍だなどゝ云つたとて誰も本氣に聞いてはくれないし、

ABHUB

アプフウプ

他の學問がアプフウプ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

關西紀行

大槻憲二

神戸と母校一中

私は淡路で生れ、神戸で育ち、第一神戸中學校は私の母校である。昨年灘區上野觀音山に堂々たる新築成つて移轉したことは校友會誌によつて承知してゐたが、本年四月中旬、圖らずもその母校から新校舍の講堂開きに私に歸郷して講演せよとの依囑である。中學校で精神分析の話をすると云ふことは苦手であるが、折角の光榮を謝するも遺憾と、とにか

さりとて本當に恐ろしい奴を禍だなどゝ云ひ出したら、本當の禍が己れにふりかゝつて來る。禍だなどゝ云はれても默つて引込んでゐる程度のものが憎惡をふり向けるに丁度適當してゐるので、他民族の事を禍だなどゝ云ふ人達の臆病根性はさう云ふところに露出してゐるのである。

惡聲を放たれて、實際に恐れられてゐるのはユダヤ人や日本人ではなく、實はそれに似てそれよりも恐ろしい實力を具へてゐる別の民族のことであらう。獨伊のユダヤ禍論でも防共でも、實際に於いては防英であり攻英であることくらゐは誰の目にも明かなことだ。防英、攻英と明々白々に云へないのは、無論一つには英國が恐ろしいためでもあるが、他にはそれでは名目が立たないからだ。人間は個人でも團體でも超自我の裁可を得なければ何も出來ないし、よしんば行つたとしても失敗するにきまつてゐるのだ。それほど人間は道德的な生物である。臆病者のくせに半面に於いては、善い意味でも惡い意味でも道德的なのだ。ドイツのユダヤ人排撃にはもつと別の要素があるだらう。事實上、ドイツ人はユダヤ人に庇を借して母屋をとられた形になつてしまつたのだから。大戰後のドイツ經濟界も學藝界も完全にユダヤ人の壟斷するところとなつてしまつたのだから、ドイツは事實上滅亡したにも等しかつた。經濟界と學藝界はユダヤ人は亡ぼされ、政治的、武力的には英國に滅ぼされた形になつてゐたのだ。で、まづ、政治的、武力的に復活する前に、學藝的に、經濟的に立直らなければならなかつたので、それでまづユダヤ人排撃と云ふ比較的弱い者からいぢめてかゝることになつたのだ。

では、カイゼルの黃禍論に於いて實際に恐れられてゐたのは日本民族でなくて何民族であつたかと云ふ質問が提出せられるかも知れない。それは前のユダヤ禍論の場合とは一寸違つた心理的機制に基いてゐるのであつて、私の觀るところで

廣井重一君

く引受けて五月五日、宛も端午節句の夜、東京驛を發つて、翌六日正午頃久しぶりに神戶に着いた。驛頭には舊知、元六十五銀行總支配人原田要氏（私が幼時から兄事して來た人）と同窓井上彌次郎君（元町三越前の大油店主）とが迎へに來てゐてくれた。

原田氏宅に世話になり、入浴して旅の疲れを洗ひ、會下山に祖先の墓を展して平素の無沙汰を心より謝し、夕方觀音山に何處の大學かと思はれるやうな白堊の大殿堂を訪れて、現校長池田多助氏の苦心の成果に感激し、その大講堂で先輩、友人、後輩の前で『社會への再誕生』と題して一夕の講演を試みた。

その翌日は私の久しぶりの歸郷と云ふので同窓舊友等が、料理店「三つ輪」に集つてくれて神戶牛鍋をつゝき合ひつゝ舊交を溫めて甚だ嬉しかつた。二十八年前紅顏の美（？）青年として互に別れた舊友が、今や五十歲に近い初老人として次々に會場に姿を顯はす。それを見る私の歡びと驚きと可笑しさとを想像し給へ。

は、その恐れられてゐた民族と云ふのは、實はドイツ民族それ自身に外ならなかつたであらうと思ふのだ。即ち、カイゼルは當時隆々たるドイツの國運に思ひ上つて歐州統一を夢見てゐたことは萬人周知の通りである。併しその野望を果すためには、自國民族が他の歐州諸民族から恐怖の對象となつては仕事がやりにくゝなるので、それ故に、恐ろしい奴はあちらにゐるのだ、白人種は須らく結束せよと云つて東洋の一角を指し、黄色人種の方に歐州の注意が向いてゐる間に、こつそりと仕事をしようとしたものに外ならないであらうと私は解釋してゐる。丁度手品師が右手でトリックを行ふうとする時には、左手を高く擧げて觀衆の注意をその方に惹いておくのと同じ手法である。

さてそれでは、只今世界中に流行してゐるらしいそのユダヤ禍論の内容はどんなものかと云ふと、私も實はよく知らないのだが、在る人の紹介を受賣りすると、ユダヤ人は三S政策に依つて世界の他民族を破滅に陥れようとしてゐると云ふ如きがそれであるらしい。三S政策とはセクス（性）、スクリーン（映畫）、スポーツ（競技）の魅力を利用することに依つて人類を破滅に導かうとするものだと云ふのである。成程、さう云はれると、人々はこれ等三つのものに非常に魅力を感じてゐるやうである。さうしてこれ等の魅力の前には人々は已れの破滅をさへ氣付かぬかに見えるやうな場合とてないことはない。頃日私は某大映畫劇場を訪れ、あの尨然たる大劇場の中に幾千の男女が、非常時下だと云ふに、呑氣さうに、大して内容のない映畫を見て痴呆的な洪笑や享樂に耽つてゐる有樣を見ては、私は實は或る恐ろしい深淵を覗かせられたやうな氣がした。スポーツ、これも例へばあの早慶野球戰の如き、あのやうに何ら實際的意義のないものに、全國の同胞が血道を上げてゐることは、考へて見れば、何と云ふ莫大な心理エネルギーの浪費

九日には早朝大阪に至つて舊友廣井重一君を東區備後町に訪れた。同君は數年前、東京在勤中は貧弱な小會社の一介のサラリマンに過ぎなかつたが、今や大阪目拔の場所に辯理士として堂々三層樓の事務所を構へ、數名の使傭人を叱咤して勢當るべからざるものがある。君の今日あるは偏に分析學のお蔭であるとして、私にまでも感謝の誠を盡されるのである。言葉に甘へて私は同君宅に二夜宿めて貰ひ、初めてお目にかゝる珠子夫人にも一方ならぬお世話に與つた。

君は大阪在住の特別誌友を集めて會合の機會を作つてくれたり、私を京都に連れ出して嵐山、淸瀧、龍安寺、金閣寺、祇園、淸水、新京極などを隈なく案内して下さつたりした。

特別誌友との會見は九日夜、廣井家の二階の應接室に於いて行はれた。來會者は既に久しく手紙の交換をして來た人々のみで、何となく始めての會見とは思はれない感じがした。即ち平田惠一、澤田月水、二宮多郎、島岡政雄の諸君であつた。内、平田君には以前から面識があつた。如何にも分析者仲間の會

であらうか。併しそれが、何と云ふても、筆舌に盡せぬ魅力であり、スリルであることだけは確實のやうである。

併しそれ故にそれがユダヤ人の魔術の棒の先から神秘的に繰出されるワナだと考へるとは、おゝ何と云ふ馬鹿げたパラノイア的妄想であらう。況んや性の魅力をまでもユダヤ人のせいにするとは！　我々日本人の内にはユダヤ人の顏さへ見なかつた頃から、性のためには身を亡ぼした者とて決して少くはなかつた筈だ。由來、西洋人の間には、ユダヤ人をそのやうな神秘的な魔法使ひのやうに妄想することが、彼等の歴史の中に傳統久しく植付けられてゐるらしく思はれるのだ。

卽ち西洋の傳說や童話に於いて、東方の智者とか魔法使とか云ふのは、どうやらユダヤのことであるらしいのだ。現に例へば、エーヴェルスの『プラーグの大學生』などに就いて見ても、主人公を金と色とに迷はせて破滅させるものは魔法使ひの金持とせられ、それはどうやらユダヤ人らしい風貌を具へたものとして描寫せられてゐる。

土臺人類には死の本能があり、自己破滅の衝動があることは、例へば本誌本號に岩倉氏の紹介しておられるセガンチイニの分析研究を見ても分る通りだしするから、死の衝動の顯現ならば何時何處の民族、個人の內にだつて認められないことはない。それを一二民族の計畫的策謀に基くなどゝ考へるとは、あゝ何と云ふ馬鹿げた病的心理であらう。併しさう云ふ風に考へておくことは、內なるものを外に「投出」することで、人類の愉快なる自己欺瞞であることは固より申すまでもない。

現今わが國の一部に流行してゐるユダヤ禍論が如何なる根據に基いてゐるか、私は知らないし、また別に立入つて知りたいと云ふ情熱もない。ユダヤの資本が

合らしく初對面ながらも十年の知己の如く、互に心底を打ちあけての物語りに夜の更けるのを忘れ、十二時の時計の聲に驚いて一同は立上つた程であつた。

多田不二君

九日午前十時二十分から私は大阪中央放送局で放送をした。話の內容は別項所載の通りであるからこゝには贅せぬ。歸神を機會として放送することになつたのは講演課長多田不二君の斡旋による。同君とは十年來の交友であるが、君が東京放送局在勤中は自分は屢々放送のために愛宕山に出掛けたに拘らず、一度も君は應接室に姿を見せなかつたが、遙々大阪まで來て久しぶりの會見の故か放送の前後にゆつくりと君はその溫容を現はしてくれた。廣井重一君も局の自動車に同乘してこゝに來り四階(?)の明るい應接室で近く大阪城と大阪府廳とを顧望しつゝ、三人で語り合つた小半時は忘れられぬ愉快な印象を殘した。大阪城滅亡の頃はこのあたりは關東方軍勢の戰塵に煙つたことであらうと思ふと戰國武將の心理分析に特別興味を有する私としては、

相當日本に侵入してゐると云ふやうなことを眞事しやかに說き立てる向きもあるやうだが、肝心の政府がユダヤの資本でも何でも北支その他に歡迎すると聲明してゐたやうだから、經濟界に於けるかう云ふ恐怖症は一二民間の神經病者の妄想に基くものではないかと想像してゐる。次には何と云つても獨伊のユダヤ人排斥の尻馬に乘つて、日本人らしい單純さと島國根性的排他心とを發揮しようとしてゐるものであらうと察せられる。現に、近頃、ユダヤ禍論を賣物にしてゐる某々の書物などは、その廣告文に、日本に來てゐる外國人の大部分はユダヤ人だなどゝ威赫してゐた。無責任な廣告文などに一々神經を立てる人もあるまいが、かう云ふ物の云ひ方をする人々が如何に外國人一般を野蠻人的に毛嫌ひ、排斥しようとし、丁度、幕末當時の攘夷黨のそれに似通つた傳統的島國根性を發揮しつゝあるものであるかを察するに足る。

併し政治家や政治的興味の濃厚な人々が政策的な意圖から何々禍を高唱するのはまだ罪が淺い。どうせ彼等はポリシイとして朝三暮四の政見を臨機應變させて行くのが仕事だからだ。たゞ學者たるものがさう云ふ政治家の政策的高唱の尻馬に乘つて、何々禍などゝ云ひ出すのは誠に愚かしいことの極みではないか。例へば、最近某と云ふ怪しげなる國粹主義的心理學者が、例の心理學突風事件に際し東京朝日紙上で論敵ゲシタルト心理派の人々を、ユダヤ禍の惡名で葬り去らうとした白晝の隱謀事件は學者の風上に置けない卑怯な態度であると申さねばならない。私は必ずしもユダヤの學問を無條件に尊重するものではないけれども、如何なる民族の文化的業績にもせよ、それが優秀であり、價値ありと認め得るに拘らず、民族的偏見によつてその優秀性と價値との前に盲目になることは恥づべきことであり、大國民の態度ではなく、また個人の尊嚴を自ら傷けるものでさへある

拙著『新しき立身道』をよまれた方々は御承知の如く、感慨無量なるものがあつた。

放送後、廣井君に案內せられて大阪城に登つて太閤の盛時を偲び、續いて京都に遊んで既に述べた通り諸寺諸名勝を巡覽したが、殊に龍安寺虎兒渡の庭を始めて見たことは（これに就いては拙著『讀本』の中に詳しい分析解釋があるので覺えてゐて下さる方もあらうと思ふが）何よりの收獲であつたが、今はそれ等に就いて感想を後日に讓つて割愛しておく。

種田虎雄氏

十日正午には大阪と奈良、伊勢、名古屋方面を聯絡する電氣軌道の大私鐵會社「大軌」の社長種田虎雄氏を天王寺區上六の本社樓上に訪ふた。同氏は私が大學卒業直後數年間鐵道省に飜譯係として勤務してゐた當時の上役であつた。氏は當時十河信二氏と並稱せられて省內切つての敏腕家であつたが、今や大軌の社長として同社今日の隆昌を來たさしめられたるは偶然でない。私は仕官中にも種々氏の知遇に感激した事であつたが、役所を辭し

と信じてゐるのである。

ユダヤ人が學藝に天才を有することは何としても否定すべからざるところであらう。これは單に私の一家言ではなく、世界萬民の等しく承認してゐるところである。何人が今日アインシタインの物理學上の功績を、フロイドが心理學上の功績を（必ずしも全的にとは云はぬが、部分的にもせよ）承認しないで居られよう。マルクシズムはそれがわが國に華やかな流行を極めてゐた時代には、私はそれの强剛な反對者であつて、自分の利害を撥無して嚴正な批判を下して斷呼退かなかつたつもりである。それでも私はその當時とてマルクスの學才と或る意味に於ける實際的功績を認めてゐないわけではなかつたし、今もその通りである。その當時の論文の主なものは集めて拙著『現代日本の社會分析』に載せてあるから、興味ある人々は念のために披見して頂きたい。ユダヤ禍と云ふやうな偏見的、感情的根據によつて學説を受容れたり排斥したりすることは、私の最も恥辱とするところであり、かゝる態度こそ日本人の面よごしであると信じてゐる。日本主義の名の下に日本精神を冒瀆するものであると信じてゐる。「廣く知識を世界に求」むるの機會を自分から棄權することは、又もやわが國を精神上の鎖國主義に陷れるものである。由來わが國は諸外國の文化の長をとり短を捨てゝ今日の大をなしたので、その受容力と消化力の强健を誇つてゐるものではないか。

ユダヤ禍々々々と不安症的囈語を口にする人々は、同じユダヤ人でもフロイドはマルクスを嚴正に批判してその缺陷を突いて民族的同情感を超越してゐるし、またユダヤ的なるキリスト教に對してもその文明史的眞義の今日に於ける喪失をその『宗教の未來』の中で痛論してゐることを如何に解釋せんとするのであるか。

て後も十數年來、氏に特別の恩顧を被り、わが今日あるは偏に同氏のお蔭であると信じてゐる。

氏は社員谷口光郎君を私に紹介し、沿線を思ふ存分視察して何かの所感を聞かせてくれとの親切な招待を賜つた。谷口君は私と同じく神戸一中の出身、私の遙かな後輩であるが東京帝大經濟學部卒業の有望な青年である。

唐招提寺と藥師寺

私は時間と興味との振合ひからまづ唐招提寺、藥師寺の二大伽藍を訪ふべきことを懇請して谷口君の足勞を煩すことにした。

この兩寺には實は私は過去既に二度參詣し今度は三度目であるが、唐招提寺の金堂と藥

これフロイドが學者として、單なる民族的政策のために言説を吐くのではなく、人類の幸福のために學問のために、公平なる立場から眞理を唱へる使徒的情熱と誠實とを有するからではないか。利己的、妄想症的の小人物輩は須く慚死すべきである。

分析學から見た映畫『早春』

十二年前に夫を失つた寡婦ジェニファーは遺された借財と愛兒とのために衣裳デザイナーとして雄々しく働いて一應の成功を收めた今日、英國への旅行中圖らずも中年の貴族コルベツト卿の愛情を得る。この母の戀愛と再婚とが思春期の娘たちに如何なる影響を及ぼしたか、この問題に對する答へが『早春』の語らうとする中心である。この映畫は元來舞臺劇『少女イレーネ』"Das Maedchen Irene" であつたものをエフア・ライドマンが脚色し、ラインホールド・シュンツェルが監督したものである。製作はドイツのウファであるが、全篇精神分析學的觀察方法を隈なく行亙らせたもので、ドイツは如何にフロイドを追放し得ても分析學を追放することは出來ないものである事を發見し、私はいさゝか痛快を覺えた次第であつた。以下はわが國に於ける提供會社東和商事映畫部の依囑に應じ、この映畫の分析學的內容を解説したものであるが、こゝに轉載してこれを觀られる讀者諸賢の參考に供することにした。

父親が死んで、それが理想的な異性愛の空想上の對象となり、寡婦としての母親との間に純潔な同性愛的なものを築き上げてゐる事は思春前期の少女にとつて

師寺の東塔とは私にとつては幼馴染の愛人の如くなつかしいのである。（讀者よ、分析して下さい！）

唐招提寺では講堂にある增長天、持國天が足下に鬼の踏まへてゐる、その鬼の眼に金と水晶とがちりばめてあつて、今なほ生けるが如く爛々と輝いてゐるのに、上の天王の眼は着彩はげ木質朽ちて精彩のなくなつてゐるのは分析的に見て非常に意味のあることに思へた。如何なる意味か。それは何れゆつくりと論じて見たい。

藥師寺では本堂內の（かのフェノロサの賞讚以來）世界的に有名な本尊藥師如來三尊の金銅佛を久しぶりにしみ〴〵と打眺め、また私の愛人「東塔」をも惚々と眺め、遂に谷口君に賴んで寫眞までとつて貰つた。この塔の特殊な形態に就いての分析的意義に就いては拙者『讀本』の中に詳しく說いてあるから興味ある方々は讀み直して見て下さい。

女人高野室生山

古の奈良の五條に當る唐招提寺、藥師寺のあたりから急に奈良縣でも伊賀に近い室生の

は無上の淨福である。イレーネは正にこの天國に悠遊して完全に幸福であつた。

異性愛は思春前期の男女（殊に少女）にとつては憧憬すべきものであると共に畏怖すべきものでもある。ところが母親は亡き父親を理想的な男性として娘たちに觀念せしめてゐた。それは娘たちの愛情を同性愛的なものに醇化せしめて自分の方へ引きつけておくための一つの手段でゞもあつたであらう。そこでイレーネにとつては異性愛は觀念上の父親だけで十分であつた。現實上にそれを求めることは危險でもあり恐怖でもあつたらう。それ故に羊飼ひのフイリップがいくら異性愛を求めても、イレーネにとつては馬耳東風であつた。

このやうにイレーネの愛情心理は完全なバランスを得て非常に幸福であつたのに、突如として母親の再婚問題によつてそのバランスと幸福とは破られることになつた。彼女は悲しみ憤り狂亂した。これは無理もない、彼女と母親との間の愛情は神としての亡父の俤を中心としてのモラルにまで宗教にまで、高められてゐたからだ。彼女の憤りには道德の裏付けがあつたのだ。彼女が復讐のために決然として亡父の遺したピストルをとつて教會堂に駈けつけたことは偶然ではなかつた。彼女は神なる父の意志を行使する使徒としての情熱に燃えてゐたのだ。ところが、婚禮のために母と並んで教會堂の入口に立ち車上から毅然としてイレーネを睥睨したコルベット卿の男性的示威力の前に彼女の決意は挫けてしまつた。今まで單に空想してゐた父親の俤をコルベット卿に於いて現實的に發見し、空想の父の名に於いて現實の父を撃つことの矛盾の前に彼女の良心はひるんだのであつたかも知れない。

方に移つた。

初夏の室生山は鬱氣なほ冷かであつた。室生口大野で電車を降り、直ちに自動車で谷口君と同車して卄分にして寺の入口、太鼓橋前に達する。今まで西の京の唐招提寺や藥師寺などの奈良朝期の寺院を歷訪して來た我々として、この弘仁期の寺院の前に立つたので、忽ち時代が急轉したことを感じた。奈良朝期の伽藍は平地に廻廊をめぐらして建つてゐて全般の風格が單純豪壯であるが、弘仁期の寺院は山腹に據り、各建造物はアチコチに漸次に山奧深く散在してゐて、全般の風格は纎細微妙で、小じんまりしてゐながら幽深で、奈良から弘仁へ佛教思想の變遷の具合が建物の有様に象徵せられてあることをまざ〳〵と感ぜしめられる。

山奧深く秘められてある女人高野の室生寺は坊さんたちも如何にも俗塵に染まず、我等參拜者に應待する態度も誠に純眞で氣永でなつかしい。此方もゆつくり氣を落着けて無數の國寶を次から次へと拜觀して行く。金堂に鎭座まします本尊如意輪觀世音菩薩は有名な國寶で、これまでも屢々寫眞でお目にかゝつ

何れにせよ、彼女の精神生活は今はあらゆる意味でそのバランスを失つてしまつたのだ。バランスを失つた精神は生きるに堪へない。彼女は朝靄なほ消えやらぬとある沼のほとりに立つて引き入れられるやうに深み〳〵と沈んで行つた。

イレーネの失踪に色を失つて追跡して來たのは妹のババと愛人のフィリップとであつた。ババが母親の愛情を繞つて姉イレーネとの間の競爭は、この心理映畫に於いて、重要な副的主題を構成してゐる。母親ジェニファーの愛情はどうやらイレーネの方により多く注がれてゐるらしい。ジェニファーがロンドンから歸つて來て、出迎へに來た姉妹と門の前で久濶を叙する母娘相愛の場面がある。その時母親は姉娘を抱いたり接吻したりして非常な熱情を示すが、ババの方にはたゞあつさり握手するのみであつた。ババは愛情の競爭に於いて姉に敗北してゐることを自覺してゐるらしい。それは母の愛情を繞つてばかりでなく、フィリップの愛情に就いてもである。姉妹がフィリップの愛情を大きく問題にしてゐるとは考へられないが、フィリップのイレーネに對する讃美の詩をイレーネが無邪氣に朗讀する時、ババは之を傍から茶化したり二人の方に故意に倒れかゝつたりする動作の中には無邪氣な嫉妬の表現がないとは云へない。

母の愛情を繞つての嫉妬は相當露骨に描き出されてゐる。その頂點をなすのは母の再婚が確實と分つた夜、姉妹床を並べて眠りに就きつゝ、ババは又しても母の再婚とその成行を問題にし、故意に意地悪く姉の急所に觸れて行く。その急所の中で最も痛い急所は、母に胤違ひの子供が出來るであらうかと云ふことであつた。イレーネはその急所に觸れられては、もう我慢がならなかつた。狂氣のやうに立上つて妹を押へつけ、その怒聲と悲鳴とに祖母さんは驅けつけて、ババを自分の寢室に連れて行くといふ騒ぎが起つた。

てゐた佛樣、今初めて尊容に接して感慨無量であるが、暗い厨子の中に這入つてゐられて下半身しかシカとは拜せられない。その下半身は右脚を折つて立て、左脚は折つて横たへ左脚の足の裏を右脚の足の裏が踏まへてゐる形である。誠に佛樣としてはお行儀の悪いことで『玄冶店』のお富の立膝だとてまさかこれほど無作法ではあるまい。併しこれには所以因縁のあることで、私は立てた右脚は陽を表し、横たへた左脚は陰を表し、一體以て陰陽を彷彿するものであると解してゐるのである。如何にしてさう云ふ假定が下せるかと云

恰度その翌朝にイレーネの失踪事件が起つたので、ババとしては自分が姉にいやがらせを云つた爲に姉が怒つて家出をしたのだと解釋したらしいのだ。實際ババとしても母の愛情を繞つての悩みに於いてはイレーネと同じ立場にあるので、その點では十分に姉に同一化してゐるのであつたが、たゞ姉の方が母の愛をより多く壟斷してゐるのでその點では姉に反感を持ち、今や母の愛がコルベット卿に移つて姉の苦悶してゐるのを見ることは痛快でもあり面白くもあつたので、ざま見ろと云ふ氣持から姉の最もいやがる急所に復讐的に觸れて行つたのであつた。

併しフィリップとの協力によつて今や姉は沼の中から小舟の上に救ひ上げられた。救ひ上げた瞬間に姉に對する謝罪の念は湧然としてババの胸中に泛び上つて來て、よゝとばかり姉妹互に抱き合つて泣き叫び慰め合ふのであつた。フィリップは岡の上に立つて全身の濡れを絞りつゝ妹ババを顧みて冗談らしく云ふのであつた。「人命救助の褒美は二人で山分けはいやだよ」と云ふ意味のことを……。これは彼の無意識では「イレーネの愛情はこれからは全部自分のものだよ」と云ふことに外ならないのだ。

イレーネが水中から舟の上に救ひ上げられた瞬間に朝靄は晴れて快い朝日は木の間を洩れて彼女の上に照り映えるのであつた。それは彼女の精神生活の上に幼兒期の靄（母への同性愛）が晴れて、今や新たに靑春の朝光（フィリップへの異性愛？）が輝き出たことを恐らくは象徴的に表現する技法かと思はれるが、この一篇の物語に現れてゐる事件が正に主人公の十六歳の誕生日に於いて起つたといふことは原作者が決して偶然にとつた契機ではなかつたと思ふ。何となれば、その日は實に彼女が少女期から處女期へと大きな生みの苦しみの後に、新に精神的に誕生した記念すべき重大な日であつたからだ。

ふ質問が眞面目な讀者から出ることであらうと思ふが、その理由を說明し出すと話が固くなるから只今は御容赦願ひたい。

金堂を辭し更に奥山の方に登ろうとして石燈を仰ぐと、かの有名な弘法一夜作りの五重塔が見えた。塔はこのやうに石段の下から高く振仰ぐところに特別の趣きのあることを今初めて知つた。如何にも纎細微妙で幽深で、女性的な室生全山の格調は凝つてこの塔に代表せられてゐると云ふも過言ではい。これから更に奥の院までは十餘町を登攀しなければならない。四邊の眺めは格別に美しい。

寺には宿坊があるから、夏期にはこゝに宿泊して勉强したり、避暑したりするもよろしからうと思ふ。さうして朝夕この奥の院へ散策することは如何に快いことであらうかなどゝ想像しつゝ寺を辭した。

寺僧は親切に茶など薦めて下さつたが、電車の時刻にせかれて、已むなく折角の好意を拒けて忙しくまた自動車に打乘つた。

赤目四十八瀧

その夜は名張町の名張館に一泊して、翌早

新刊紹介

▼『時事漫畫漫文研究』高部義信著――著者は人も知る如く研究社『英語研究』の主筆であつて、時事英語に日常親炙してゐる間に、諸外國の漫畫漫文に接する機會多く、その間から興味あるものを拔粹編輯したのが、本書を成したわけである。分析者は元來ユウモアを愛し漫畫を好むものであつて、本誌上でも殆ど毎號漫畫の一つ二つが分析的見地から鋭く深く鑑賞せられてゐない場合が少いくらゐである。それ故本誌讀者もこの書に多大の興味を寄せられることであらう。たゞこの書は表題にある通り「時事」が主になつてゐるので、意識的な諷刺が多く、分析者が期待するやうな心理的な興味の深いものは少いが、それでもなかなか愉快なものも相當數に上つてゐる。その一二を拾つて見ると、次のやうなのがある。添へてある文句には「ヂーヴズを運動させちまつたら直ぐ歸つて來るよ」とある。「ヂーヴズとは此の生意氣なワン公を今運動のために散歩させてゐる愛犬家の旦那のことだ。ワン公は路で會つた愛人にかう云つて颯爽と主人を運動につれて行く氣持」と著者は附註してゐる。犬の主觀としては或は全くかう云ふ風であるかも知れない。ないとはどうして斷言出來よう。また乳呑兒を乳母車に載せて路上を押して歩いてゐる夫人が或る紳士に向つて、「この兒はまだ物が云へませんのよ――でも寢言ではよく喋舌りますの」と云つてゐる。赤ん坊の意識の言葉は未成であつても無意識の言葉は完成してゐるかも知れない。いさゝか分析的な考へ方のやうでもある。

その他政治上の諷刺漫畫を見てゐると、國際關係が表向きで分らないやうなところまで理解せられて來て、頗る有益でもある。（研究社發行、金七十錢）

朝、また自動車を驅つて赤目四十八瀧の勝を探ることになつた。赤名の瀧は、前日大阪中央放送局で講演課長多田不二君に會つた時、極力推奬されたので大いに期待して來たが、期待は確かに外れなかつた。

赤目連山の頂きから延壽院の麓に流れ落ちて來る水が、山骨の岩を洗つてところ〲に幾十の白布を掛けたものが所謂赤目四十八瀧であつて、必ずしも四十八の數には文字通りの信を置く可き筋合でもないが、とにかく大小極めて多數の飛瀑が懸崖を滑り下つて、一環又一環、あたかも鎖の輪の如き狀を呈してゐる。不動瀑を眺めてその背後に廻り登ればそこには千手瀧あり、更にその上にのぼればまた別の瀧ありと云ふ風である。その間溪流には岩魚の類が群居し、また姿は見えないが河鹿の可憐な聲が流れの音にまぢつて聞えて來ると云ふ有樣である。

赤目四十八瀧は何れもあまり大きな瀧ではないが、何れも小ぢんまりしてゐて、如何にも形がよくまとまり、それ〲に一つの別世界を構成してゐるのが、まるで人工のやうである。併し人工のやうにまとまつて見えて而

もやはり自然の作として巧まざるところがあるので一層の魅力がある。瀧は私の見た時には水量はあまり豐富でなかつたが、あとで麓の旅館對泉閣で小憩した時、座敷に掲げてあつた寫眞を見ると、それ等の寫眞は何れも水量の極めて豐富な時に寫してある。併し私は水量があまり豐富でない方がこゝの瀧の趣きを表すに適してゐるやうに思ふ。あまり水量が多すぎると瀧は何れも只白一色に塗りつぶされて曲がない。水量があまり多過ぎない時には、瀧の水が背後の岩を仄かに見せて岩と水との關係が非常に面白く眺められる。殊にその點に於いて面白いのは不動の瀧である。不動明王の姿が、その岩の一つの上に幻のやうに浮び上つて來るやうな感じがするのである。

こゝの瀧の今一つの特色は、何れも岩壁が屛風のやうに四邊を取圍み、如何にもこんもりとまとまつた一つの世界を形作つてゐて、散漫な感じのしないことである。瀧はその中心に、奧底に、如何にも寺院の本尊が厨子の中に納つてゐるかの風に、落着いて位置し、それを眺める我等は如何にも拜殿の前に佇んで社殿の本尊を仰ぐと云ふ感じである。瀧壺の碧潭は何れも極めて深いと云はれてゐるがその暗緑色の神秘な色を見ると如何にも左樣に察せられる。眞夏には筏を泛べて瀧に水近付き、これを鑑賞しまた飛沫に浴することも出來ると云ふが、私の行つた時にはまだそれほどの野心を起させるほどの暑さには達してゐなかつた。

麓の延壽院に立寄つて朱印を貰つたが、こゝの寺院の建物は貧弱である。建物は立派であるには及ばないであらう。何となれば、事實上、こゝの本尊は建物の外に並列して御座る。四十八體の瀧不動、瀧千手であるからだ。

内宮と外宮

再び名張に戻り、電車によつて宇治山田に向ふ。外宮に參拜したのは午後二時頃であつたらうか。私はこの年齢になるまで、まだ伊勢詣りをしたことはなかつたのだ。この機會を惠まれたことを深く感謝した。内宮と外宮とを比較すると内宮の方が遙に立派である。外宮の方が古くて、内宮の祭神天照大御神さへも外宮の祭神、豐受大御神を尊崇せられたと傳へられてゐるのに不思議の事のやうでもあるが、實は不思議でないのだらう。その千木の尖端の切り方に各々特色があるのだと云ふことを同行のT君が説明して下さる。また勝男木の數も、内宮の方は十本、外宮の方は九本、千本の尖端の切方、内宮の方は水平に切り、外宮の方は垂直に切つてある。これは各々重要な意味があつて偶然の事ではない。内宮は女神でゐらせられるが故に水平の線をもつてこれを表し、外宮は男神にわたらせられるが故に垂直線をもつてこれを寓したのであらう。勝男木の數の奇數偶數も同じ意味を有すると思はれる。水平と垂直とが陰陽を意味することは、さきに室生寺の本尊の兩脚の具合に就いて述べた條を想起して頂けるならば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

五十鈴川の清冽な川水に鯉や鮎の群居してゐる有樣は、我々には實に珍しく嬉しい眺めであつた。また折柄の事變のためか、小學生や一般の參拜者の極めて賑やかであつて、神威の永久畏さには「涙滾るゝ」思ひがした。

二見ケ浦と天然の大鳥居

参宮を了へて直ちに二見に詣る。子供の時分から如何に屢々、寫眞に繪畫に眺めて來た二ケ見浦の夫婦岩、今目前に見て却つて感情の硬直して動かぬのを不思議に思つた。「疑ふな潮の花も浦の春」と云ふ芭蕉の有名な文句はこゝで詠ぜられたものと傳へられてゐるがこの句の眞の意味に就いては私は近頃某誌上で細かく分析鑑賞しておいたからこゝには繰返し度くないが、併し私の詣でた時は初夏眞晝の太陽は赫々と四邊を照らし、波は靜かで「潮の花」も白く砕けて咲くに由なく、誠に現實的な風景であつた。けれども、この兩岩の中間から眞赤な太陽が元氣よく昇天し、その光りは夫婦岩の中間を貫いて岸近く見事に開かれてある、俗稱「天岩戸」の洞窟の中に差込む有様は、想像するだに我等には微笑ましい光景であらう。嚴島神社の海中の大鳥居も東面して、太陽はその中より昇天して陽光社殿を射する仕組みになつてゐるようであるが、二見ケ浦の夫婦岩は、云はゞ天然の大鳥居であらう。伊勢灣の眞晝の海はあまりに靜かで、小波の音さへも聞こえなかつた。

鳥羽は二見の浦と小灣を隔てゝ隣りしてゐる。かつて一休和尚は「鳥羽は何處？」と尋ねられたに對して、さつと扇を打開いてその方向に動かしたと傳へられてゐるが、扇の字を分解すれば戸と羽になるから扇を以て鳥羽を暗示したものであらうが、なかなかの才僧である。併し鳥羽と鳥の羽とは何の關係があるのか分らない。恐らくは伊勢灣の戸端口にあるから「トバ」と呼ばれ、それが何時となしに鳥羽と云ふ字をあてられることになつたのであらうと思ふが、如何であらうか。識者の垂教を乞ふ。

鳥羽では海に臨んで眺望の絶佳な對神館と云ふに宿をとつた。宿は巖壁の上に建つてゐて、眼下に松の生えた小島を控へ、そのあたりには白衣の海女が都會からの遊覽客のために潜水してはアワビなど捕えてゐる様がよく見える。左手遙か彼方には谷志島が横はり、右手には坂手島、菅島が並び、その中間遙か沖合には三角形の神島がかすかに霞んで見える。形は金華山に一寸似てゐるが、それより遙かに小さく、頂きの二つに分れて見えるのは筑波山を聯想させる。この島が神島の名を得たのは三角形を有して頂きの陰陽に二分してゐることが重要な理由に相違ないと私は想像するが如何であらうか。天氣がよければ遊覽の小汽船に乘つて島々の間を經巡つて神島にも遊んで見たかつたのだが、旅中初めての雨に閉ぢ込められ、むせびなくやうに靜かな鳥羽灣を一羽の鳥が餌を求めてとび廻つてゐるのを默々として宿の緣側より打眺めてゐるのも却つて旅情を添えるものがあるやうに思はれた。そのやうなわけで鳥羽町の方へも出て見ず、日和山、樋の山の大觀をも味ふことなく、またの日を心に殘してあつけなく鳥羽の海邊を去り、松阪へと向つたのであつた。

本居宣長の鈴屋

松阪で下車した目的は本居宣長の鈴屋を訪ふにあつた。宣長は國學者としてよりも「敷島の大和心を人問はゞ……」の一句に依り歌人としてわが國民の間に極めてポピュラーになつてゐる人であるが、こゝに來ると本居神社に祀られて大變なものになつてゐることが分る。神社の前を小高いところに登つて行くと、鈴屋保存會の洋風建築の事務所があり、

その背後のところに鈴屋の遺跡は昔のまゝの姿で保存せられてある。建物は小さくて四間位しかない。風呂場は半坪位で極小さいが、臺所は二三坪位はあつたと思ふ。書齋は二階で四疊半、疊は卍形に敷いてあり、淺い床の間と押入れがあり、肘掛窓があつて、木製の小机が置いてある。小學校の教科書にある通りである。

この書齋の二階に通ずる階段の下半分が取外し自由になつてゐて、宣長が二階に上ると下から人々が上つて來て彼の仕事の邪魔をしないためであると傳へられてゐるが、それは逆で、彼自身が二階に上りきりになつて、下に關心を拂はないやうにしたかつたためでなかつたかと私は分析的に假定して見た。それは彼が非常にリビドー昇華的な人でありながら、半面に於いてとかくリビドーを生のまゝに用ゐたがる墮落願望的傾向があつて、その事を彼自身非常に苦にしてゐたがために、自已警告の必要から下に降りたい墮落したい願望を自己に斷念させるために象徴的に階段を取外させてしまつたのではなからうかと思ふのである。彼が如何に墮落願望があつたかは彼が相當に女中コムプレクスを持つてゐたらしいことで分る。これは無理やりにリビドーを昇華させる人々には誰にでも必然的にあることで、決して宣長一人に限られたことではないから、彼はそれを恥づるには及ばないし私たちはそのために彼を難じようとは毛頭思はないのだ。彼の女中コムプレクス的事實に就いては島崎藤村の『夜明け前』などにも側面から仄かに描寫してある。

杉田博士の少年寮

鈴屋を辭して又もや電車に乘り、谷口君とは中川驛で東西に別れた。案内の勞を厚く謝して大阪に歸る彼を見送り、自分はこゝに久しぶりに一人身になつて名古屋に向つた。

名古屋に降りた時は大變な降雨であつた。直ちに自動車を驅つて八事山下少年寮に杉田直樹博士を訪うた。少年審判所に赴れて不在であつたが程なく歸つて來られた。

直ちに寮長室に招ぜられ、やがて寮内を隈なく案内して頂いたが、建物は元精神病院であつたのを利用したもので今日ではこの體裁では病院としての許可は下りないとのこと、質素な寮ではあるが、小ぢんまりとして清潔で寮兒たちは如何にも樂しさうに嬉戯してゐる。博士は私を案内し、一々の兒童の頭を撫でつゝ「××ちやん、どうした?」と親しみ深く呼び、次に私に向つて病名を學名で傳へて下さる。寮兒等は如何にも慈父に對する如く「寮長さん、お歸りなさい」とペコンと丁寧にお辭儀をし、次に私に向つて「お客さんお出でなさい!」同樣に挨拶する。誠に可愛いらしいと共に、また博士の訓練と愛撫とがよく行屆いてゐるのに私はいたく感激した。

眼から鼻へぬけるやうな悧巧さうな杉田博士に、こんなに利害を超越した殆ど宗教家のやうな一面があるのかと思つて私はつくづく博士の顔を見返し、心からの敬意を拂ひつゝ寮を辭し、その夜、名古屋驛から東上の汽車に乘つた。久しぶりに東京に歸れると思ふと流石に急に歸心矢の如きものゝあるのを覺えた。思へば、短時日の割合に、内容豐富な旅であつた。その間私に好意を賜つた舊知新知一切の方々に、こゝに深く感謝の心を捧げる。

（完）

精神分析學入門講話（八）

ジグムント・フロイド（K・O・生譯）

して、先生の證明すべからざる解釋を放棄なさらないのですか。」と。

成程今度は大分手剛いですね。私はこの未知の司會者のことを想像して見よう。彼は多分祝宴の主賓の助手か私講師になつた前途有望な青年であらう。私は彼のところへ押掛けて行つて、貴君は上役に敬意を拂はなければならないことに何となく氣の進まないものを感じてゐなかつたかと尋ねる。すると首尾よく行くのである。彼はむつとして忽ち吐き出すやうに私に云ふ。「只今そんな質問はやめて貰ひたい。でないと僕は癪にさわる。そんな疑をかけられると、僕の將來はすつかり駄目になる。僕はたゞその直前に、既に auf- のつく語を二つも口にしてゐたので、つい anstossen の代りに aufstossen と云つたまでだ。それはつまりメリンガーが後響と名付けたもので、これ以上何も變な解釋など入れる餘地はないよ。分りましたかね？」ふむ、これは驚くべき反應だ。

さてこゝまで來ると諸君は離れて行つて了ふことであらうが、それは併しまた別の個所に於いて再び抵抗を取上げる結果になるに過ぎないであらう。諸君はかう考へるであらう。「なるほど精神分析の問題の解決を受分析者自身に語らせるのが、分析の技法であると云ふことはよく分つたが、ところで、我々はも一つの實例をとつて考へて見やう。卽ち、あの祝宴の司會者が上役の健康のための嘔吐を催すと口滑りした例である。この實例に於いては、障害する意圖は輕侮の意圖であり、その意圖あるがために尊敬の表現が妨げられるのだと先生は云はれる。併し、それはたゞ先生の立場からの解釋に過ぎないのであつて、その云ひ損ひの局外者の觀察に基いてゐるものである。この場合に、先生がもしその云ひ損ひの本人に尋ねて御覽になるならば、本人は輕侮の意圖などは毛頭なかつたと先生に確言することでせう。彼は恐らく、熱心に抗辯することでせう。何故に先生は、この自明の否認に對

誠に力強い拒否だ。私の見るところでは、この青年は何も注意する餘地はないのだが、併しまた彼は自分の行り損ひには何も意味がないと云ふことに強い個人的興味を持つてゐるのである。併し、貴方方は多分かう云ふ事に氣付かれるであらう。卽ち、一つの純粹に理論的な探究に對してそんなに向つ腹を立てると云ふは正しくないし、而も彼が自分の云はうと欲したところ、云はうと欲しなかつたところを本來よく知つてゐたに違ひないとお考へになるであらう。

さうであればあゝ云ふ云ひ損ひをするにきまつてゐるか、それは多分まだ疑問であらう。

今度こそは私の尻尾を摑へたと貴方方は信じなさるであらう。「で、そんなのが先生の技法なんですね」と諸君の云つてゐられるのが私には聞える。「云ひ損ひをした本人が先生のお氣に入るやうなことを云つた場合には先生はそこに窮極の權威を認め「現に彼が自分でさう云つてゐる」と云はれるが、もしお氣に召さぬことを云つた時には「あれの云ふことは出鱈目だ、信用するに足らぬと仰言る」と。

なるほどその通りではあるが、併し私は諸君にこれと同じやうにいさゝか怪しい場合のあることを話して見よう。被告が裁判官の前にあつてその行爲を承認した場合には、裁判官はその告白を信ずるが、併し彼がそれを否認した場合には裁判官はそれを信じない。併し、かう云ふ風にやるより外に、何とも仕方がないではないか。で、時々の誤謬はあるにもせよ、諸君はこの制度をやはり採用せしめるより外はないであらう。

「では、先生は裁判官だとすると、云ひ損ひをした者は先生の前では被告なんですか。それでは、云ひ損ひは一つの犯罪なのですか？」

多分我々は、この比喩を單なる比喩として拒否するには及ばないであらう。が諸君よ、まァ御覽なさい。我々は行り損ひと云ふ一見何でもない問題を捉へてかくも深刻な別の樣相に到達した事を……。この別の樣相は我々には只今のところ何と片付けていゝのか分らない。裁判官と被告とが似たやうなものであると云ふことを根據にして豫め妥協を申込んでおく。受分析者自身が行り損ひの意味を承認した場合には、疑ひの餘地ないことを諸君は私に認められるであらう。意味を推定してもその直接の證據が得られない場合、受分析者が報告を肯んじない場合、更にまたその報告を與へ得るやうに彼が手近にゐない場合などには、仕方がないと云ふことは卒直に認めておく。そこで我々は、裁判の場合と同じで、附帶情況を擧げるが、それに依つても我々は或る場合には多少確實らしい決定を下すことが出來るが、また或る場合には依然不確實な決定しか下せないこともある。裁判では實際上の根據からして、やはり附帶情況を指標として犯行を確定するより

外はないが、我々にはそのやうな必要はない。併しながら我々はやはりそのやうな指標としての附帶狀況の評價を斷念しなければならないわけはない。一體科學が非常に明白に、強固に證明せられたる原理から成つてゐるものだと考へるならば、それは誤りであらう。またそのやうな要求を持出すことも無理であらう。かう云ふ要求は權威癖的な情操を煽るに過ぎない。そのやうな情操は自分の宗教的な教義を別の（よしんば學問的にもせよ）教義で置換へるに過ぎないのである。科學はその教義に於いてはたゞ僅少の自明的命題を有してゐるに過ぎない。寧ろ要請（主張）を持つてゐるに過ぎないのである。その要請に依つて科學は或る程度の蓋然性（眞實らしさ）に押進められて來たに過ぎないのである。人々がこのやうに確實さへの近接に於いて滿足を見出し、窮極の斷定が缺けてゐるに拘らず建設的な仕事を繼續して行くことが出來るならば、これ正に科學的思考法の一徵證であるのだ。

それでは、受分析者の供述が行り損ひの意味をそれ自身說明しない場合には、我々はその解釋の立場を何處に置くべきか、我々の證明の指標を何にとるべきか？　これはいろ〳〵な方面にとることが出來る。第一に、行り損ひ以外の種々な現象との類似から證明することが出來る。例へば、名前の云ひ損ひは故意的に名前をもぢるのと同じに輕侮的な意味があると我々が主張する如きである。それからまたその行り損ひが本人の如何なる心理的狀態にある時に起つたかと云ふその狀態から證明することも出來るであらうし、その行り損ひの本人の性格に關する我等の知識からすることも出來るであらうし、また本人が行り損ひの直前にどう云ふ氣持（その氣持の反應として行り損ひが生じたのだが）でゐたかと云ふ事からも證明出來よう。大抵の場合、我々はまづ一般的原則に從つて行り損ひの解釋を下して見るのであるが、從つてそれはまづたゞ一つの推定であり、解釋への前提であつて、我々は心理狀態を調べることによりその前提を確めて行くのである。多くの場合、我々はまたその後に生じ來る出來事を待つてゐなければならない。その出來事は云はゞ先の行り損ひに依つて豫報せられてあるので、やがて我々の豫期した通りになつて行くことがあるのである。

云ひ損ひの範圍内でと云ふ限定があると、それに就いての引例を與へることは容易でないが、併しこの分野に於いても適切な例がないことはない。若い婦人を begleitdigen したいと云つた青年は確かに内氣な男である。自分の夫に自分の與へたいと思ふものを與へてよいのだと云つた夫人は精力的な、家庭を自由に切廻してゐる夫人であることが分る。或はまた次の場合を考へて御覽なさい。

「コンコーディア」の或る總會に於いて、或る若い會員は一つの激しい反對演說を試みた。その演說中にその會員は會の

幹部連の事を Herren "Vorschussmitglieder" と呼びかけた。この語は Vorstand（總裁）と Ausschuss（委員）との結合のやうに思はれる。我々はこの會員に於いて何か或る障害的な傾向が彼の反對を押切つて擡頭して來たことを想像するであらう。その障害する傾向と云ふのは、Vorschuss（借金）に何か關係のあることに基いてゐたらしいのである。現に我々は彼の話者がいつも金錢に困つてをり、殊にその當時には借金する考へになつてゐたと云ふことを、或る人から確聞したのである。であるから、障害する意圖としては實際に次のやうな考が浮んでゐたのである。――反對はいゝ加減にしておけ、借金の世話になれるのはこの人達だからなと。

併し、もし行り損ひの他の分野に廣く例を求めるならば、右のやうな指標的證明は隨分豐富に我々は提供することが出來る。

或る人が平常はよく記憶してゐる誰かの固有名を忘れるが或ひはいくら骨を折つてもなか〳〵記憶してゐられないと云ふ場合には、彼がその名前の所有者に對して何か含むところがあり、そのためにその名を考へることを好まないのだと、我々は假定しようとする。かう云ふ行り損ひが次のやうな心理的立場に於いて發見せられたことを考へて見て下さい。

「Y君と云ふ人が或る婦人に戀したが成功しなかつた。ところがその婦人はX君と云ふ人に嫁いだ。ところがY君とX君とは久しい以前からの知合ひで、而も商賣上の關係で交渉があつたのだが、またしてもその名前を忘れるので、X君に手紙を書く段になるといつもその度毎に第三者にX君の名前を尋ねる仕末であつた。」（ユングの報告）

Y君は明かにその幸福な戀敵の事を知りたくなかつたのである。「あんな奴のことを考へてなるものか。」と云ふわけであらう。

また、或る婦人が醫者のところで共通の知人の事を尋ねた。その時、その知人の娘時代の名を用ひた。結婚してからの名前を彼女は忘れてしまつた。やがて彼女の告白するところに依ると、彼女はその知人の結婚には非常に不滿で、その夫は大嫌ひであつた。（ブリルの報告）

名前の忘却に就いては、なほ別の點で云ふべき事が多々あるが、只今の我々の興味から云つて、忘却の起きる心理的狀勢に主力を注がう。

決意の忘却は、その決意を實行すまいとする反對の流れに歸せらるべきは、極めて普通である。併しさう云ふ風に考へるのは精神分析に於いてのみではなく、普通に人々はさう考へてゐるのであるが、理論的にさう云はれると反對し出すのである。世話をしてゐる者が世話になつてゐる者に對して、その依賴を忘れたことを辯解しても、世話になつてゐる方ではそのまゝ呑込むことは出來ない。彼はすぐかう考へる「あ

の人はあまり問題にしてはゐないのだ。約束はしたが、元々してくれる氣はないのだ」と。それ故に、或る關係に於いては、やはり實生活に於いても忘却は罰せられる。これ等の行り損ひに就いての一般的の考へ方と精神分析の考へ方との差別はなくなつてゐるやうである。何處かの主婦が來客に對して「おや、今日お出でになりましたの？　さう〳〵、今日お招きしてあつたことすつかり忘れてをりました。」と云つて挨拶したと思つて御覽なさい。或ひは、何處かの若い男が愛人に向つて、この前に約束してあつた媾曳を忘れてゐたと告白しなければならなかつたと思つて御覽なさい。彼は確かに本當の事を云はないであらう。寧ろ卽座に、まことしやかな差支へを捜し出して來、そのためにどうしても出られなかつたので、それから後も便りが出來なかつたのだと云ふことであらう。軍隊に於いては何かを忘れたことの辯解は全然役に立たないことになつてをり、それに依つて懲罰を免れ得ないことを我々はよく承知してをり、またそれが當然だと考へないわけに行かないのである。こゝに於いて萬人の意見は一致してゐるのである。卽ち一定の行り損ひには意味があり、またその意味は如何なるものかと云ふ點に關して……。それではそのやうな見解を他種の行り損ひの上にも擴充し、それ等を十分に知悉しようとすることは何故に自然でないのであらうか。それに對しては勿論やはりまた一つの答辯が存在してゐるのである。

　このやうに、決意の忘却に意味あることが一般の人々に疑ひの餘地ないものであるならば、詩人たちがこのやうな行り損ひを同じ意味のものとして利用してゐるのを見ても、諸君は敢へて驚かないであらう。諸君の內でバーナード・ショーの『シーザーとクレオパトラ』を觀られた方、又は讀まれた方は記憶してゐられるであらうが、最後の場面に於いて別れて行くシーザーが何かをしなければならないのだが、それが想ひ出せないと云つて焦燥してゐるところがある。遂にそれが想起せられる。それはクレオパトラに別れを訣げに行くことであつた。この一寸した工夫に依つて詩人は大シーザーが優越感を持つてゐたことを示さうとしてゐるのだ。實は彼はさう云ふ優越感を持つてはゐなかつたし、且つ持たうとも考へてゐなかつたのだ。諸君は歷史的古文獻に依つて知ることが出來るやうに、シーザーはクレオパトラをローマに招き、彼女はそこで小さいシーザリオンと暮してをり、シーザー歿後はローマの都を落ち延びたのであつた。

　決意の忘却の場合は大體に於いて極めて明瞭であつて、行り損ひの意味の指標をその時の心理的狀態から引き出して來ようとする我等の意圖のためにはあまり役に立たない程である。それ故に我等はもつと意味の複雜な、容易に意味の觀破出來ない行り損ひ、卽ち紛失や置き忘れを問題にして見よう。

紛失は屢々我々には非常に苦しく感ぜられる偶然事であるが
そこにも、我々自身の意圖が介在してゐるのだと云つたなら
ば、諸君はまさかと思はれるであらう。併しながらさう云ふ
事實は豐富に觀察せられるのである。例へば、或る若い男が
大切にしてゐるクレイオン（鉛筆）を紛失した。その前日、
彼は妻の同胞から一通の手紙を受取つた。その手紙の終りの
あたりにはかう書いてあつた。「小生はもはや貴君の輕佻と怠
惰とを支持すべき興味も時間も持合せてゐない」と。（ダットナー報告）ところで、例の鉛筆はその義兄の贈りものであつ
た。かう云ふ一致點がなかつたら、我々とても勿論、そんな
義兄の贈物の鉛筆など、どうにでもなれと云ふやうな意圖が
その紛失に與つてゐたと云ふ主張は出來ないであらう。類例
は極めて豐富である。人々は或る品物に敵意を感じ、それを
考へたくなるとその品物を紛失する。またそのものに未
練がなくなり、もつとよいものと取りかへたいと思つてゐる
と、それを紛失する。物を落したり破つたり壞したりするこ
とにも、それに對して同じやうな意圖が働いてゐることは勿
論である。或る學校生徒が丁度その誕生日の前日に、彼の日
用品、例へばカバンや懷中時計を紛失したり、駄目にしたり
壞したりしたとすれば、それが偶然の事だと考へられるであ
らうか。

自分で片付けておいたものが見付からなくて非常に屢々つ
らい思ひをした人々は、置き忘れに意圖があるとは信じない
であらう。併しながら、置き忘れの隨伴事情からして、その
品を暫時又は當分片付けておきたいと云ふ傾向の存したこと
を推定し得る場合は稀でない。多分この種の最も美事な實例
は次のものであらう――。

或る若い男が私に語つた。「二、三年前私たち夫婦の間には
面白くないことがありました。私は妻があまり冷やかだと思
つてゐました。それに私は妻には非常に優れた性質があると
云ふことはよく分つてゐたのですが、それでも御互に何ら優
しみもなく一緒に暮してゐました。或る日、妻は散歩に出て
私の興味ある書物を買つて來て渡してくれました。妻がこの
やうに『氣をつけて』くれたことに對して感謝し、その書物
を讀んで見ると約束し、大事に仕舞つておいて再び發見しま
せんでした。その後數ヶ月は經つて、私は時々その行衞不明
の書物を思ひ出して捜して見たのですが、どうしても見付か
りませんでした。半年ばかり經つて、私達と離れて暮してゐ
た私の母が病氣になりました。妻は家を離れて母の看病に行
きました。病態は重くなり、妻の性質の最もよい方面が現は
れる機會となりました。或る晩、私は妻の行動に感激しつゝ
感謝に滿ちて家へ歸つて來ました。私は自分の机の方に歩き
これと云ふ考へもなく、併し夢遊病者のやうな確實さで或る
抽出をあけると、そこに一番上のところに、久しく尋ねあぐ

んでゐた書物が見つかりました。」動機がなくなつたので、置忘れの物品は自ら見付かつたのである。（續く）

精神分析學語彙（三八）

一、肛門帶域（Analzone）——糞便の排泄に、卽ち腸の最末端並びにそのあたりを一帶に肛門帶域と云ふ。このあたりは殊に二歲から四歲までの間、のみならずその他の幼兒期全般に亙つて、また多くの變態的並びに神經症的な人物に於いては、全生涯に亙つて、激しい性的亢奮の虜となるのである。幼兒は糞便を腸內に保留することに依つてこの帶域の亢奮の滿足を得、それの堆積に依つて腸筋肉を激しく緊張亢奮させ、やがて糞便が腸壁を通過するに際し腸粘膜に激しく苦しい快感を覺えるに至るのである。廣い意味に於いては、幽門以下の腸全體と臀部と會陰部とが肛門性感帶域に屬するのである。それは、肛門性感的性質の亢奮と肛門性感に依つて條件づけられた症候とは總てこれ等の個所に於いて表現せられるからである。

一、病歷回想（Anamnese）——病氣の前史、殊に患者がそれに就いての供述を云ふ。病歷回想は普通に醫師にとつては缺くべからざる治療上の參考資料である。神經症患者の供述する病歷回想は勿論そのまゝ鵜呑みにすべきものではなく、眉唾ものゝ點も少くはない。彼等の供述はその意圖があるにせよないにせよ、とにかく抑壓によつて多少の歪みを蒙つてゐるのである。そこには本質的な部分が脫落してゐたり、他の部分が補償的に誇張せられてあつたり、種々の關係が轉位せられてあつたりして、患者が自分の神經症に就いて初めの頃に供述した前史はやがて分析操作の進むに從つて種々雜多な是正を必要とするやうになつて行くものである。併しながら、或る患者のあらゆる神經症的症候の前史を十分に知ると云ふことは、勿論やはり、それ等の諸症候の發生過程を知ることであると共に、それ等症候を取除くための手懸りを得ることになるのである。併し、詳細精確な病歷前史は十分に分析して後に甫めて明かになるのである。精神分析の治療法は、この意味に於いて、本來分析處置の全期間に亙つての記憶發掘である。それは本能感情上の抵抗をその最深底にまで突込んで抉剔し來ることに依つて始めて可能となるのである。

一、發作（Anfall）——發作とは大抵は短期間持續する、併し激烈な症候、又は本能感情狀態の突然の襲來を云ふ。ヒステリーの發作は分析にとつては無上の興味あるものである。ヒステリー發作は大抵は言動的現象であつて、そこにはあらゆる動作、筋肉群の痙攣、硬直狀態などがある。發作中には泣いたり、笑つたり、叫んだりするのが屢々見られる。發作中に所謂背反弓（arc de cercle）を示すことも稀でない。その背反弓には精神的內容の存することをフロイドは夙く認識した。それ等は動作に飜譯せられた、默劇的に表現せられた、空想に外ならない。何れにもせよ、それを理解するには、夢を理解するのと同じに解釋的技法が必要である。

何となれば、夢の構成の機制には凝縮だの、種々雑多な同一化だの、時間的順序の轉倒、その他種々のことが起るやうに、ヒステリー發作に於いても、それ等の機制が歪みを與へる目的のために利用せられるのである。屢々また愛慾的行動は神經支配の逆轉に依つて表現せられる。例へば、抱擁はその逆の形態に兩腕を背後に廻して脊柱の上で手と手とが接觸せしめられるやうになる如きである。ヒステリー發作は常に、對象リビドー的努力の表現として採用せられてゐる、自己性感的滿足の代償である。その自己性感的滿足もやはり直接的に、屢々見られるものである。例へば、太股のところを押しつけたり、性器や太股をこすつたりする如きである。發作に於ける意識喪失に相當するものであり、たゞそれが長延かされ、擴張せられて、抑壓のために好都合な條件を作るのである。ヒステリー發作が如何なる場合に生ずるかと云ふと、（一）抑壓せられてゐるものゝ内容（それは發作に於いて露はになつてゐるのだが）が外的經驗に於いて觸發せられた場合に、聯想の條件に依つて生ずること。（二）一般的にリビドー亢奮が起つた場合に、肉體的に生ずること。（三）不快な苦痛な體驗を回避しようとする場合、即ち病氣への逃込みの場合。（四）發作の生ずることが患者にとつて都合のいゝ事のある場合に第二次的な諸傾向に奉仕するために。

癲癇の發作はまだ心理學上の説明がついてゐないが、フロイドの意見では、癲癇は本能の分裂してゐる狀態で、リビドーと破壞衝動との結合が解消して、自由になつた死の本能が、發作となつて勃發したものであらうと。

一、不安（Angst）—— 不安とは本能感情の或る狀態であつて、一聯の快苦感情に結合するにそれに相應する無氣力の神經狀態を以てし且つその狀態を知覺してゐるのを云ふ。本能感情の不安狀態はやがて危險の知覺を喚起するやうになる。もしその危險が現實的なものであれば、我々はそれに依つて喚起せられたる不安狀態を現實的不安狀態と呼ぶ。外的危險が脅威的に近付き來る時はまづ、感覺的な注意力は高潮せられて來、動作の緊張が生ずる。それは全く目的に協つた狀態であつて、これを不安用意狀態（Angst-bereischaft）と名付ける。この不安用意狀態はぐつたりとした、即ち合目的々ならざる不安狀態になつて終ることもあるし、或はたゞ危險信號だけを揭げ、逃避又は防禦と云ふ合目的々な反應となつて終ることもある。不安狀態なるものは、精神分析學の説明では、過去の非常に强力な外傷的體驗たる出産の反復である。かくしてそこに反復せられるのは、嘗て出産と云ふ外傷的體驗に對して起した合目的的の反應と當時經驗した種々の感情とである。出産口に於ける窮屈な感じは不安時の締めつけられるやうな感じに於いて繰返され、出産時に酸素缺乏が條件となつて心臟鼓動の急速化や呼吸困難があると、それ等がやはり不安狀態に於いて擡頭して來る。不安と結びついてゐる强烈な不快はやはり嬰兒が出産時に受けた不快の反復である。（この項續く）

內外彙報

『國際分析誌及イマゴー』の復興

舊オースタリ國の政治的變動のために、あふりを喰つて一年以上休刊を續けてゐた精神分析學のドイツ文雜誌『國際精神分析學雜誌』と『イマゴー』の兩誌は、最近一九三九年度第一、第二册合卷として二四〇頁に垂んとする尨然たる大册をロンドンの新發行所から本研究所に送つて來た。本年度分は第二十四卷として一九三七年度分の第二十三卷を繼續するものと見なされ、今後はこの單一の雜誌が從前の二種の雜誌の傳統を承繼することになつたわけである。內容の題目だけを紹介するならば——

一、「一靈性に於ける進步」ジグムント・フロイド（ロンドン）
一、「一定の抵抗形式に就いて」ヘレーネ・ドイチ（ボストン）
一、「空想の擬似論理の經濟に就いて「オットー・フェニヘル（ロスアンヂエルス）
一、「母への愛と母性愛」アリース・バリント（マンチエスター）
一、「自我の强さと自我の弱さ」ヘルマン・ヌーンベルグ（ニウヨーク）
一、「自我心理學と順應の問題」ハインツ・ハルトマン（パリ）
一、「解釋の標準」ローベルト・ヴエルダー（ボストン）
一、「身振りとしての笑ひ」エルンスト・クリース（ロンドン）
一、「精神分析本能說の歷史的大觀」ハンス・クリストフエル（バーゼル）
一、「分析に於ける構成の療法的價値」カタン（ハーグ）
一、新刊批評紹介。分析學會事業報告

英文『國際神精分析學雜誌』

既報の如く英國ロンドン精神分析研究所長ジョンズ博士と、本研究所の大槻氏との間に協定成つて、英文『國際精神分析學雜誌』と本誌とは、本年度から交換することゝなつた。次に第　十卷第一號の內容題目を紹介する。

一、「モーゼもしエヂプト人ならば」ジグムント・フロイド（ロンドン）
一、「フロイド教授のユダヤ一神教研究に關してアケナンテンの問題を論ず」ジエイズ・ストレーチ（ロンドン）
一、「デカルトの夢（學問決定の無意識的要素）」スティーヴン・シエーンベルガー（ブダペベト）
一、「心理に　ける均衡の問題」パウル・シルダー（ニウヨーク）
一、「精神分裂症に於ける退行」ロバート・バーク（ブダペスト）
一、「抵抗の諸形式」ヘレーネ・ドイチ（ボストン）
一、他誌所載論文短評——
一、新刊批評紹介。——一、各國分析學會報。

『精神分析季刊』本年度第二册

▲分析者モンロー・マイヤーの死を弔す。

一、「神經症者に於ける無意識的幻像」フリッツ・ウイッテルズ（ニウヨーク）

一、「精神分析技法の諸問題」オットー・フエニヘル（ロスアンヂエルス）

一、「精神分析例記錄」レオン・サウル（シカゴ）

一、「女子性感發達の諸問題」クルト・アイスラー（シカゴ）

一、「或る少女に於けるペニスナイドの心理」キリアム・バレット（ボストン）

一、「分析時に於ける分析者の心理」カール・ヘロールド（ニウヨーク）

一、新刊批評、紹介。

一、米國内に於ける分析學界活動報告。

『心身醫學雜誌』創刊號

ニウヨークの分析者フランツ・アレキサンダーが、人類學及心理學の研究團體を起し、この雜誌を機關として發行することになつた旨は第七卷第四號（册子）に於いて既に報告したが、その創刊號が到着した故、左にその內容の題目を紹介する。

一、「創刊の辭」編輯部員。

一、「醫學の心理學的樣相」フランツ・アレキサンダ。

一、「心身相互關係に於ける腦の機能」ロイ・グリンカー。

一、「腦髓の實驗研究」イングラム。

一、「羊に於ける實驗的神經症」アンダスン。

一、「インシユリン及びメトラゾル療法の前後に於ける精神病患者の血壓、發行實驗」リロモン。

一、その他、論文、批評、通信など。

『メニンガー診療所報』第二、三册

一、「腦の腫脹の診斷及び處置」ウエクスラー。

一、「滿足を得ざる事情下に於ける精神病患者の反應」ブラウン。

一、その他、雜報、新刊評など。（以上第二册、以下第三册）

一、「腦腫張の分類」ジエイムズ・ケルノハン。

一、「醫學的及神經學的試驗に對する精神病患者の反應」ノーマン・ライダー。

一、その他。

國內關係時事

▲別項所載の通り、大槻憲二氏は五月六日、第一神戸中學校講堂にて「社會への再誕生」の題下に分析學の立場より講演し、また九日午前十時廿分には大阪中央放送局から「家庭を形作る心」について放送した。

▲大槻氏は五月廿三日、大正大學にて「精神分析學と人生」の題下に講演した。本誌特別誌友高瀨裕孝君（同大學生）の斡旋による。

▲大槻氏は六月十日午後一時より東京外國語學校にて「現代青年の悩み」の題下に講演した。同校ドイツ語科學生竹崎節夫君の斡旋による。

▲本研究所出版書「冷感症とその治療」は五月五日初版、六月十日再

版となつたが、この種の書にして公刊を許されたるは本書を以て最初とすると云ふ。

▲大槻氏は霜田靜志氏司會する子供の家兒童研究會例會（六月十二日夜、新宿エルテル）にて「精神分析と兒童教育」の題下に講演した。當夜の話の要領は「都新聞」家庭欄（六月十六日）に紹介せられた。

▲大槻氏は「科學知識普及會」主催の映畫「早春」試寫會に出席、會後座談會にも出席、座談の一部は「科學知識」六月號に掲げられてゐる。

▲大槻氏文筆近業一束——

一、赤面癖の分析治療——「通俗醫學」五月號。
一、典型的エディポス性格——「人生創造」五月號。
一、ロッパの人氣——「東寶」五月號。
一、潮花咲く浦の春——「書物展望」五月號。
一、ナルチスス性格論——「人生創造」六月號。
一、若い人生と熟した人生——同志五月號。
一、分析學から見た「早春」——國民新聞六月五日、六日。

▲本誌前號（册子）及び前々號の內容に就いてはそれ〴〵の廣告面を參照ありたし。

本研究所研究會例會

五月例會は十五日夜、アメリカン・ベーカリに於いて催された。食前、司會者から本誌前號所載「語彙」に就いての解説があり、食後、新來會者、高野順一（長崎氏紹介）高瀨裕孝（大正大學生）二氏の紹介があつた。

續いて大槻氏は關西旅行中の見聞感想を分析的見地から述べられた。本號アプフウブ欄に掲げてあるものとは種々な點で相違がある。例へば、二見ケ浦と蛙との關係如何と云ふやうな質問が塚崎茂明氏から出たが、これに就いての民俗心理學的解釋は非常に興味あるものであらうが、只今簡單に結論することが出來ないけれども、恐らくは蛙は巨母象徴であるから、この地は太陽出產の地として土地そのものが巨母象徴であるから、そこへ巨母象徴たる蛙が無意識聯想的に結びつけられたものではなからうかとの推定が下された。

その他種々興味ある話題に花が咲いたが、纏つた話になつたのは少なかつた。併し世間にありふれた座談會などよりは遙に內容豐富であつたことは確である。出席者は右言及四氏の他に、長崎文治、宮崎正路、鈴木正平、田中虎男、小林一、霜田靜志、藤澤由美、黒田敬次の諸氏であつた。なほ、岩倉具榮、倉橋久雄、高橋鐵の諸氏からは鄭重な缺席挨拶があつた。

本研究所講習會

五月例會は二日夜、研究所に於いて催された。當夜は「文明と不滿」の第一章「大海原のやうな感情」、第二章「宗教は幸福を與へるか」を精讀した。この書は今まで讀んで來た『宗教の未來』の續篇の如きもので、『宗教の未來』を讀んだ或る人（多分牧師から分析者に改宗したプヰスターか）からの質問に答へたものである。これ等二章

は『宗教の未來』の補說である。第一章に云つてゐることは「一つの感情がエネルキーの源泉たり得るのは その感情自身が一つの强烈な要求の表現である場合に於いてのみである。宗教的要求を幼兒の無力、並びに彼等が父親への憧憬から引出して來ようと云ふのは、私には無理なやうに思へる。」と云ふ一節に於いて凝結してゐるやうに思へる。この理論的攻撃に對して信仰的、ドクマ的默殺以外に敵討の途はあるまい。

第三章は六月例會(五日夜)に於いて精讀せられた。これは「文明とは何か」と題し、その本質を闡明せんとしたと云ふよりは、文明は本來人間が意識的に努力して作つたもの、また現に作りつゝあるものであるに拘らず、あまり人間を幸福にするものではなく、一見幸福にしたやうに見えてはゐるが、深いところでは却つて不幸にしてゐる部分の方が多いと云ふことを、種々の實例に就いて明かにし、續いて、第四章に於いて、抑々文明は如何なる動機によつて、生れたのであるかを分析的見地から闡明せんとするの出發點としてゐるのである。

×

五月例會及び六月例會の出席者は、倉橋、田中、大場、黑澤、馬場大槻夫妻、、山口、宮崎の諸氏であつた。

研究所だより

▲小山良修氏近信――「先日妙高から野尻へ出て一茶の墓に詣でました。梅雨はいけません、人情をもやもやさせて妙な執着にとらはれて困りました。十九日は鄕里長岡の落城記念日で、又も硏究會には失禮いたします。」(六月十五日)

▲長谷川誠也氏近信――「放送用語調査會の方の用事で放送會館へ隔日に出かけてゐます。早稻田大學の方は土曜日一日にまとめてもらひました。學校も近く休みになりますから、それを待つて原稿の方も勉强したいと思つてゐます。」(六月十五日)

▲特別誌友賀屋勝己君は小倉第十四聯隊へ入營せられました。

▲特別誌友多葉田伊ノ助君は南支派遣軍に加はり、目下廣東郊外で軍務に服してゐられます。

▲特別誌友狩野儀三郎君は、同じく南支派遣軍に屬し、張家口方面で軍務に精勵してゐられます。且つ先日はいろ／＼支那の面白い分析資料を送つて下さいました。

新刊紹介 (七一頁への補足)

▼『川柳辭彙』大曲駒村著――宮田戊子評

江戸時代の人情風俗は、我々の時代とさう遠くないのに知らないことが却つてそれ以前の時代より多い。これが川柳のやうに、あらゆる人情風俗を取扱ひ しかも表現が端的なものになると一層わかりにくゝなる。然し、わかりにくいとて匙を投げてしまふのは學徒のなさざるところである。本書は江戸時代を知るに最も重要な資料たる川柳に關して、その中に含まれてゐる言葉の難解なものをアイウエオ順に配列して說明し、例句を添へ、その例句の說明までも忘れず、風俗等にかゝはるものには挿繪を附したもので、川柳辭彙とは著者の謙遜な

命題で、實は廣汎な江戸時代用語の解説書なのであつて、此時代に關心をもつ者の必讀書である。次第に大量出版に流れつゝある輓近の我國の出版界に、この虔しやかな良書の刊行せらるゝは慶賀に堪へないが、著者のこの書に費した努力に敬意を表する人は、この刊行を支持することを忘れてはならない。（一月一册宛刊行一年完成の豫定、會費一圓五十錢、但し申込數三百口以上の時は一圓二十錢、四百口以上の時は一圓、發行所豐島區西巣鴨一ノ二二二四川柳辭彙刊行會）

質疑應答

「負けるは勝ち」の意味に就いて

問――五月二十日の讀賣新聞に正宗鳥氏はいつもの調子で、「負けるが勝ち？」と題して左記のやうに論じてゐましたが、どうも論旨アイマイですが、分析學の立場から一つはつきりとこの語の意味をお教へ下さい。念のために正宗氏の論の要旨を拔萃して見ます。（山村生）

「日本人には負けるが勝ちといふ諺がある。これはトルストイ及びガンヂーの更になほ、福音書の教義と全く似てゐるではないか」とチエンバレンはいつてゐるが、その諺に彼は好感を寄せたゐるのであらう。

ところが、私は、幾日か相撲を觀續けてゐると、土俵の上では絶對に勝たねばならぬ。「勝つたは勝ち」「負けたは負け」で、そこに餘計な文句を入れる餘地はない。

どこまで行つても勝者は讃美され敗者は無視されるのが、人類社會生物界、宇宙及び國技館土俵上の定則でありさうだが、しかし「負けるのが勝ち」も、必ずしも愚な諺ではなさゝうだ。我々は、相撲を觀續けるとはいへ、せいぜい三日か四日か五日か十日かに過ぎないのであるが、これが二場所三場所、十場所百場所千場所と觀續けて本當の大角通になつたなら「負けるが勝ち」といふ眞理にぶつつかるかも知れない。或ひは「負けるは負け」「勝つも負け」といふ眞理に壓し付けられるかも知れない。

福音書のなかに、キリストが「我れすでに世に勝てり」と、戰鬪開始前に勝利を確定してかゝつた言葉を吐いてゐるが、私は少年の頃この言葉を聽かされて不思議に感じさゝれて以來今なほその内容が分らない。」

×

答――なるほど如何にも白鳥氏らしい口調です。氏の面白味は人間の無意識願望に基く幼兒的な空想や甘い夢に對して自然主義的な冷嚴さで扱ふその强さにあるのですが、その願望は氏自身が大衆と共に頒前してゐることを氣付いてゐないらしいところにをかし味があるやうです。

「負けるは勝ち」と云ふ言葉は、負けても勝つたと考へたい大衆、「死んでも死なない」と考へたい俗衆には非常に願望充足的で、さう云ふ意味にとつた場合を白鳥氏はまづ第一に嘲笑してゐます。これはいつもの白鳥氏の行き方です。

ところでチエムバレンが、この言葉を日本人に向つて殘らうと云ふ

のは少し日本人を喰つた話です。「日本人よ、支那でお負けなさい。その方が勝つことになるよ、現に支那は負けて勝たうとしてゐるよ」と云ふ意味なら、折角だが我々は返上する。何となれば、それは結局、英國には一番都合のいゝ事になるからだ。

ところで「負けるが勝ち」と云ふ諺が眞理になる場合があるやうだが、白鳥氏にはそれがよく分らないと告白してゐる。分者析として指摘し得る唯一の「負けて勝つ」場合は、相手が勝つことに依つてやがて彼自身の超自我の苛責を被るであらうことが、明かに見えすいてゐる場合である。さう云ふ場合には、相手は外界に投出せられた內的不安の防禦のために我等に向つて攻勢をとつてゐるのであるから、その勢ひはとても恐ろしい。それを眞正面から受けたら、大抵のものは少くとも傷ぐらゐはつけられる。その場合には、肩すかしをして相手をして相手自身の力で倒させるか、或は先にころんでしまつて相手の勢を全部的に自分に引受けないやうにするか何れかの方法をとるより外はない。

も一つ負けて勝つことの可能な場合は現在彼を相手にして戰つては損な場合である。あとでいつかは勝てると云ふ自信があり、目安がついてゐるが、只今は戰つても勝目がないと云ふ場合、又は戰つて見ても始まらない場合、又は戰ふべく相手があまりに下らない場合（韓信の股くゞりの如き）には、いさぎよく負けておくに限るのである。人間は最後の勝利を得ればそれでいゝので、それまでは何度負けても一向差支へはない。

「勝つことばかり知りて負けることを知らざれば災その身に及ぶ」と德川家康は云つてゐるが、これは「負けるが勝」と云ふ意味とは違ふが、勝つためには負けることも必要だと云ふ意味であるから、多少の關係もないことはない。何故必要かと云ふに、勝つことばかり知つてゐて負けることを知らぬと云ふのは、負けを負けとして認識しない認識したくないと云ふことで、幼兒的チルチスムスの保全を死守することで、これでは現實原則に合はぬ性格であることを意味するから、到底勝てる見込みがないと云ふことになるのである。（記者）

（附　　錄）

RÊVES EXPLIQUÉS

Par

Dr. René Allendy

夢の分析入門

ルネ・アランディ
延島英一譯

譯者小序

この「夢の分析入門」は、フランスのルネ・アランディ博士が昨年著した「說明された夢」を飜譯したものである。博士は一八八九年パリに生れ、ソルボンヌ大學に學び、一九一二年、醫學博士の學位を授けられた人で、フランスで精神病の治療に精神分析を應用した最初の人である。現在社會科學自由大學と聖ジャック病院附屬研究所で精神分析を講義してゐる。博士の肖像及び詳しい自傳は本誌第五卷第二號に揭げてあるから、參照願ひたい。

アランディ博士は、精神分析者として恐らく世界で最も著作の多い人で、夢については本書のほかに、旣に「夢と其精神分析的解釋」及「夢と精神分析」の二著がある。博士の「西洋醫學の新傾向」が、櫻澤如一氏の手で邦譯が出てゐることは讀者の御承知のところであらう。

本書は夢の解釋の入門書として書かれたもので、著者は序文でこの書は精神分析研究者にとつて、外國語學習者に對する會話讀本と同じ役割を果すものだといつてゐる。本書に集められてゐる夢の例は、全部で二百五十五に上り、殆んどあらゆる方面にわたつて代表的なものを網羅してゐるのである。

第一章　夢の材料

夢が混亂した、意味を持たぬ産物では決してなく、正確な本能感情的意義を有し、瀉泄的機能を果すものであり、また無意識の判讀に達する「捷徑」たるものであることを現代に敎へた大功績は、フロイドに歸するのである。さういふ考へは、古代にもないではなかつたことがいひ得るにしても、フロイドが觀念聯合の方法により、全く新しい、極めて完全な解釋の方法を定めたことは動かせない。この方法の確定により、今日では經驗ある分析者が解釋に苦しむといふ夢は殆んどなくなつたのである。

フロイドの前にも、心理學者で夢の映像はいかなる因果關係で生ずるのかを研究した者が若干あつた。イェッセン、マイアー、ヘニング、ホッフラウアー、グレゴリー等の觀察者、マウリー、ヒルデブラント等の實驗者は、夢の表象は、睡眠中にある一定の解釋を通じて接受した、知覺的刺戟と關聯してゐることがあるのを立證した。例へば外部の音響が、警鐘や革命の夢を生ぜしむるがごときである。ヒルデブラントは、この解釋が人により、經驗によりいろ〳〵相違するのを明かにした。同じ音響に接しても、鐘の夢を見る人もあれば、馬車の鈴が夢に現はれる人もあり、壞れた皿を見る者もあるのである。また機能障碍（消化不良）や疾患（心臟性呼吸困難、僂痲質斯性疼痛）から生ずる内感が、同じ役割を演ずることがあること、時にはその微妙な作用により、進行中の疾病を覺醒時に症候が現はれる以前に、夢で敎へられることのあることも注意された。かくて彼等は、ヒポクラテス、ガリア人、支那人などの證明に合流したのである。一八九六年、モウルリー・フォルトは適切な諸實驗により、以上のごとくある知覺によつて暗示された映像が他のものに歸されることがあること、冒された患部が全く異る一つの全體として現はれることがあること、知覺が運動と聯合し、運動が觀念と聯

合することがあることを立證した。既に一八六一年にシェルナーは、夢がすべての印象を可型性の映像に變換し、對象を往々象徴によつて指示し、夢を見てゐる本人を想像された現實に混入させる傾向を持つてゐるのを看破したのである。彼は肉體の諸部分を譬喩で表象する幾多の象徴をくり返し説明してゐる。それは精神分析者にとつて興味少しとしない。次に私の個人的觀察から得た四五の例をあげて見よう。

第一例　直腸癌に罹り、ある程度の閉塞に惱んでゐる女性。

夢――自分は暗い、劃然としてゐない、曲りくねつた廊下を歩いてゐる。自分は何か障碍物が、自分の前へ進むのを邪魔してゐる印象を得た。

第二例　乳癌を患つてゐる他の女性が、手術を前にして見た夢。

夢――自分の家で大工事が行はれてゐる。家屋正面の一部を引込めようといふのである。白い服を着た一人の石工（手術着の外科醫？）が、自分が材料置場の溝に落ちようとするのを助けてくれた。（この女性は一年の後死んだのである。）

第三例　一人の男性が、夢でテーブルの下に兩足の下肢だけが立つてゐるのを見た。降靈術の實體化の場面である。雨下肢は前に進んで、彼にとびかゝつた。そこで彼は眼がさめたのである。

眼がさめると、この患者は自分の兩足の下肢の部分だけが、冷汗でびつしより濡れてゐるのに氣がついた。

第四例　治癒期にある男性の結核患者が、一隊の園丁が庭園を掃除し、雜草を抜きとり、大きな蟲を一匹引出し、庭の割目を噴水で洗つてゐる夢を見た。誰かゞこれが乾けばすつかり癒るといふのを聞いた。

解釋――この夢には、肺病に對する明白な暗示がある。患者は「それが乾けば癒る。」

第五例　ある若い男性が、遺精で眼をさます前に夢を見た。

夢――自分は一人の女性と野天のカフエーの中にゐた。洋傘が開かれた（勃起）。雨が降りはじめた（射精）。

ある種の毒物（アルコール、阿片等）が、特殊の夢を生じさせる理由は、この知覺と夢の映像の關係に關する知識に照して見ればよくわかつて來る。コカインのごとき末梢感覺の力を削ぐものは、浮揚の印象を與へることがあり、運動機關を冒すものは、倦怠なる運動の印象を生むのである。內分泌腺の狀態も影響を生ずることがある。ハインリッヒ・メングの觀察したところでは、卵巢エキスの吸收は受動性の夢を生む。氣象的要因もまたある役割を演ずることがある。フロイドは、H・スウォボダの二十八日を一期とする生物的週期性のある種の循環に關する發見は、月の週轉と一致してゐると述べてゐる。

しかしながらかゝる物質的または臟器的諸要因の分析は、結局極度の繁雜を招くに終つたのである。夢を見てゐる人のあらゆる知覺、すなはち可能な共在感情のすべてをいかにして確定するか？　こゝに至つて心理的性質の一つの中心要素、かゝるすべての刺戟の作用を分極し、それを特定の表象、夢を見てゐる人の個人的產物に導く力のある作因が研究されねばならなくなつた。

古代人は、情緒が影響することをいつてゐた。一部の心理學者は、夢はその日の感情に喚られると主張してゐる（ホッフナー、ウェイガント、マウリー、マース）。反對に夢は每日の齷齪が種だといふ心理學者もある（ブルダッハ、フィヒテ、ストルムペル）。ヒルデブラントは結局この二つの見解を程よく折衷して、夢はその要素を現實からとるが、しかしその現實から脫するといつてゐる。

記憶の影響もまた研究された。そしてデルブーフは個人的な經驗によつて、意識によつてとうの昔に忘れられた要素が夢の中に再現することがあるのを立證した。しかしながらそれには、最近の印象がその記憶を再び發動させねばならない。

私の知つてゐるある大學敎授は、不愉快な狀態（病氣、苦勞）に面するごとに、必らず自分が昔非常な不安と不健康な狀態で受けた敎授選拔試驗の模樣を夢に見る。フロイドが試驗の夢がよく見られることについていつてゐるように、好成績でパスした試驗は決して夢に出て來ない（極く稀な例外はあるが、それは神經症的要因で說明される）。かゝる記憶の

喚起は、從つて一つの希望を含んでゐる。夢を見てゐる人は、前に自分は難かしい試練を通過したのだから、今度の事情にも同じように面することができると自分でいつてゐるのである。

その日の極く輕微な情緒が、過去の極めて緊張した記憶を再生させることもある（同僚との一寸した口論が、戰爭や突撃の物語を再生させることがある。）反對に大試練が、輕微な情緒の夢を見させることもある（死刑の判決を受けた囚人が、母校時代の質問の夢を見ることがある。）この場合に於いては、記憶の輕微性は、一つの慰藉であり、希望なのである。判決が重くなくてくれゝばよかつたのに！

古い記憶が引續き連續的に再發動せしめられると、それは補足的な、追加的な意義を帶びることがあり、その本能感情的內容を累增的に增加して行くことがある。前に述べた大學教授の試驗の夢のように、それは段々といろ〳〵な意義を持つようになる。

さうかと思ふとまた、夢に先立つ日に經驗されたいくつかの事件が、同一の情緒または同一の感情と關聯するといふこともある。再發動が複合的に生ずるのである。かゝる場合には、多樣な要素が單一の場景の中に凝縮される傾向がある。

第六例　妻のある若い、非常に氣の小さい男性。滿々たる浮氣心を持つてゐるのだが、實行の決心がつかずにゐる。妻に對しては、幼兒的な態度で戀着してゐる。一夜カジノ・ド・バリに出かけてクールール（ランニング選手）のラヅーメーグが女優にとりかこまれてゐるのを見た。歸宅してから、自分が女優たちに對して感じた慾望のことを妻に語つた。妻は彼をクールール（漁色者）だといひ、二人は議論に花を咲かせたが、結局彼は妻をシャモオ（莫連女）だと罵つて寢てしまつた。その夜彼は次の夢を見た。

夢――自分は群衆を前に雄辯をふるひ、ある惡漢に對して一種の十字軍の必要を說いてゐた。この惡漢は大力なので、誰も捕へようとしないのである。次いで自分はこの惡漢が駈足でやつて來て、斜面をかけ上つて越すのを見た。自分は斜面をよぢ登つて、彼が乘越した場所まで昇らうと試みた。自分はシャモオ（駱駝）に綱をつけて引張つてゐる。昇るのは

非常に骨が折れたが、殊に駱駝が自分の思ふ通りに進まず、途中で止つて動かない。人々は自分に聲をかけ、駱駝から手を離して下へ落せ、落しても心配はないといふ。そこで自分は心を定めて駱駝を下に落した。

聯想――演說――自分は小心なために、多勢の人の前で話をすることは、いつも非常に骨が折れる。自分は世の中で一番難かしいのは、公衆の前で演說することだといふ氣がしてゐる。自分は吃ることが往々あるのである。

惡漢――誰のことか自分にはわからない。自分はよく知らぬが、何か批難すべきことを行つた人間である。

彼の大力――力が強いこと、男性的であること。女性に對して成功を贏ち得ること。

駈足――選手ラヅーメーグが、カジノ・ド・パリで女優にかこまれてゐた。

斜面――何か凹んだもの。人眼を忍ぶといふ觀念。自分は子供の時分、女の子にやる花をさがすのと、友達を驚かすために、海邊で危險な斷崖をよぢ上つたことがある。

シャモオ（駱駝。隱語で莫連女を意味す。）――自分の友達の中に一人、自分の氣に入らない女のことを誰でも構はずシャモオといふのがゐる。

解釋――この夢のはじめの方は、大成功を收めたいといふ願望、群衆の前で雄辯に、大膽に演說したいといふ願望を實現してゐる。その上この大膽さは、誰かハッキリせぬ、恐るべき力を持つある敵對者に對する攻擊である。それは父親映像の力に對抗して、強くなるといふこと、すなはちそれを捕へる（去勢する）といふことゝ關聯してゐるのである。夢を見てゐる本人がその能力を得れば、彼は女性に對して成功を主張し得ることになる（女優にかこまれた選手に倣へることになる。）こゝで注意すべきは、男性的性本能（惡漢）の行使に罪惡の觀念が伴つてゐることである。それはかくさねばならぬことである（斜面、人眼を忍ぶ所）。昇るといふことは、大きくなりたい意志を示し、子供時代に女の子たちの前で示した手柄を思ひ起させる。これは將來のために、過去の中に探された激勵である。駱駝は明かにこの征服的男性力を阻碍する女性、すなはち彼の男性力に敵意を示す母親と、彼が幼兒的な依存感で結ばれてゐる妻の象徵である。一個のド

ン・フワンになるためには、この依存關係を破毀し「駱駝から手を離して、下へ落さなければならぬ。」

以上の例に示された凝縮は、夢の過程を典型的に示してゐる。相似た性質の記憶と印象が、この形式で接合する傾向のあることは次の例で明かであらう。

第七例　醫師に對して一般に好意を寄せてゐる女性。それは醫師の仕事の父親的側面が、彼女が非常に愛してゐた父親の愛撫を思ひ起させるからである。診察を受けに行つた日の夜、次の夢を見た。

夢――一人の男性が、自分の胸の上に頭をのせてゐる。それは父親を看護した、父親の友人の醫師であつた。その上その男性は、自分の今かゝつてゐる醫師にも似てゐた。

この凝縮は、事實に於いて死んだ父親の愛撫を、他の愛撫で代償しようとする感情的努力なのである。

知覺的興奮が突然に心理的要素と混合し、その暗示する映像が、とにかくある一つの論理を以つて、記憶に補强されて展開する夢の流れの中で複合するといふこともある。

第八例　寢る前にアルサスの發電水路工事の棒事の記事を新聞で讀んだ女性の夢。この水路工事が完成すれば、ブラン(白)湖の水がノアール(黑)湖に流れるのである。

夢――自分は設計プラン作成のために、ノアール湖とブラン湖の上空を飛翔する任を帶びた飛行士であつた。自分はそのプランを受取つた。それには家々の屋敷跡がのつてゐたが、家具や寢臺の配置まで記載してあるのである。寢臺のところには、その上に寢てゐる人々まで圖式的に描かれてゐた。

解釋――女性が自分が男であるといふ夢を見るのは、ある程度の性的倒錯が存在してゐることとの證據である。この倒錯は、當然幼兒時代のコムプレクス、殊にこの女性が父親と母親の關係を窃かに想像して自分で作り上げた性生活に關する

觀念から生じたものである。彼女はそれをブラン湖とノアール湖の神祕的な關係と、大椿事に關する觀念で象徴してゐるのである。彼女の願望は、自分が男性となつて事を支配（上空を飛翔する）ことにある。續いて結局のところ居住者の寢臺上の配置（兩親の寢臺上の神祕）と關聯してゐるブランの細目が出て來る。彼女からかくされてゐるものはもはや何一つない。

こゝまで夢が進んだ時、この夢を見てゐる女性の寢臺の傍の、街路に面した窓の外で、牛乳配達の娘が「その罎はミュラーへ持つて行つて」と、大きな聲で仲間にいつた。それは近所のミュラーといふ名（もしくはそれに音の近い名）の家へ配達される牛乳罎のことなのである。

この大聲で叫ばれた言葉は、眠つてゐるこの女性に接受されると、はじめの夢に接木された一種の第二の夢として、彼女の夢の中に一つの新しい場景を生じさせたのであつた。

附屬の夢——自分がそのプランを眺めてゐるところへ、助手が一人やつて來て、飛行機の中にラー・ミュロー（野鼠）がゐた、または野鼠を一罎つかまへたとかいふようなことを知らせた。自分は危險が自分に迫つてゐるとの印象を受けた。

解釋——ミュラーと聞いた名前が、顚倒されてラー・ミュに變じ、それに意味を持たせるためにラー・ミューローと補足されたのは面白い。（譯註 野鼠はミュローだけでわかり、普通はラーを加へないのである。）さてこの寄生動物の繁殖は、夢を見てゐるこの女性の性的關心を、子供の表象により夫婦生活から生ずる危險を以つて補足してゐるのである。こゝで知らねばならぬのは、この女性は實際に五歲の時妹の出生で精神的外傷を與へられ、無意識の中に母性に對する恐怖をいだいたのであり、それが彼女の性的倒錯の主要要素の一つとなつてゐることである。この解釋は、こゝには現はれなかつたほかの觀念をも參酌した結果である。

以上を要約するに、夢を構成する材料は、生理的興奮（知覺、共在感情）か、または心理的興奮（情緖、記憶）から生

するのである。次に知らねばならぬのは、どういふ理由でこれらの材料は集合するのか、その集合はどういふ計畫に從つて行はれるのかといふことである。繪畫の説明に、畫布がどこで織られたか、繪具は誰が賣つたか、額縁の寸法は幾尺幾寸かなどといふことをいくら述べても説明にはならない。それと同じく、我々は夢の中に一つの力學と一つの目的を探さねばならぬのではなからうか。

編輯後記

愛憎心理の研究としては相當親切に編輯して見たつもりですが、如何でせうか。本誌第四巻五號「愛慾葛藤の諸問題」號も、參考して下さるならば一層得るところが多からうと存じます。

×

岩倉氏譯セガンチィニは本號を以て完結しました。何と面白い論文ではないでせうか。何とかこの名著を單行本化したいと思つてゐます。

×

宮田齊氏譯の「教育者のための精神分析概論」は先號正誌で終りましたが、近く某書店から單行本として出版せられる筈です。出版の上は何卒御支援を願ひます。

×

宮田戊子氏の大論文は愈々迫力を以て續けられます。次號にはまた「芭蕉の無意識的象徴」と題して六〇枚の續稿が掲げられることになつてゐます。

延島氏は豫約の如く本號からアランディの「夢の分析入門」を譯して連載して下さいます。期待して下さい。

×

高村光太郎氏作フロイド賞牌は大變美事なものが出來ましたが、銅の配給が統制を受けてゐるので、大變仕事がやりにくゝ、その上銅化する仕事の當事者たる令弟高村豐周氏が朝鮮の方に旅行せられたりして、旁ら大變に遲れまして、取敢へず石膏の原作から寫眞にとつて表紙に掲げて見ました。なかなか立派なもので、フロイド博士これを見たら日本美術家の技藝に驚くだらうと思ひます。

×

「冷感症とその治療」は別項で報告の通り忽ち再版になりました。再版のは紙も上等のを用ゐ、表紙も固いのにしました。御精讀を希望します。

「社會生活法」(人生創造社發行)は最近に五版が出ました。愈々讀者を增して行きます定價が一圓二十錢になりました。製産費騰貴のため已むを得ないやうです。

フロイド全集中では「日常生活の精神分析」と「分析戀愛論」とが目下重版中です。御註文の方々は一寸お待ち下さい。

×

その後の新特別誌友諸氏を左に御紹介申上げます。御支援を深謝し、今後も永くよろしく願上げます。

▲山口縣……大空良利氏
▲廣島市……久保逸郎氏
▲千葉縣……露木光輝氏
▲豐島區……山元祥弘氏
▲久留米市……土屋邦加氏
▲大阪市……平塚　博氏
▲下谷區……高木康眞氏
▲松本市……中田廣吉氏
▲別府市……堀田和義氏
▲朝　鮮……李　國柱氏
▲兵庫縣……鹽谷榮吉氏
▲世田ヶ谷區…平野直人氏
▲瀧野川區……岩佐榮林氏
▲大連市……廣松正滿氏
（石原石郎氏紹介）
▲仙臺市……伊藤喜七氏

舊來の特別誌友にして繼續誌代御送附下さつた方々には、それぞれ御挨拶申上げましたが、こゝに重ねて御禮申上げます。

×

次號正誌は『精神病研究』の特輯號といたします。斷種法の問題が愈々急を告げて來ました今日、我等の立場から一應研究すべきものを研究し、主張すべきものを主張せねばなりますまい。この前に『神經症研究』を出しました時に直ぐに續いてこれを出すべき筈のところ、準備がありまして、今まで滿を持してゐました。

巻頭には東北帝大醫學部の山村道雄氏がインシュリン治療法に關して分析的見地から寄稿して下さる約束になつてをります。次には大槻氏の『精神病と神經症』との比較研究、竹崎節夫氏譯の『精神病患者の繪畫』と云ふ興味ある論文などが豫定せられてあります。高橋鐵氏は久しぶりに『精神病者の文學』と題して執筆して下さることになりました。

岩倉氏は今度は筆を改めて、D・H・ロレンスの論文を譯して下さる筈ですし、宮田齊氏も多分アナ・フロイドの別の論文『兒童分析技法』を譯して下さるでせう。

昭和十四年六月二十五日印刷
昭和十四年七月一日發行
（月刊）定價　五十錢
（外地定價）　五十五錢

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人　大槻憲二
東京市板橋區板橋町三ノ六四
印刷所　帝都印刷株式會社

定價一部　五十錢（送料共）
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御註文規定

●本誌の御註文は一切前金に御願ひ致します。
●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
●切手代用の場合は一割增に願ひます
●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館
北隆館・(大阪)福音社

合本 單冊「精神分析」（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一卷・上

創刊號（昭和八年五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同　六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」＊
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

第一卷・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號（第一）＊
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

第二卷・上

第一號（同九年一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」＊
第三號（同　三月）「傳說研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
（合本としては品切）

第二卷・下

第五號（同　五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」＊
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」
（合本としては品切）

第三卷

第一號（同十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同　三・四月）「宗教心理研究號」＊
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
（合本としては品切）

第四卷

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と教育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金　三　圓（送料十五錢）

第五卷

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」
第五號（同　九・十月）「男女性格分析」
第六號（同　十一・十二月）「幼兒心理研究」
金　三　圓（送料十五錢）

＊印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

『精神分析』第六巻 合本內容

第一號（一、二月號）夢と象徵（正誌）
第二號（三月號）文藝と繪畫（正誌）
第三號（四月號）東洋醫學と分析（冊子）
第四號（五月號）處女性の問題（正誌）
第五號（六月號）斷種法と優生學（冊子）
第六號（七月號）貞操の心理（正誌）
第七號（八月號）受分析者の心得（冊子）
第八號（九月號）自己愛の硏究（正誌）
第九號（十月號）分析學邦文献（冊子）
第十號（十一月號）神經症硏究（正誌）
第十一號（十二月號）分析學の勸め（冊子）

▲合本は送料共三圓五十錢▲單冊は正誌一部五十錢
冊子十錢（何れも送料共）

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。
一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。
一、特別誌友は偶數月發行「冊子精神分析」の無代配布を受く。
一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。
一、希望者は購讀料金と共に、住所、姓名は勿論、年齡、職業その他を報告ありたし。（且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。）

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
昭和十四年六月廿五日印刷納本
昭和十四年七月一日發行
毎月一回一日發行
精神分析
七月號
定價五十錢・外地定價五十五錢

VII. Jahrgang, Heft 7-8. Juli.—Aug., 1939. Erscheint zweimonatlich.

TOKIO ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

(Hefttitel: Liebe und Hass)

INHALT

Preis des Einzelhefetes, 50 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327. Dozakacho. Hongoku Tokio Nippon